

綿内遺跡群 高野遺跡

——長野市綿内中央土地区画整理事業地——

1999・3

長野市教育委員会

序

長野市域には1,300余の遺跡が周知されています。なかでも千曲川の両岸には自然堤防が発達し、帯状に遺構密集度の高い弥生時代以降の遺跡が複合して形成されるといった特色があります。綿内地域においても自然堤防が複雑に形成され、近年榎田遺跡のような大規模遺跡が次々と調査されるようになりました。

一方、この地域は高速交通網の整備に伴って各種の大型開発事業が進展しており、市街化の傾向にあります。これらと共に住宅の需要に応じて下水道などの整備改善、快適な住空間を求めて12区におよぶ土地区画整理事業が施行されることになりました。

この事業地は良好な自然堤防上にあたり、遺跡の範囲・性格を把握するため試掘調査をいたしましたところ、弥生時代から平安時代にかけての大遺跡であることが判明いたしました。そこで埋蔵文化財の保護協議のもとづき、開発事業に先立って平成8・9年度に発掘調査を実施し、記録保存をはかることになりました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財 第95集」として報告いたします。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として関係各方面に広くご活用いただければ、この上ない喜びであります。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり、多大なご支援をいただいた関係各位の皆様へ厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

長野市教育委員会教育長 久保 健

例 言

- 1 本書は、長野市綿内中央土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野市綿内中央土地区画整理組合理事長原田忠二と長野市長塚田 佐との委託契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 調査地は、長野市若穂綿内字高野6,336番地他に所在する。
- 4 調査は、地下埋設施設等で遺跡破壊の恐れのある道路部分を対象にしたが、宅地造成計画を検討したところ削平部分が生じることが判明し、3,600㎡を追加保護対象とした。総保護対象面積は12,700㎡である。
- 5 本書は、発掘調査によって検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 6 現況地形図等は土地区画整理組合より提供を受けた。微地形推定図は地点標高値を参考にして作製した。
- 7 遺構測量は、平面直角座標第Ⅲ系の座標値と日本水準原点の標高を基準として、コーデックシステムを採用するため縮写真測図研究所へ委託した。
- 8 遺構図は、1：80の縮尺を基本とし、井戸址・土墳墓・火葬址の一部を1：40、溝址を1：160で提示した。断面の数値は、標高380m＋数値mをあらわす。
- 9 掲載図中、SB（住居址）・SKまたはK（土壘）・SEまたはE（井戸址・大形土壘）・SDまたはD（溝址）の略号をもちいた。住居址図中、鎖線内は堅緻な床面、アミ部は焼土・炭化物をあらわす。
- 10 遺物図は、玉類を実寸、土・石・金属製品を1：2、土器類を1：4の縮尺で提示した。弥生式土器実測図中のアミ部は赤彩を示し、土器断面の塗りつぶしは須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器である。
- 11 遺跡の略号は「TKNO」とした。
- 12 本書の執筆は、千野浩（IV-1-4）、飯島哲也（III-1）、山田美弥子（I-3・4）で、他は矢口忠良が担当した。
- 13 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序
例 言
目 次

I	調査の経過	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査の事務経過	2
3	調査日誌(抄)	3
4	調査の体制	4
II	調査地周辺の環境	6
1	地理的環境	6
2	考古学的環境	10
3	古代の歴史的環境	12
III	調査概要	13
1	試掘調査	13
(1)	調査の目的	13
(2)	調査方法	13
(3)	調査結果	13
2	調査の方法	13
3	調査地の概要	15
4	遺構の分布	17
IV	遺構と遺物	18
1	弥生時代の遺構と遺物	18
(1)	遺構の分布	18
(2)	住居址	20
(3)	土壇	21
(4)	遺物	37
2	古墳時代の遺構と遺物	71
(1)	遺構の分布	71
(2)	住居址(前期)	72
(3)	住居址(後期)	73
(4)	遺物(前期)	80
(5)	遺物(後期)	80
3	奈良時代の遺構と遺物	86
(1)	遺構の分布	86
(2)	住居址	86
(3)	掘立柱建物址	86
(4)	遺物	86
4	平安時代の遺構と遺物	88
(1)	遺構の分布	88
(2)	住居址	88
(3)	柱穴(土壇)群	90
(4)	小鍛冶址	90
(5)	井戸址	90
(6)	土壇墓	90
(7)	火葬址	90
(8)	溝址	90
(9)	遺物	164

挿 図 目 次

図 1	調査地 印 および川中島扇状地図	6
図 2	調査地 印 おとび周辺地形図	7
図 3	長野市防災基本図地形分類図	8
図 4	調査地周辺の字境図	9
図 5	主要遺跡位置図	10
図 6	綿内遺跡群と近隣の遺跡分類図	11
図 7	試掘調査地および土層柱状図	14
図 8	微地形推定図	15
図 9	調査区遺構分布図	16
図 1 0	A区・E区・W区弥生時代刷穀住居址分布図	18
図 1 1	弥生時代後期遺構分類図	19
図 1 2	A区・X区・Y区弥生時代後期住居址分布図	20
図 1 3	A区弥生時代後期住居址実測図 1	23
図 1 4	A区弥生時代後期住居址実測図 2	24
図 1 5	A区弥生時代後期住居址、土壌実測図 3	25
図 1 6	B区・C区弥生時代後期住居址、溝址実測図	26
図 1 7	E区弥生時代後期住居址実測図	27
図 1 8	W区弥生時代後期住居址、土壌実測図	28
図 1 9	X区弥生時代後期住居址実測図 1	29
図 2 0	X区弥生時代後期住居址実測図 2	30
図 2 1	X区弥生時代後期住居址実測図 3	31
図 2 2	Y区弥生時代後期住居址実測図 1	32
図 2 3	Y区弥生時代後期住居址実測図 2	33
図 2 4	Y区弥生時代後期住居址実測図 3	34
図 2 5	Y区弥生時代後期住居址実測図 4	35
図 2 6	Y区弥生時代後期住居址実測図 5	36
図 2 7	A 20号 1、A 29号 2、A 31号 3、A 35号 4～9、A 48号 11～13 住居址出土土器実測図	40
図 2 8	A 45号 14～27 住居址出土土器実測図	41
図 2 9	B 11号 28 29、C 30～40 住居址出土土器実測図	42
図 3 0	C 7号 41、C 8号 42、E 8号 43、W 12号 44～49、W 13号 50～52、W 14号 53～56 住居址出土土器実測図	43
図 3 1	X 18号 57～63、X 25号 64 65、X 28号 66～68、X 29号 69～71、X 52号 72 73 住居址出土土器実測図	44
図 3 2	X 41号 74～82、X 45号 83～88、X 50号 89 住居址出土土器実測図	45
図 3 3	X 5 4号 90～92 住居址出土土器実測図	46
図 3 4	X 48号 93～97、X 51号 98～104、Y 11号 105～111 住居址出土土器実測図	47

図3 5	Y 11号 112~118、Y 16号 119、Y 24号 120~122、Y 29号 123~125、 Y 31号 126~129、Y 31号・32号 130~132、Y 36号 133 住居址出土土器実測図	48
図3 6	Y 30号 134~143 住居址出土土器実測図	49
図3 7	Y 32号 144~151、Y 34号 152~155 住居址出土土器実測図	50
図3 8	Y 51号 156~161、Y 52号 162163、Y 74号 164165、Y 75号 166、 Y 76号 167~169、Y 7 7号 170~173 住居址出土土器実測図	51
図3 9	Y 71号 174~183 住居址出土土器実測図	52
図4 0	Y 78 184、Y 81号 185~189、Y 82号 190~193、Y 83号 194~196 住居址出土土器実測図	53
図4 1	A 50号 197~201、A 89 202203、W 4号 204~207 土壌出土土器実測図	54
図4 2	B 6号溝址 208~210、C 11号溝址 211~215、C区遺物集中区 216~218 出土土器実測図	55
図4 3	C区遺物集中区 219、A区 220~230、B区 231、C区 232 233 出土土器実測図	56
図4 4	G区 234 235、H K 236、W区 237 238、X区 239~248 出土土器実測図	57
図4 5	X区 249~258、Y区 259~267 出土土器実測図	58
図4 6	Y区 268~277、Z区 278 出土土器および土製品類 279~282 実測図	59
図4 7	古墳時代遺構分布図 アミ部前期、黒塗後期	71
図4 8	H区I区遺構分布図	72
図4 9	H区古墳時代前期住居址実測図	74
図5 0	I区古墳時代前期住居址実測図 1	75
図5 1	I区古墳時代前期住居址実測図 2	76
図5 2	I区古墳時代前期4号住居址実測図 3	77
図5 3	古墳時代後期住居址実測図 1	78
図5 4	古墳時代前期住居址実測図 2	79
図5 5	I区古墳時代前期住居址出土土器実測図 1	81
図5 6	I区古墳時代前期住居址出土土器実測図 2	82
図5 7	上段 H区古墳時代前期住居址出土土器実測図 下段 古墳時代後期住居跡、土壌出土土器実測図	83
図5 8	奈良時代住居址分布図	87
図5 9	平安時代住居址分布図	89
図6 0	A区住居址土壌ビット群分布図 粗アミ部弥生時代	91
図6 1	A区住居址実測図 1	93
図6 2	A区住居址実測図 2	94
図6 3	A区住居址実測図 3	95
図6 4	A区住居址実測図 4	96
図6 5	A区住居址実測図 5	97
図6 6	A区 37号 右・38号 左 住居址・3号土壌実測図	98
図6 7	B区 左・C区 中 D区 右 住居址分布図	99

図6 8	B区住居址実測図 1	101
図6 9	B区住居址実測図 2	102
図7 0	C区住居址実測図 3	103
図7 1	D区住居址実測図 1	104
図7 2	D区住居址実測図 2	105
図7 3	F区 左・G区 右 住居址分布図	106
図7 4	F区住居址実測図 1	108
図7 5	F区住居址実測図 2	109
図7 6	F区住居址実測図 3	110
図7 7	G区住居址実測図 1	111
図7 8	G区住居址実測図 2	112
図7 9	W区・Z区 上・E区 下 住居址分布図 アミ部弥生時代	113
図8 0	E区住居址実測図 1	115
図8 1	E区住居址実測図 2	116
図8 2	W区住居址実測図 1	117
図8 3	W区住居址実測図 2	118
図8 4	Z区住居址実測図	119
図8 5	A 横字・X 逆字・Y 正字 区住居址建物址分布図	123 124
図8 6	X区住居址実測図 1	125
図8 7	X区住居址実測図 2	126
図8 8	X区住居址実測図 3	127
図8 9	X区住居址実測図 4	128
図9 0	X区住居址実測図 5	129
図9 1	X区住居址実測図 6	130
図9 2	X区住居址実測図 7	131
図9 3	Y区住居址実測図 1	132
図9 4	Y区住居址実測図 2	133
図9 5	Y区住居址実測図 3	134
図9 6	Y区住居址実測図 4	135
図9 7	Y区住居址実測図 5	136
図9 8	Y区住居址実測図 6	137
図9 9	Y区住居址実測図 7	138
図100	Y区住居址実測図 8	139
図101	Y区住居址実測図 9	140
図102	A区・D区・F区建物址実測図	141
図103	X区建物址実測図	142
図104	A区土壌 ビット 群実測図	143
図105	E区井戸址 土壌 実測図	144

图 106	X区井户址实测图	145
图 107	土壤墓·火葬址实测图	146
图 108	A区土壤实测图 1	148
图 109	A区土壤实测图 2	149
图 110	B区土壤实测图	150
图 111	C区土壤实测图	151
图 112	D区土壤实测图	152
图 113	E区土壤实测图	153
图 114	F区土壤实测图	154
图 115	G区土壤实测图	155
图 116	W区·Z区土壤实测图	156
图 117	X区·Y区土壤、沟址分布图	157
图 118	X区·Y区土壤实测图	158
图 119	A区·B区沟址、土壤实测图	159
图 120	C区·D区沟址、土壤实测图	160
图 121	E区·F区沟址实测图	161
图 122	H区·I区沟址实测图	162
图 123	G区·W区·Z区·X区沟址实测图	163
图 124	A区住居址出土器实测图	165
图 125	A区住居址出土器实测图	166
图 126	A区住居址出土器实测图	167
图 127	B区住居址出土器实测图	168
图 128	B区住居址、土壤、沟址出土器实测图	169
图 129	C区·D区住居址、土壤、沟址出土器实测图	170
图 130	D区住居址出土器实测图	171
图 131	E区住居址、土壤、沟址出土器实测图	172
图 132	F区住居址出土器实测图	173
图 133	F区住居址、土壤、沟址出土器实测图	174
图 134	G区住居址出土器实测图	175
图 135	G区·W区住居址、土壤、沟址出土器实测图	176
图 136	X区住居址出土器实测图	177
图 137	X区住居址出土器实测图	178
图 138	X区 19号住居址出土器实测图	179
图 139	X区住居址出土器实测图	180
图 140	X区住居址出土器实测图	181
图 141	X区住居址出土器实测图	182
图 142	X区·Z区住居址、土壤、沟址出土器实测图	183
图 143	Y区住居址出土器实测图	184

図 144	Y区住居址出土土器実測図	185
図 145	Y区住居址出土土器実測図	186
図 146	Y区住居址出土土器実測図	187
図 147	Y区住居址出土土器実測図	188
図 148	Y区住居址出土土器実測図	189
図 149	Y区土壌、溝址出土土器実測図	190
図 150	調査地出土灰釉陶器実測図 6-8・20 は再掲図	190
図 151	土製品・角製品石製品実測図	191
図 152	金属製品実測図	192
図 153	鉄製品・石製品実測図	193

I 調査の経過

1 調査に至る経過

綿内中央土地区画整理事業地における埋蔵文化財の所在は、近年まで開発行為がこの地域までおよばなかったことにより不明に近かった。ただ、事業地南端の旧千曲川河川路をはさんで対岸の微高地には菱田遺跡があり、古町地籍から平安時代土器が採集されており、埋蔵文化財の包蔵地の可能性を秘めていた。

平成6年5月に長野市都市開発部区画整理課長名にて埋蔵文化財発掘調査経費について照会があったものの、土地区画整理事業は具体化していなかった。この照会に対し調査費の積算基準資料を送付するとともに、事業の実施に際し試掘調査のうえ保護措置を協議したい旨回答する。平成7年3月に至り試掘調査の協議があり、土地区画整理組合設立後早急に実施することを確認する。その時期は12月以降になる見込みとのことであった。

これ以降の経過については次節のとおりである。



調査地及び周辺の航空写真（平成2年6月撮影、㈱ジャステック）

2 発掘調査の事務経過

[平成8年度]

- 5月9日付 「開発行為に伴う埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」
- 5月16日 試掘調査実施。
- 5月21日付 「埋蔵文化財確認調査の結果について（報告）」別記。
- 8月19日付 文化財保護法57条の2第1項の規定に基づく届出受理。施工事業面積12.43㎡。23日付県教育委員会教育長宛進達。
- 9月2日付 文化財保護法98条の2第1項の規定に基づく通知提出。
- 9月3日付 県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
- 9月5日付 「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」
- 9月30日付 「埋蔵文化財発掘調査協定書」締結。保護対象面積9,100㎡、平成8・9年度発掘調査、10年度整理・報告書刊行。総調査事業費54,300千円。
- 9月30日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」締結。長野市若穂綿内字高野6,336番地他、調査面積2,700㎡、調査費14,200千円。
- 10月6日付 「重機等賃貸借契約書」「プレハブ等賃貸借契約書」締結。
- 10月7日～12月26日、2月28日～3月28日 発掘調査実施（稼働64日）。
- 10月11日付 「遺構測量業務委託契約書」締結。
- 3月31日付 「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」締結。「発掘調査委託業務実績報告書・精算書」提出。

[平成9年度]

- 4月1日付 文化財保護法57条の2第1項の規定に基づく届出受理。3日付進達。
- 4月3日付 文化財保護法98条の2第1項の規定に基づく通知提出。
- 4月4日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」締結。調査面積3,000㎡、調査費24,386千円。「重機等賃貸借契約書」「プレハブ等賃貸借契約書」締結。
- 4月21日付 「遺構測量業務委託契約書」締結。
- 4月22日付 県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
- 6月30日付 「埋蔵文化財発掘調査（増面積）について（依頼）」増調査面積3,600㎡。
- 10月28日付 「遺構測量（増面積）業務委託契約書」締結。
- 12月22日付 長野中央警察署長宛「埋蔵物発見届」、県教育長宛「埋蔵物保管証」提出。県教育長・組合理事長宛「発掘調査終了届（通知）」提出。
- 12月26日付 「埋蔵物の文化財認定について（通知）」
- 2月6日付 「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」締結。「発掘調査委託業務実績報告書・精算書」提出。調査面積6,600㎡、精算額24,575,661円。

[平成10年度]

- 4月6日付 「埋蔵文化財発掘調査（整理）委託契約書」締結。
- 3月26日付 「発掘調査委託業務実績報告書・精算書」提出。精算額6,921,000円。
- 3月31日付 『綿内遺跡群 高野遺跡—長野市綿内中央土地区画整理事業地—』刊行。

3 調査日誌（抄）

[平成8年度]

- 10月2日 調査地境界杭等現地確認。
10月9日 B・C区表土除去。11日調査用機器材搬入。
10月14日 D区表土除去。B・D区遺構検出後2班編成で調査開始。
10月16日 F区表土除去・遺構検出。
10月17日 A区（B区以南）表土除去・遺構検出～20日。
10月22日 C区調査終了。25日B区調査開始～11月13日終了。30日D区調査終了。
11月7日 A区調査開始。A区のうちB・D間表土除去・遺構検出。
11月19日 B区二次面除去・遺構検出後調査再開～21日終了。
11月20日 A区西側に工事用道路建設のため南よりX・Y・Z区を設定。調査開始～12月16日終了。A区調査継続。
12月27日～2月27日 調査中断。
2月28日 A・E区表土除去・遺構検出後調査再開。
3月12日 F区表土再除去。13日F区遺構検出後調査開始。
3月14日 A区のうちD区以南調査終了。24日E区調査終了。
3月26日 D区S B 8・9 調査開始。28日D・W接点地遺構検出。

[平成9年度]

- 4月9日 D東・G区表土除去後遺構検出・調査開始。F区調査継続。
4月10日 D区調査終了。14日F区調査終了。
4月17日 A区のうちD・E区間調査開始～30日終了。G区調査終了。
4月21日 W区北調査開始～25日終了。
4月23日 H・I区およびZ区（参道西）表土除去。H区遺構検出。Z区遺構なし。
4月25日 I区遺構検出後調査開始～6月3日終了。
5月6日 H区調査開始～6月11日終了。遺物洗浄開始。
6月9日 Y区（道路部）表土除去。11日遺構検出。12日調査開始～7月31日終了。
6月24日 F区西（神社裏）表土除去・遺構検出後調査開始～25日終了。
7月18日 X区（道路部）表土除去後遺構検出。28日調査開始～9月30日終了。
7月24日 信州大学付属中学校生徒3名体験学習。
8月29日 W区（神社横）表土除去後遺構検出。30日調査開始～9月17日終了。
9月2日 Z区（参道東）表土除去・遺構検出後調査開始～25日終了。
9月18日 Y区（宅地）表土除去・遺構検出～24日。調査開始～11月10日終了。
10月20日 E区のうちA・F区間表土除去・遺構検出後調査開始～22日終了。
10月29日 X区（宅地）表土除去・遺構検出～11月11日。30日調査開始～11月28日終了。
11月20日 Y区（宅地）二次面表土除去・遺構検出。28日調査開始～12月12日終了。
12月9日 X区（宅地）二次面表土除去・遺構検出後調査開始～18日終了

12月18日 調査機器撤収し、現場における作業を終了。

12月19日 遺構測量をもって現場における作業を完了。

4 調査の体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および史跡等の保護保存にかかわる調査は長野市教育委員会社会教育課が担当し、開発行為に対応する緊急発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

高野遺跡における組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝沢忠男（～平成10年12月）久保 健（12月～）
総括管理者	埋蔵文化財センター所長	九田修三（平成8・9年度）小林重夫（10年度）
庶務係	主幹兼所長補佐兼庶務係長	小林重夫（平成9年度）
	所長補佐兼庶務係長	小林重夫（平成8年度）宮沢秀幸（10年度）
	職 員	青木厚子
調査係	所長補佐兼調査係長	矢口忠良（主任調査員、遺物実測・報告書編集）
”	兼務（社会教育課学芸主査）	青木和明
”	主 査	千野 浩（弥生式土器実測・浄書・版組・執筆、遺物写真）
”	主 事	飯島哲也（事前協議・試掘調査）
”	”	風間栄一
”	”	小林和子（主任調査員、平成8年度）
”	専門主事	清水 武（平成8・9年度、調査員、遺物整理）
”	”	荒木 宏（10年度、調査員、遺物整理）
”	専門員	中殿章子
”	”	山田美弥子（調査員、遺構写真、遺構整図・基礎データ作成）
”	”	西沢真弓
”	”	小野由美子
”	”	堀内健次
”	”	藤田隆之
”	”	小林まゆ佳
”	”	勝田智紀（調査員、平成8年度）
”	”	清水竜太（10年度）
”	”	宮川明美
	整理調査員	矢口栄子（遺物実測）、青木善子（遺構・遺物浄書）、武藤信子（遺構浄書）、池田寛子（遺構浄書）、西尾千枝（遺構整図）

遺構測量業務委託 写真真測図研究所

[平成8年度発掘調査従事者]

芦田久子・雨宮弘子・雨宮ふじ・池田賢二・池田 満・一色茂喜・稲田きく子・上野いくよ・大峽良子・金井寿美子・金井 寛・北原茂子・北原芳子・北村範子・小林利夫・小林信子・小林ゆり・駒村きよ子・駒村ひろ子・

小山くによ・滝沢せつ・滝沢美和子・田村茂子・橋爪孝次・林 栄男・丸山一代・峰村文則・宮沢とし子・望月ミツ

[平成9年度発掘調査従事者]

芦田久子・雨宮弘子・雨宮ふじ・池田賢二・池田 満・一色茂喜・稲田さく子・大峽良子・大峽 満・金井 覚・北原茂子・小林利夫・小林信子・小林幸雄・小林ゆり・駒村さよ子・駒ひろ子・小山くによ・滝沢せつ・滝沢美和子・田村茂子・橋爪孝次・林 栄男・丸山一代・峰村文則・宮沢とし子・望月ミツ・山中雄介

[平成9年度整理作業従事者]

芦田久子・金井寿美子・滝沢せつ・田村茂子

[平成10年度整理作業従事者]

岡沢治子・倉島敬子・小泉ひろ美・関崎文子・田中はま江・田中むつ子・塚田容子・徳成奈於子・富田景子・西尾千枝・松沢ナオエ・村松正子

長野市綿内中央土地区画整理組合理事長 原田忠二・同副理事長 駒村友治・同望月清明・事務局長 滝沢利太郎、都市開発部地区画整理課長補佐 鶴野芳男・同主査 大峽幸良・同主事 小林弘和、飯島建設㈱ 坂井尚行・原田俊次、㈱北條組 滝沢延行、北野建設㈱ 柳沢政文の各氏には調査進行にあたりご協力をいただいた。記して感謝いたします。

II 調査地周辺の環境

1 地理的環境

千曲川右岸は火山性の山地がそびえたち、その支脈の尾根は千曲川方面に突出し、大小の穹入部を形成する。山間部では藤沢川や蛭川・神田川による松代扇状地が、若穂保科から川田地域にかけて保科川と赤野田川によって保科扇状地が、鮎川や百々川による須坂扇状地が発達しているという特色がある。扇状地先端の平坦地では旧千曲川の流路となり自然堤防と後背湿地になるが、上流の篠ノ井地域のような広域に展開しない。松代から須坂市にかけての千曲川左岸では顕著な自然堤防や後背湿地は見られなく、遺跡が確認されないことから時期的に新しい地形形成であろう。

犀川は西部山地を横断して東流し、V字谷から開放され長野盆地に至り広大な扇状地をつくりだす。これが川中島扇状地で、南は篠ノ井塩崎の唐猫神社、北は犀島橋付近まで影響を及ぼしており、犀川右岸約50km²・左岸約20km²の面積になる。扇頂部の犀口地籍から東の千曲川と犀川が合流する落合橋まで直線にして9.9kmで、その比高差は40mを測り、急勾配で堆積土量の多さが指摘できる。この犀川による堆積力の優位性は千曲川を右岸の上信越山塊の山脚部まで押さえ込み、山脚尾根先端は侵食を受けている。扇状地形成が一段落すると犀川の堆積土量が徐々に減少するようになる。これにつれ千曲川も山脚部から離れ扇状地端部を侵食し、自然堤防と後背湿地・氾濫平野を形成するようになる。



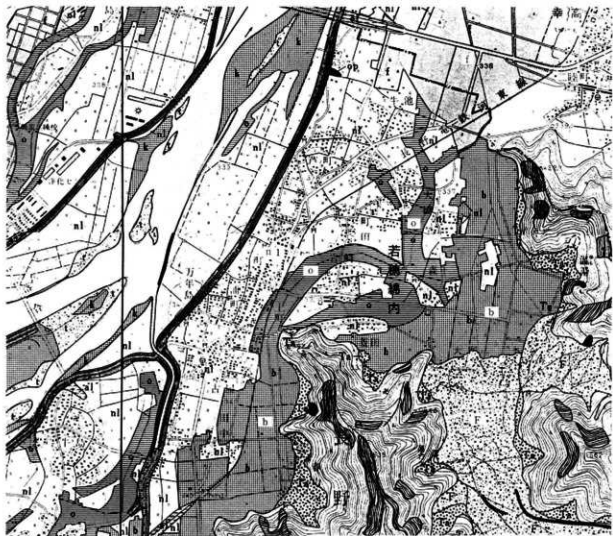
図1 調査地 (○印) および川中島扇状地図 (1:100,000)



図2 調査地 (◎印) および周辺地形図 (1:10,000)

ここで注意しなければならないことは、川中島扇状地形成時期の問題が近年浮上してきたことである。勸長野県埋蔵文化財センターが実施した上信越自動車道建設に伴う松代町松原遺跡の発掘調査で、地表下約4 mのところから縄文時代中期の遺跡が発見されたことによる。今までの調査所見から盆地沖積面への縄文時代人の進出は晩期からであり、それも小規模で短期的なものと考えられてきた。しかし、遺跡の存在は少なくとも5,000年前頃には犀川の堆積土による千曲川への影響はほとんどなかった可能性を裏付ける事象となった。その後松原遺跡に人々の痕跡が認められるようになるのは弥生時代中期まで待たねばならない。この推論が正しければ川中島扇状地の形成は縄文時代中期以降のことである。若穂地域の自然堤防や後背湿地もこの頃つくられたものと推定され意外に若い地形である。

犀川と千曲川の合流点は綿内万年島西方にある。ここに架かる橋が落合橋と呼ばれている。輪中集落として著名な牛島もここにある。対岸の大豆島から屋島にかけて自然堤防や氾濫平野が見られるが遺跡の確認はない。綿内の自然堤防上に遺跡が形成されたころ、犀川は北の裾花川扇状地端部をえぐるように流下していた可能性が高い。それ故に左岸の自然堤防の形成は不安定でより新しいものといえ、これに対し綿内の自然堤防や後背湿地は安定期にあったものと思われる。



n1 自然堤防 b 後背湿地 o 田河道 f 氾濫平野 F 扇状地

図3 長野市防災基本区地形分類図(1:25,000)

綿内地域の地形利用は、自然堤防上には「町・島」の字名を付ける集落及び畑・果樹園が、旧河道や後背湿地・氾濫平野は「沢・田・池」の字名をもつものが多く、水田・蓮田と地目を使いわけている。残念なのは圃場整備が進み後背湿地内に残された中洲状の自然堤防地形が失われてしまったことである。地図上で見る後背湿地内に展開する榎田遺跡はもともとは微高地上の遺跡であったかもしれない。綿内地域には水田可耕地を潤す河川は見あらず、旧河道に沿って幾つかの堰が開削されている。長池地綿の周辺では矢原地区で保科川から導水し、川田字堤南の湧水を利用している。菱田から森地区にかけては八田川が流下し、榎田から須坂市井上にかけての後背湿地や氾濫湿地の灌漑には清水地区の東勝寺池の榎五郎川（東勝寺堰）から引水されている。裏を返して古代における生産基盤を推定するに、当地域の水利は東勝寺池の湧水と共に旧河川水路が大きく機能していたものと見られる。

調査地の「高野」も字のごとく高い野原を意味しているものと考えられ、自然堤防上でも最も高い地形をあらわす字名であろう。



図4 調査地周辺の字境図（長野市地名研究所作成「長野字境図」より）

2 考古学的環境

若穂地帯は保科扇状地・川田の後背湿地に代表される複合地形と綿内の自然堤防・後背湿地からなる地形に大別され、それぞれ特色ある遺跡がある。

若穂地帯で最初に人跡が認められるのは、保科高岡で有基尖頭器の採集を初源とし、縄文時代創早期のことである。その後再び人跡が認められるようになるのは前期後半の綿内大柳遺跡・仁王堂遺跡である。これ以降平安時代まで連続と土に刻まれた歴史を残す。

保科扇状地においては、扇頂部で縄文時代中期の小遺跡が散見される。ノボロ遺跡・笹平遺跡・高岡遺跡・蓮花遺跡等である。後・晩期になると扇尖部にも遺跡が展開するようになり、上和田地域に宮崎遺跡が形成される。この遺跡は長野市を代表する縄文時代集落跡であり、同時代の墓域でもある。昭和60・62年度に畑等灌漑用パイプ埋設に伴う発掘調査が行われ、後期から晩期初頭の住居址・石棺墓・土槨墓・埋甕墓が検出されている。遺物にも見るべきものがあり、600個におよぶ石鏃や若干の石斧等の生産用具、石棒・石剣等の祭祀具、土製耳飾り等の着用品が出土している。特にサメ椎骨製耳飾りや鹿角製銚は海洋地域との交流のあったことを示す一級の資料



- 1 高野遺跡 2 南条遺跡 3 板田遺跡 4 春山B遺跡 5 宮崎遺跡 6 川田築里遺跡
- 7 大宮18号古墳 8 大星山古墳群 9 和田東山古墳群 10 長原古墳群 11 大柳古墳群

図5 主要遺跡位置図 (1:50,000)

である。わずか幅1m・総延長823mの調査での成果であり、まだまだ多くの貴重な資料が眠っている。宮崎遺跡は狭義の意味で縄文時代遺跡として認識されているが、扇状地全体から見れば扇状地端部まで展開する弥生時代から平安時代にかけてのけいし場遺跡・塚本遺跡等と重複する複合遺跡でもある。弥生時代以降の遺跡数は増加を見せ、扇状地端部のほか後背湿地を取り囲む山麓に多く見られるようになり、自然堤防の町川田地域にも集落が形成される。後背湿地は川田条里遺跡と呼称され、弥生時代中期から一部に断続のあるものの近世までの埋没水田址が上信越自動車道の発掘調査で確認されている。この生産基盤を背景に多くの古墳が築造されるようになる。沖積面を眼下にする大星山山頂には前方後円墳形態の大室18号古墳が構築され、内部主体は不明であるが立地・形態からこの地域最古の古墳と推定する。やや遅れて大星山から扇状地面に突出する尾根上に和田東山古墳群と大星山古墳群がつかれる。和田東山古墳群は3基の前方後円墳と2基の円墳からなり、継続する首長墓と考えられ、初代墓は4世紀中ごろの築造と推定されている。2代にあたる3号古墳は明治大学より発掘調査が実施され、壜穴式石室を検出し、内行花文鏡をはじめ多くの鉄製品・玉類等が副葬されていた。4世紀後半の築造年代が与えられている。この古墳群に前後して大星山古墳群が築かれる。3基の円墳と1基の方墳からなり、

副葬品に武器類が目立つことから被葬者は前記の首長層に服属する武人的性格を有する豪族墓と考えられている。同一の尾根上に複数の前方後円墳の構築、近接して同時期の服属関係が想定される古墳群の存在は他の地域では見られない。古墳時代の権力的階層を解明する上で重要な地域である。古墳時代後期になると古墳の築造は尾根から降りて扇状地や山麓に展開するようになる。前者では扇頂付近に白塚古墳群(11基)・扇尖に高下古墳群(4基)・八幡古墳群(5基)・長原古墳群(22基)の古墳群があり、後者では須釜古墳群(4基)・十二山古墳群(5基)・袖林山古墳群(3基)に代表される。この他大室18号古墳が築かれる低位尾根上には15基の円墳が存在するが、内部主体及び築造年代は不明である。長原古墳群は閉地造成により一部を残して

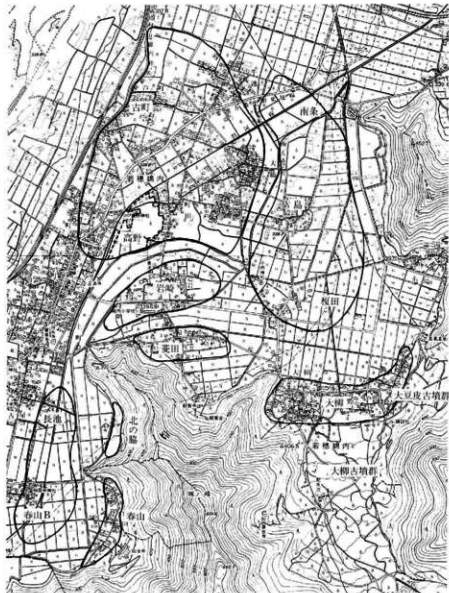


図6 糸内遺跡群と近隣の遺跡分布図(1:20,000)

消滅し、他の古墳群も前記した基数より減少している。またこれらの古墳群形成にかかわった集落跡の存在は明らかになっていない。

綿内地域の遺跡は少なく11遺跡が周知されているにすぎない。縄文時代の大柳遺跡・仁王堂遺跡が崖上に立地するほかは山麓を含め平地に散在し、弥生時代以降の遺跡である。春山の自然堤防上には上信越自動車道で調査された春山B遺跡がある。弥生時代住居址40軒及び方形周溝墓18基が確認され、集落廃絶後墓域として機能していたようである。古町・芦町・菱在家・高野・町田・八王寺・森・榎田・島・笹木・大橋・南条・牛池の一带は弥生時代以降の遺跡が展開されているものと予想され、綿内遺跡群と呼称している。周知されている地点遺跡に古町・南条・島・榎田の各遺跡がある。上流域の田中に春山B遺跡に接して長池遺跡が、旧河道による中洲状の微高地には岩崎遺跡・菱田遺跡がある。このうち発掘調査の経歴のあるものは、高野遺跡・春山B遺跡を除き、岩崎遺跡綿内保育園地点・古町遺跡流入塚そして上信越自動車道建設に伴う榎田遺跡がある。綿内保育園地点では平安時代の住居址1軒と中世土壇墓2基を確認している。流入塚は中世墳墓と見られている。榎田遺跡は弥生時代中期から近世に至るまでの複合遺跡である。43,500㎡程が調査され、住居址総数1,115軒余が検出され、特に古墳時代では後期を主体に893軒にのぼる。長野盆地の中で突出する遺構数の大遺跡である。現在整理中であるので詳細は不明であるが、第3号河川跡から各種鉄類・鋤・えぶり・田下駄・木箱・整杵等の農具、かせい・たたり等の紡織具、扉・梯子・梁・杭等の建築材、木製鞍や鐙、各種くり物・曲物類、弓や鞘、腰掛け、鳥形木製品等の各種多様な木製品の出土が注目される。これに対し奈良・平安時代住居址が40軒にすぎなく、遺跡群内の北に位置する南条遺跡では平安時代遺構に限られる点に注意する必要がある。榎田遺跡に対応する古墳はこの空間域に大柳古墳群（4基）・大豆皮古墳群（3基）（同一の古墳群の可能性あり）があるにすぎず余りにも少なすぎる。尾根一つを越えた須坂市の鮎川流域の古墳群に求めることも可能であるが、むしろ先代からの故地である保科扇状地の古墳群に対応させるのが妥当性があるように思える。

3 古代の歴史的環境

若穂地帯においても文字等に残された歴史事象が多く見られる。承平年間（935年頃）に編纂された「倭名類聚抄」[高山寺本]には高井郡の郷名が穂科（ほしな）・小内（おうな）・稲向（いなむき）・日野（ひの）の4郷記載され、「流布本」では神戸（かんべ）が加わる。この内、穂科郷は若穂保科を中心に、稲向は須坂市南部地域一帯に求められている。小内郷は中野市とその周辺との説と若穂綿内地区説があり、日野郷は須坂市日滝と、中野市新野を本郷とする2説がある。神戸郷は飯山市瑞穂地区に中心を求める説が多いが合意をみていない。「延喜式神名帳」に記載される式内社に綿内森の小内神社を比定する考えもあり、「御牧」の項に高井郡関係では笠原・高位・大室の牧名が見える。笠原牧の比定については伊那市と中野市の両説あり、高位牧は高山村の扇状地に、大室牧は松代町大室の千曲川両岸地域に推定されている。『三代実録』によると9世紀後半には物部氏の支族が高井郡に居住しており、平安時代中期頃には高井郡の有力家族井上氏が須坂市井上を拠点に勢力を伸張していたものと考えられている。平安時代末期の「吾妻鏡」には保科御厨が記載され、穂科郷に後続するものであろう。この他、川田の清水寺には国指定重要文化財の鉄鍬形や藤原期の仏像群、綿内の蓮台寺には阿弥陀如来像が伝承されている。このような歴史事象と綿内遺跡群とのかかわりがどのようなものであったか興味深い。

III 調査概要

1 試掘調査

(1)調査の目的

開発事業予定地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内にあり、埋蔵文化財の包蔵状況によっては破壊の及ぶ可能性も考えられる。したがって、施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財の包蔵状況を調査する。

(2)調査方法

事業予定地内の埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の地点に試掘坑（トレンチ、L2m×W1m）を5か所設定、重機により掘削し、坑内断面の土層観察により、遺物包含層の有無及び深さを確認する。

(3)調査結果

5か所のトレンチは事業予定地中の遺構の存在が確実な岩崎遺跡範囲内部分と旧千曲川河道と思われる低地部分を除く微高地上に設定した。以下、土層断面図を基に記述する。

Na1トレンチ 事業予定地の北に位置し、地目は果樹園である。ここからは明確な遺物包含層は確認されず、出土した遺物も摩耗した土器片が1片のみであった。ただし遺構のベースとなるであろう淡黄灰色粘質土層（第6層）があることから周辺に遺構の存在する可能性は否定できない。小単位遺構群の縁辺部かもしれない。

Na2トレンチ 事業予定地の東に位置しており、安定した土層堆積状況を示している。第4層の灰褐色砂質土層が遺物包含層であり、弥生時代と思われる土器片を数点採集した。また第3層の茶褐色粘質土層は奈良・平安時代の遺物包含層となる可能性もある。

Na3トレンチ 事業予定地の中心に位置し、旧千曲川河道と思われる低地部に近接している。第3層が奈良・平安時代の遺物包含層、第4層が同時代の遺構面、第5層が弥生時代後期の遺物包含層である。炭化物も多く含んでおり居住域（集落）遺構の存在が予想される。

Na4トレンチ 高野神社東側に位置している。ここでも土層が安定した堆積状況を示しており、Na3トレンチと同様、第3層が奈良・平安時代の遺物包含層と思われる。第4層を掘り込む遺構が確認され、完形に近い該期の土師器片が出土した。また遺構は確認できなかったが弥生時代の土器片も採集されることから、2時期の遺構面が存在する可能性が高い。

Na5トレンチ 長野電鉄綿内駅の東側で、低地部分に近接している。Na1トレンチと似たような堆積状況で、第5層に遺構ベースとなるべき淡黄灰色粘質土層も存在するが、遺物包含層が確認されず、埋蔵文化財包蔵の可能性は低く、このトレンチより北側に遺構が展開するものと思われる。

以上の結果により、事業予定地内の微高地（自然堤防）はほぼ全面に埋蔵文化財の包蔵が予想される。地表下約70cmにて奈良・平安時代の遺構面、約1mで弥生時代後期の遺構が展開するものと思料される。

2 調査の方法

調査対象地は遺跡の破壊が懸念される道路敷に限定し、区画整理事業の進捗及び設計変更等に応じ保護協議す

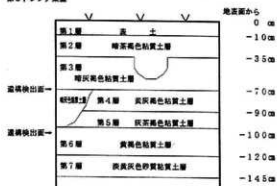
第1トレンチ調査



第2トレンチ調査



第3トレンチ調査



第4トレンチ調査



第5トレンチ調査

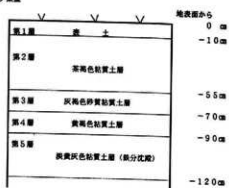


図7 試掘調査地および土層柱状図

ることで発掘調査にとりかかった。遺跡推定範囲は2事業区にわたって工事が行われる関係上、路線ごとに接続して調査ができなく、一部に遺構形態にそこをきたした点がある。また平成9年度に宅地造成高の変更があり、削平が30cm以上におよぶ造成面では急速発掘調査を実施することになった。それ故に路線地区名及び遺構番号に不揃いが見られるが、遺物等の混乱を避けるため調査時の符号・番号をそのまま用いている。

3 調査地の概要



図8 微地形推定図 (1:2,000, 10cmコンター)

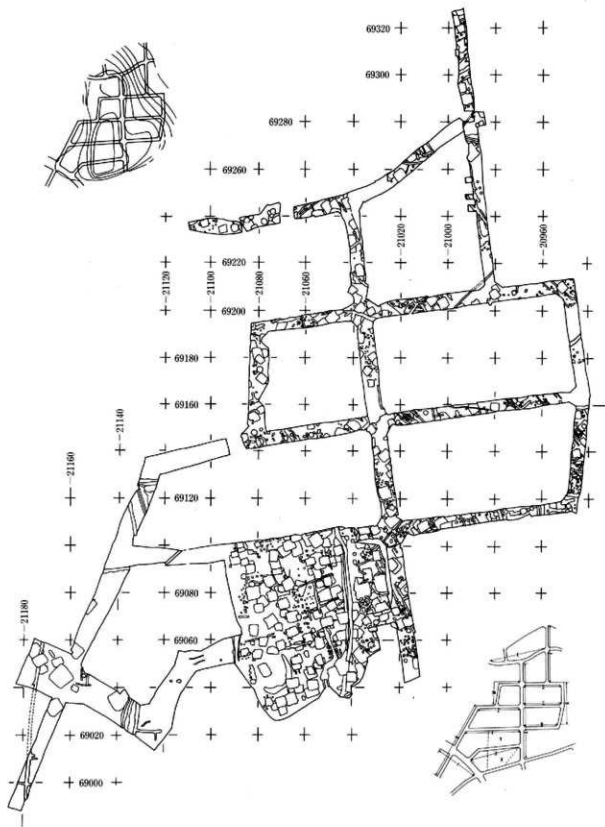


图9 调查区遺構分布图 (1:1,600)

調査地は標高339.42mを最高に、338.64mの範囲にあり、旧千曲川河道との比高差が1m近くある。地点標高から10cmコンターの微地形推定図を作成してみると、綿内自然堤防上で最も高位に位置し、X区からZ区にかけて20cm程の高まりがあり、W区北側にも10cmの微高地がある。339.2mのコンター線は南北に長楕円形を呈し、南方で東に張り出す。高野神社参道から西は他に見られない傾斜を示す特色がある。更に注目されるのは微高地の弥生時代遺構面（黄褐色粘質土）の下層は砂利層になる点である。北側へは徐々に傾斜するのに対し、参道を境に急傾斜をもって潜り込み、土層も粘質を高める。東側へも砂利層は展開するものと予想されるが、Y区東端を境に調査では部分的に確認されたにすぎない。この砂利層はこの地形にだけ認められ、東に約1km離れた南条遺跡では井戸址の最下層でも見られない。また砂利層は厚川による押し出しが考えられる点も注意する必要がある。

4 遺構の分布

住居址等の居住施設は微地形推定図に見られる微高地上に展開するようである。すなわちB区にあつては調査地全域に認められるものの、C・D・E区においては散在的になり、東にいくにつれ遺構数を減じる。また、G区においては北側半分には各1棟の住居址と獨立柱建物址が存在するにすぎない。F区においても北側に遺構が密集するのに対し南側半分は1棟の住居址があるのみである。微地形推定図の高地面に居住域を求め、緩斜面を避けていることがうかがえる。

また、調査地西側においてもH・I区の一部を除き高野神社参道を境に居住域を全く形成しない。参道を境に土質にも大きな相違が認められることから、往時においては地形の変換点であった可能性が高いし、遺構の分布という点では本遺跡の特色ともなっている。

A・X区の南端に遺構の存在が認められないことから、この調査範囲に遺跡の南限が求められ、地形の変換点に農道が造られている。

IV 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構の分布 (図10～12)

A区住居址9軒・土塙1基、B区住居址1軒、C区住居址2軒・土塙(溝址)2基、E区住居址7軒、W区住居址4軒・土塙1基、X区住居址9軒・土塙2基、Y区住居址19軒・土塙1基の総計住居址51軒、土塙7基を検出した。弥生時代遺構分布図を見ると調査地の中央部に位置し、南北二つの区域に大別することができる。更に微地形推定図を重ね合わせると、両者とも微高地上に展開密集することがうかがえる。また、A区北端付近とW区およびY区においては重複関係にある遺構が目立つ。弥生時代後期の集落形成に重要な占意識が働いているように思える。ちなみにA区北端の44・45号住居址、E9号住居址は洪水によるものか東側半分程が消失している。

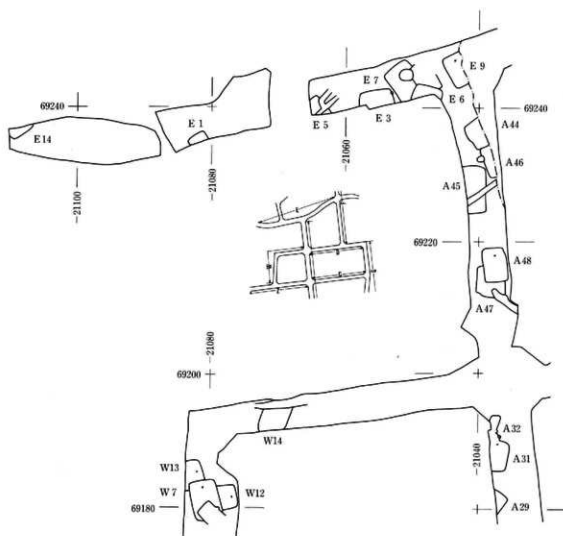


図10 A区・E区・W区弥生時代後期住居址分布図

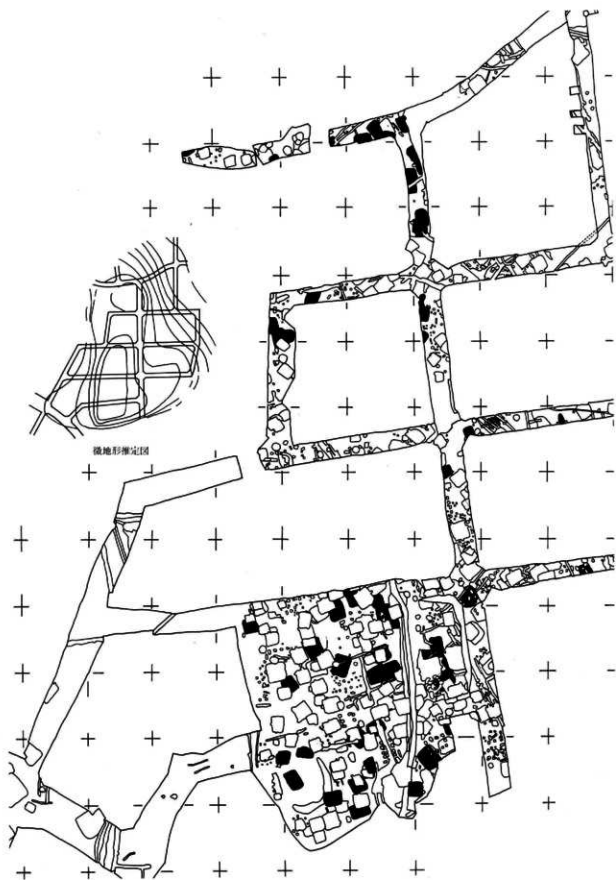


图11 弥生時代後期遺構分布図

(2)住居址 (図13~26)

遺構は黄褐色粘質土層を掘り込み、覆土が同系色でやや黒味を帯びているにすぎず遺構形態確認に困難を極めたが、炭化物の混入を目安に形態追及を行った。C区東側に土器集中地点があり、ほぼ完形の土器の出土を見たが遺構を確認することができなかった。

住居址の形態は隅丸長方形を呈するものが多い中で、A31・46号、C7号、X51号、Y11・36・77号の各住居址は比較的小形の隅丸方形になる。規模はY29号住居址の主軸7.2m・短軸5.1mを最大に、Y11号住居址の長軸3.8m・短軸3.7mを最小とする。主軸(長軸)は3.7~7.2mの幅の中で散在するが、4.5~5.3mの範囲に密集度が高い。短軸は2.5~5.3mの範囲にあり、4.0~5.1mに密集する。

小屋組の主柱は住居址形態配列の長方形や方形の4本柱を基本とするが、正形でなく変形のものが多い。しかし、A45号住居址のように土器の出土量が多いものの主柱穴・炉や床面等の居住施設が共に確認されない住居址形態の遺構がある。A20号、C7号、E1・3・5号、W14号、X52・54号、Y30・35・82・83号住居址がこれにあたる。居住施設以外の利用を考慮する必要がある。A48号とY29号住居址の炉と対辺の壁際中央に入口施設を構成する2個の柱穴が認められる。

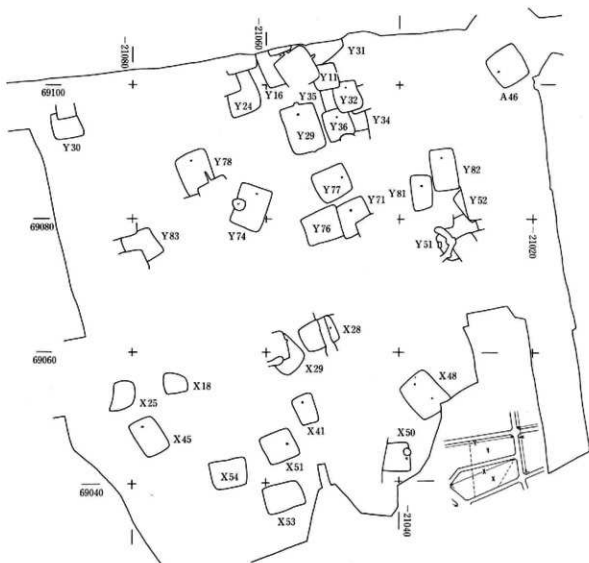


図12 A区・X区・Y区弥生時代後期住居址分布図

W区に互いに重複しあう3軒の住居址がある。中でも最も新しい7号住居址は主軸方向をN10°Wを指し、主軸6.0m・短軸4.0mの規模で、隅丸長方形を呈する。これに対し12号・13号住居址は同時期に機能していたものと推定され、規模・形態は7号住居址と近似するものの主軸方向がN75°E前後と大きく異なる。この相違点から形態が明確または主柱穴および炉の位置が判明している他の住居址の主軸方向を見てみるとN10°WからN40°W間に15軒があり、N57°EからN81°E間に9軒存在し2群に大別することができる。ただし、これ以外の住居址の推定方向軸を測ると南北軸からN15°E間にもう一群が存在するようである。軒数は西群が多く、次いで東群、中間群の順になる。W区の例をひけば東群の主軸から西群への移行が考えられる。主軸線でもう一つ注意しなければならないのがX48号住居址の存在である。住居址内に小形の住居址を内包している可能性が高く、主軸方向が約90°異なるものの、(イ)号とした大形の新しい住居址は東群の一つでN53°E方向を指す。ちなみに小形のものはS45°E方向にある。いずれにせよ左回転の変換である。

炉は地床炉で直径30cm前後の円形を呈し、浅い鍋底状の底面になる。周辺には炭化物が散在する例が多い。炉形態には素掘りのものと緑漆の手前に細長い河原石を据置くいわゆる枕石炉の二形態がある。枕石炉はE9号、X28・41・45・48・51号、Y29・36・71号の各住居址に見られる。この形態の炉は古墳時代前期のH3号住居址にも見られ、継承性に注目する必要がある。炉の位置は北壁寄りの主柱穴間に設置されるものが多いが、A46号住居址は唯一西壁側に設けられ、東壁寄りでは先に記載したW12・13号、X48(ロ)号住居址の他にX28・50・51号、Y77号の各住居址(主軸東群)がある。また柱穴間の位置にも相違が認められ、壁際に焼土(炉)が認められるC6号住居址(北壁)・X50号住居址(東壁)があり、W13号、X45・74・77号の各住居址は柱穴間からはずれ上部にあり、X29・78号住居址では下方に設けられる。W区の3軒の炉底から土器片が出土しているが、明らかに土器数と考えられるのは7号住居址のみである。

床面は主柱穴を中心によく締まって堅緻のものが多い。床面下は砂利層になるため貼り床の可能性もある。

(3)土壌 (図16)

C区の2基の土壌は溝状を呈するが、長楕円形をなすものと思われる。X区の住居形態の土壌は不整形である上、底面が共に丸味を帯びる。土器の出土量が多く、これらの遺構は貯蔵穴の用を供したものと考えられる。

弥生時代後期遺構観察表(1)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
A区							
20号住居址	14	隅丸長方形?	×2.8	N34°E			27
29号住居址	14	隅丸長方形?		N54°W			27
31号住居址	14	隅丸長方形?	4.4×	N5°E	4本柱?・炉		27
32号住居址(土壌)	14	不整形					
35号住居址	15	隅丸長方形?		N55°W	4本柱?		27
44号住居址	14	隅丸長方形?		N56°W	4本柱?・床堅緻		
45号住居址	14	長方形?		N10°W		床土器散在	28
46号住居址	15	不整形	5.3×5.8	N57°E	4本柱・柱間炉・焼失住居		
47号住居址	13	隅丸長方形	(4.4)×4.3	N5°E	4本柱・床堅緻		27
48号住居址	13	隅丸長方形	5.1×3.5	N12°W	4本柱・床堅緻・柱間炉・入口施設		27
89号土壌	15	楕円形?	×0.6		2段階・平底		
B区							
11号住居址	16	長方形?	×3.5	N26°W	柱間炉?・床堅緻		29

弥生時代後期遺構観察表(2)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
C区							
6号住居址	16	隅丸長方形?			北壁階石		29
7号住居址	16	方形	(2.8)×(3.2)	N21°W			30
8号住居址(土壙)	16	隅丸長方形?	×2.3	N11°E	平底		30
11号溝址(土壙)	16	不整楕円形?	×1.8	南北	底凹凸		
E区							
1号住居址	17	長方形?	×2.5	N14°W			
3号住居址	17	隅丸長方形?	×5.1	N 8°E			
5号住居址	17	隅丸長方形?		N24°W			
6号住居址	17	隅丸長方形?	×(4.5)	N11°E	4本柱?		
7号住居址	17	隅丸長方形?	×4.4	N36°W	4本柱?・伊平土層破壊・床堅緻		
9号住居址	17	隅丸長方形	4.9×	N24°W	4本柱・柱間枕石?・床堅緻		
14号住居址	17	隅丸長方形?	×(4.0)	N30°W			
W区							
7号住居址	18	隅丸長方形	6.0×4.0	N10°W	4本柱・柱間石		
12号住居址	18	隅丸長方形?	×3.9	N76°E	4本柱?・柱間石	施	30-32
13号住居址	18	隅丸長方形?	×(4.0)	N74°E	4本柱?・柱間上石		30
14号住居址	18	隅丸長方形?	×3.9	N25°E			30
4号土壙	18	不整楕円形	1.1×0.6	南北	丸底		
X区							
28号住居址	19	隅丸長方形	5.3×4.4	N65°E	4本柱・柱間枕石		31
29号住居址	19	隅丸長方形	(5.0)×4.6	N45°W	4本柱?		31
41号住居址	19	隅丸長方形(不整)	4.4×3.3	N24°W	4本柱・柱間枕石		32
45号住居址	19	隅丸長方形	5.7×4.1	N30°W	4本柱・柱間上枕石		32
48号住居址(イ)	20	隅丸長方形	6.7×5.3	S53°E	4本柱・柱間上枕石?・床堅緻		34
48号住居址(ロ)	20		溝間2.7	S45°E	丸底・柱間石		
50号住居址	20	隅丸長方形?	×4.4	N86°E	4本柱・東壁階石		32
51号住居址	21	隅丸方形	4.6×4.7	N63°E	4本柱・柱間枕石		34
52号住居址	50	長方形	5.7×4.0	N73°E			31
54号住居址	21	長方形(不整)	5.4×4.2	N83°E			33
18号住居址(土壙)	21	長方形(不整)	4.6×3.2	N81°W	径2.6m・深0.2m土壙・平底		31
25号住居址(土壙)	21	楕円形(不整)	4.6×3.4	N 8°E	丸底		31
Y区							
11号住居址	22	隅丸方形(不整)	3.8×3.7	N17°W	4本柱・鏡状住居		31-35
16号住居址	22	隅丸方形?	5.0×	N70°E	東壁銅釘・床堅緻		35
24号住居址	22	隅丸方形?	(7.3)×4.8	N15°W	4本柱?・東壁大溝		35
29号住居址	25	隅丸方形	7.2×5.1	N13°W	北壁銅釘・柱間下枕石?・入口施設		35
30号住居址(土壙)	22	方形(不整)	3.8×4.2	N15°W	長軸2.25m丸底土壙		36
31号住居址	23	隅丸長方形?		N59°E	床堅緻		35

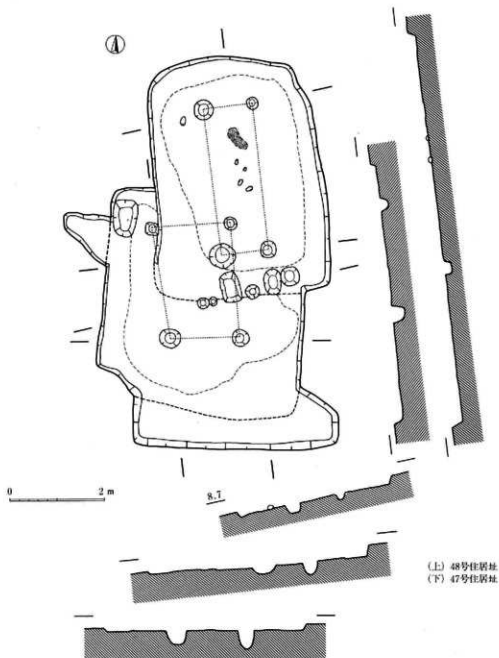


図13 A区弥生時代後期住居址実測図(1)

弥生時代後期遺構観察表(3)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
Y区							
32号住居址	23	隅丸長方形(不型)	4.6×3.4	N17°W	4本柱?・柱間戸		37
34号住居址	23				南壁・床のみ残存		37
35号住居址	23	方形?		N12°E			
36号住居址	23	隅丸方形	4.5×4.1	N23°W	北壁側枕石戸		35
31号住居址	24	隅丸長方形	6.4×5.0	N55°E	4本柱・北側下焼土		38

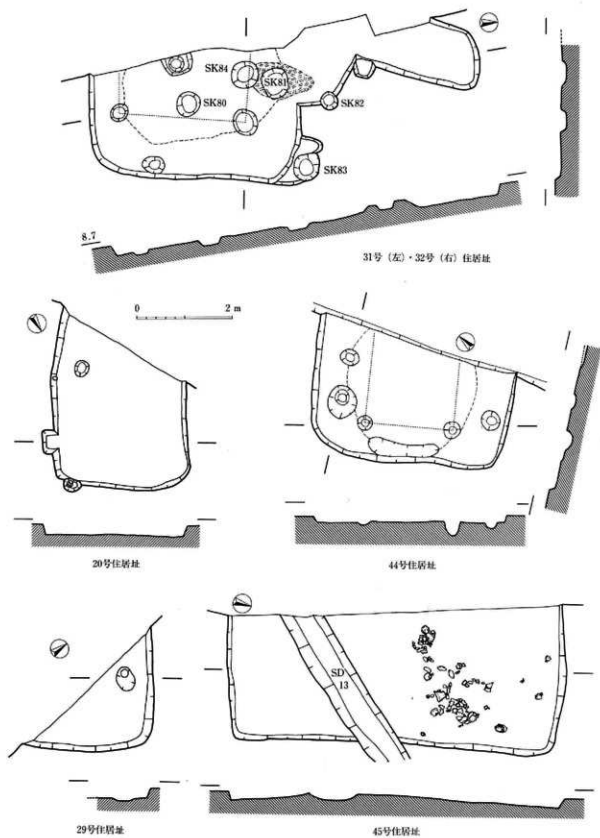


图14 A区弥生时代后期住居址实测图(2)

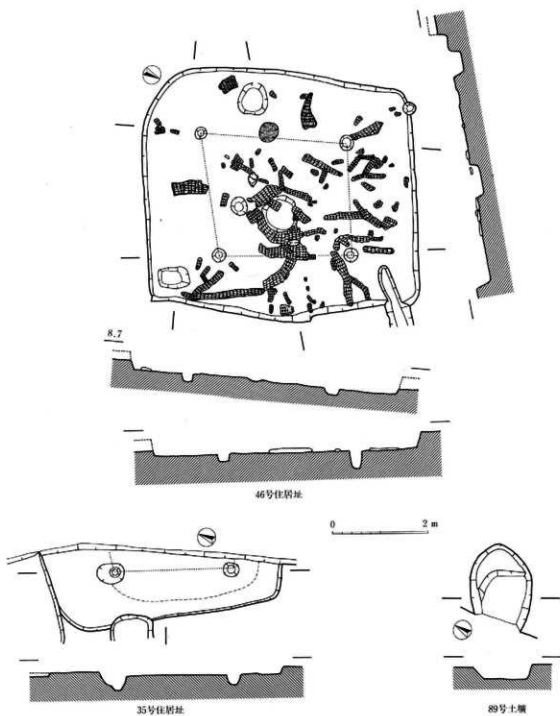
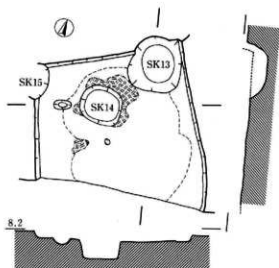
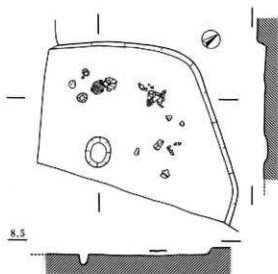


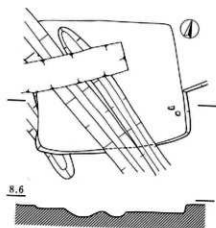
图15 A区弥生时代後期住居址、土壘夹洞图(3)



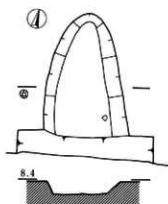
B11号住居



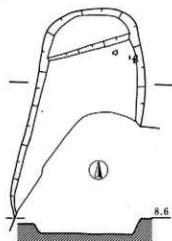
C6号住居



C7号住居



C11号溝址



C6号住居 (土壘)

图16 B区·C区弥生时代後期住居、溝址実測图

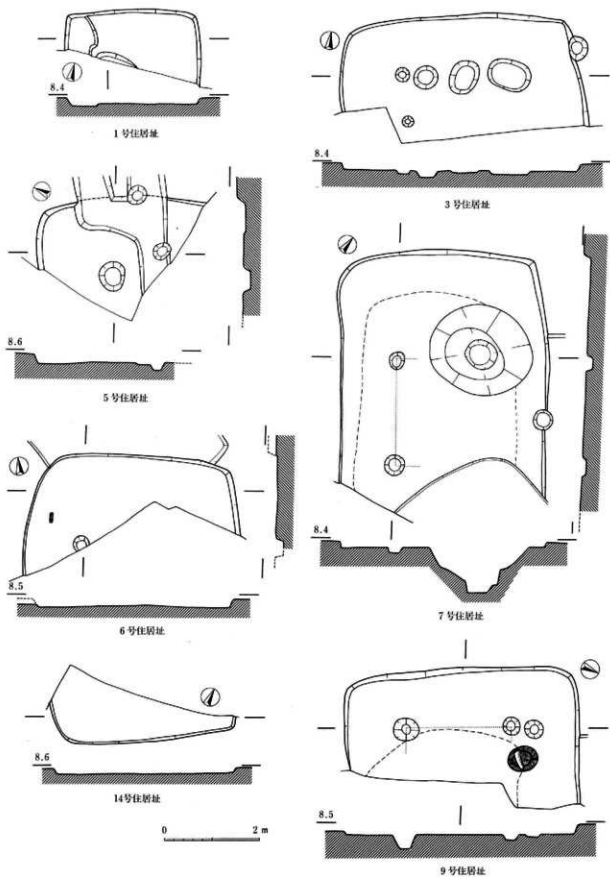


图17 E区弥生时代后期住居址实测图

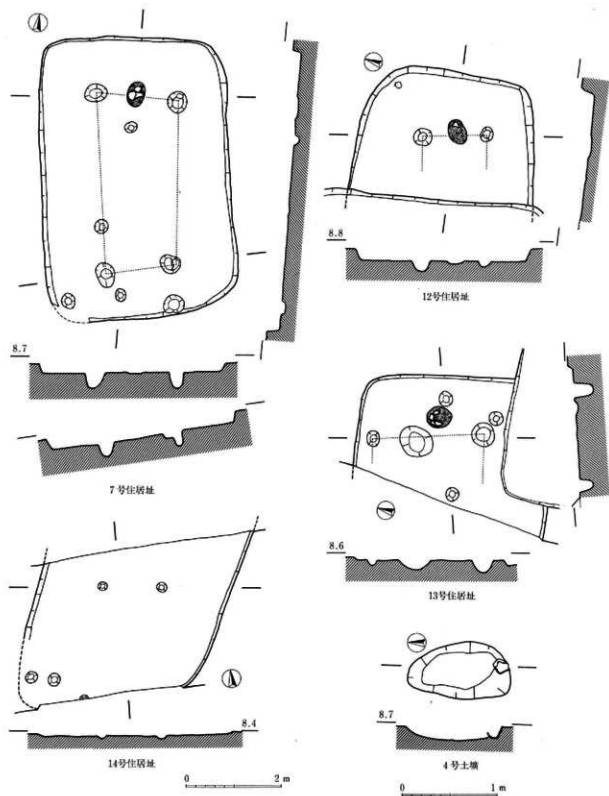


图18 W区弥生时代后期住居址、土壤实测图

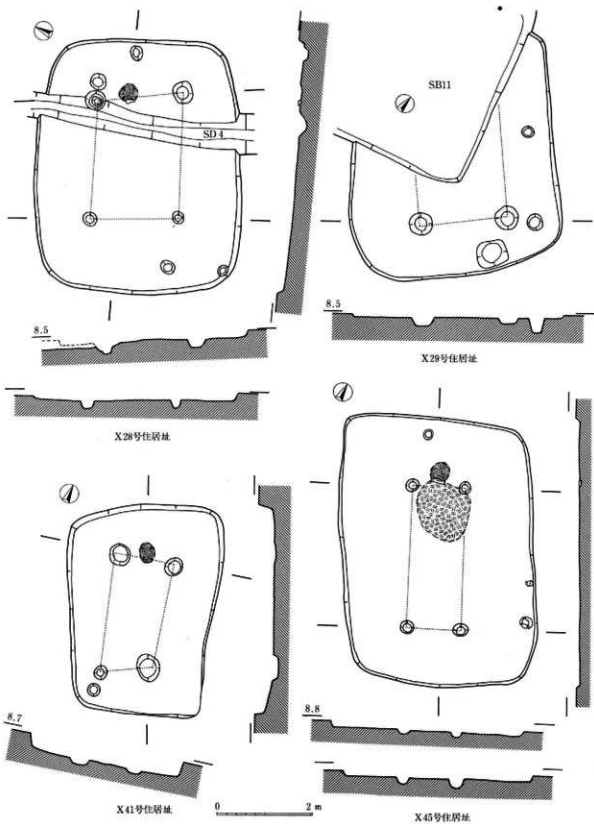
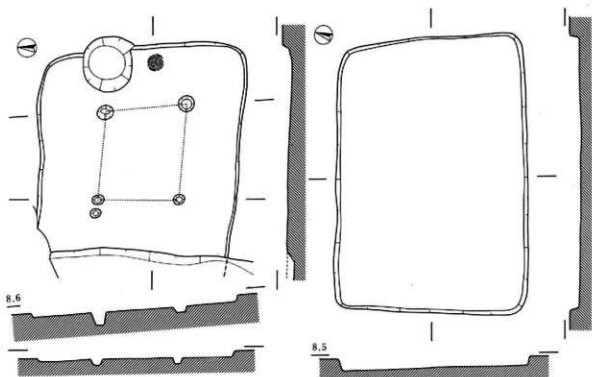


图19 X区弥生时代后期住居址实测图(1)



(上左) 50号住居址
 (上右) 52号住居址
 (下) 48号住居址

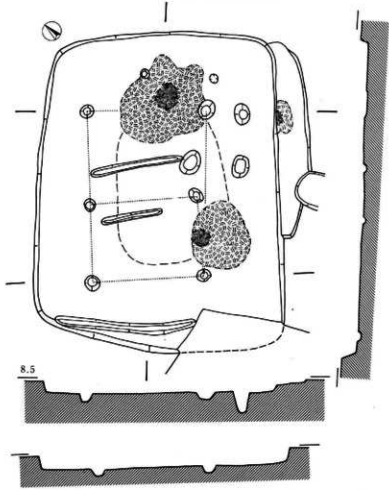


图20 X区弥生時代後期住居址実測図(2)

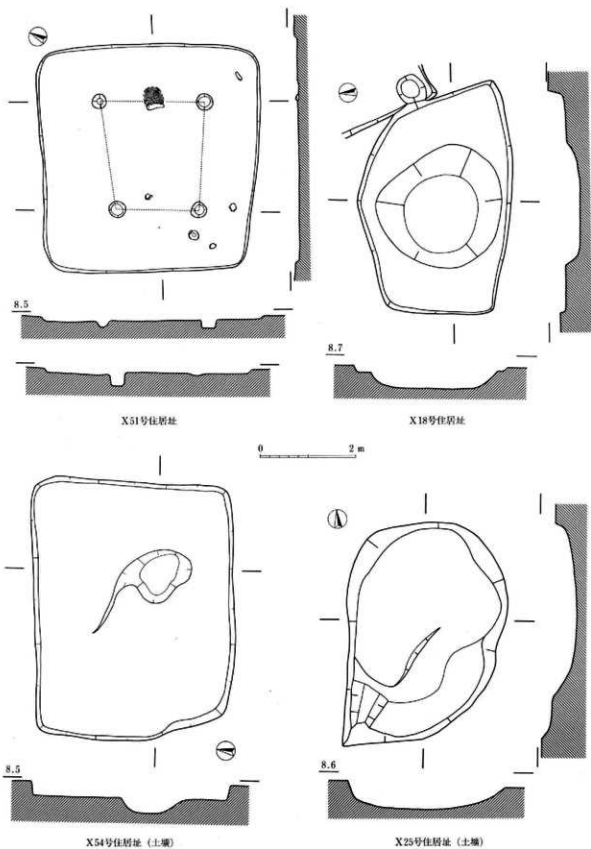


图21 X区弥生时代后期住居址实测图(3)

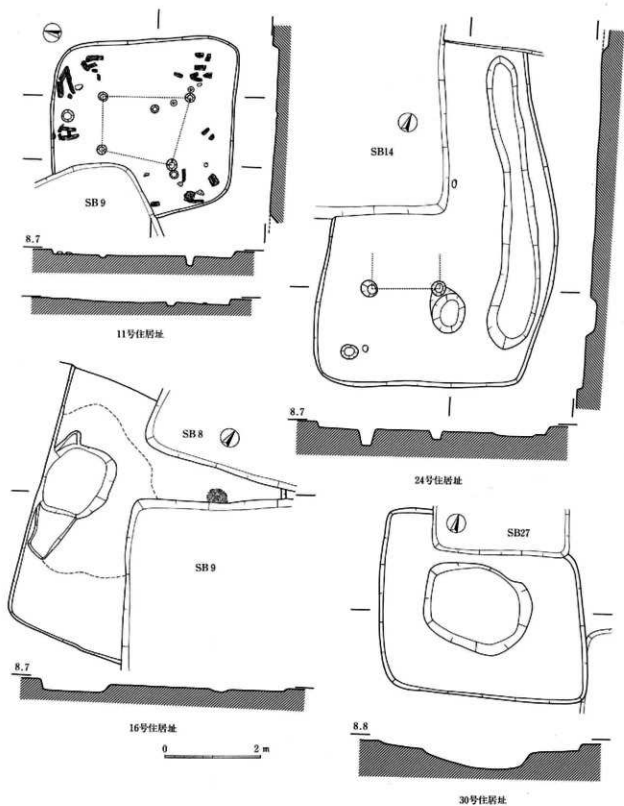


图22 Y区弥生时代后期住居址实测图(1)

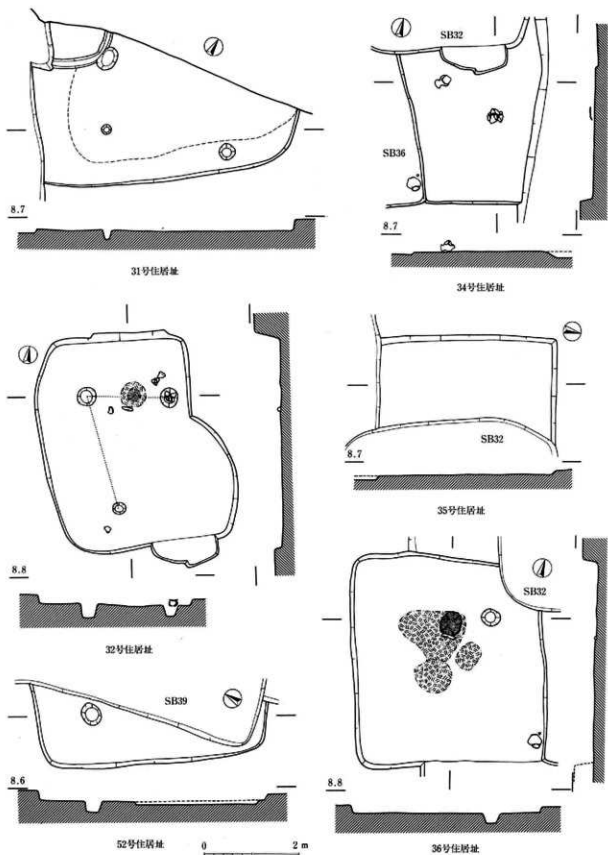


图23 Y区弥生时代后期住居址实测图(2)

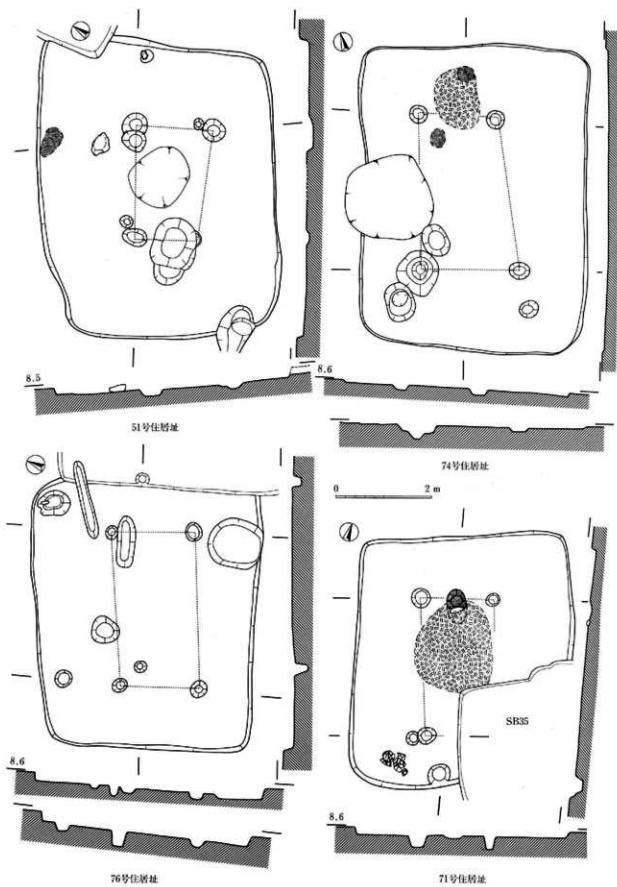


图24 Y区弥生时代后期住居址实测图(3)

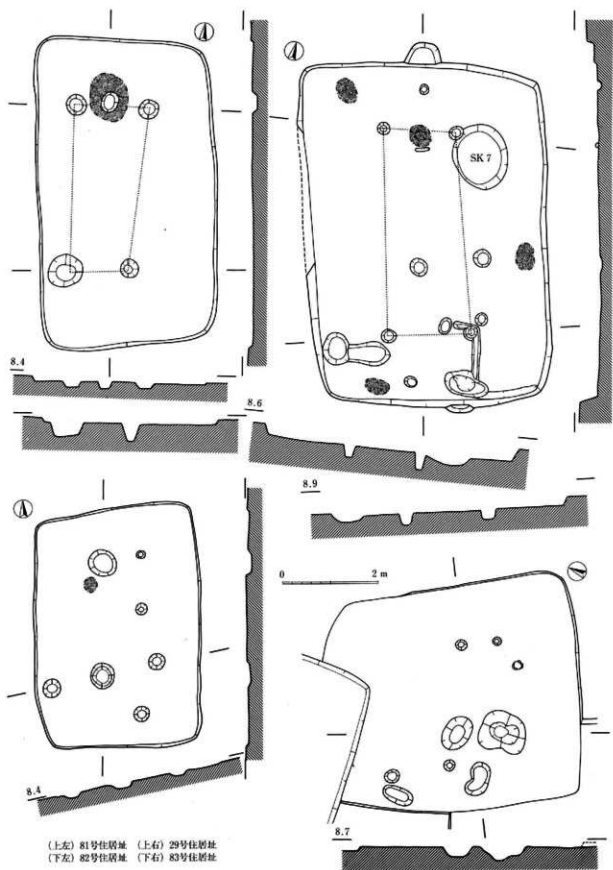


图25 Y区弥生时代后期住居址实例图(4)

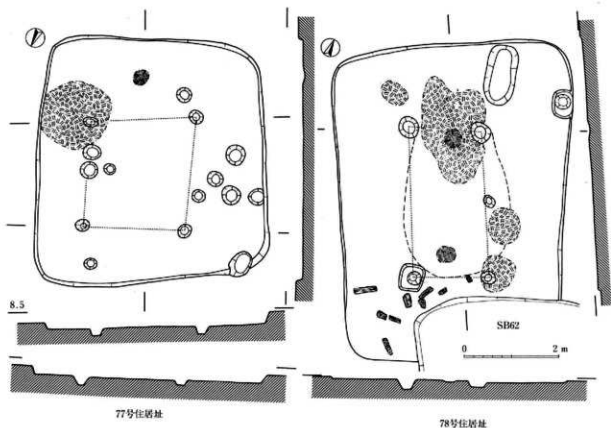


图26 Y区弥生時代後期住居址実測図(5)

弥生時代後期遺構觀察表(4)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
Y区							
52号住居址	23	隅丸長方形?	×5.0	N44°E			38
71号住居址	24	隅丸長方形	5.3×4.7	N27°W	4本柱・柱間枕石炉		39
74号住居址	24	隅丸方形	6.4×4.9	N20°E	北壁棚炉・柱間上炉		38
76号住居址	24	隅丸長方形?	×4.8	N69°E	4本柱		38
77号住居址	26	隅丸方形	5.3×4.9	S25°E	4本柱・柱間上炉		38
78号住居址	26	隅丸長方形	(6.6)×5.1	N27°W	4本柱・柱間下炉・炭化材		40
81号住居址	25	隅丸長方形	6.6×3.9	N10°W	4本柱・柱間炉		40
82号住居址	25	隅丸長方形	5.2×3.6	南北	北壁棚炉		40
83号住居址	25	隅丸方形	×4.7	N25°W			40

(4)遺物 (図27~46)

弥生時代の土器については、一部に古墳時代前期の資料を含むものの、全部で278個体の土器を図化している。紙数の関係からすべてにわたって解説することは不可能であり、以下、良好なセット関係を有するもの、また特殊な例を中心に若干の説明を加える。

A S B 31号住居址 壺(3)が出土している。口縁部が大きく外反し端部は面取りされる。口縁部下端側面に、外側より焼成後の穿孔がなされる。

A S B 35号住居址 広口壺(7・8)、台付甕(6)、甕(9)、高坏(4・5)が出土している。台付甕(6)は、口縁部はハケ整形後横ナデされ、口唇部はハケ原体による刻みがなされる。胴部は内外面ともにハケ整形される。遠江系の台付甕であろう。甕(9)は在地系甕の末期的なもので、文様は頸部に簾状文が施文されるのみである。外面口縁部はハケ整形、胴部はハケ後縦のヘラミガキ、内面はハケ整形のみでミガキは認められない。内面口縁部のハケ原体は外面のハケ原体と同一であるが、胴部の原体はこれらとは異なる。(4・5)はいわゆる欠山タイプの高坏である。(4)は坏部内外面ならびに脚部外面に非常にいい縦ヘラミガキがなされ、口唇部内側は面取りされる。(5)は在地化したもので、いい縦ヘラミガキで仕上げられるが、口唇部の面取りはなされず、坏部外面底部にはヘラ削りがなされる。弥生時代終末期の様相を非常によく物語る資料であろう。

A S B 47号住居址 甕(10)が出土している。頸部の文様は簾状文ではなく、壺同様T字文が施文されている。善光寺平では例外的な存在で、上田盆地で多用される文様である。

A S B 45号住居址 本遺跡出土の後期弥生土器の中では最も古手の良好な資料である。壺(14)にはT字文が施文されるが、壺(15)は簾状文で構成される。甕(16・19)は口縁部がいまだ未発達な状況を呈するが、文様構成はその他のものも含めて確立されている。高坏(26・27)は、口縁部がつば状に外反する長脚有稜高坏であろう。箱清水式の確立段階の土器群であろう。

C S B 6号住居址 箱清水式後半段階の土器群で、甕(30~37)・片口(38)・坏(39~40)が出土している。甕は(30~31)に顕著なように口縁部の伸長が著しいが、文様は定型的な施文順序を守っており、また内面の整形にもいまだヘラ削りは認められない。ただし(35)の台付甕内面頸部付近はヘラミガキ以前にヘラ削りがなされている可能性がある。

X S B 18号住居址 調査時点においては住居址と想定したが、土壌出土の一括資料である。甕(57~59)・台付甕(60)・坏(61)・高坏(63)等出土している。甕(58・59)は箱清水式系甕の末期的様相を呈するもので、(58)は波状文施文後に頸部に簾状文を施文し、胴下半はヘラ削りのみでミガキはなされない。内面口縁部は横ヘラミガキされるもの、胴上半はハケ、底部付近は削りで仕上げられ、ミガキは認められない。(59)は球形化した胴部に直立気味の頸部と端部に至って外反度を強める口縁部を呈する。この時期に特徴的な形態の甕で、文様は胴下半まで波状文が充塞され、底部付近はヘラ削りで仕上げられる。内面口縁部は強い横ナデがなされるのみで、胴部も全体にヘラ削りで仕上げられている。ともに前代に通行のミガキ技法の消失化が顕著な資料である。台付甕(60)は東海系の台付甕で、口唇部はつまみ上げ状の強い横ナデがなされ、口縁部も横ナデで仕上げられる。胴部から脚部は全体にハケ整形で仕上げられる。内面も全体にハケ整形されるが、胴下半にはユビナデもしくは板ナデ状の正痕が顕著に認められる。S字甕a類と形態的には強い共通性が認められよう。高坏(63)は欠山タイプの高坏の在地化したものと想定される。A S B 35号住居址資料との時間的前後関係は即断できぬが、同住居址資料同様、箱清水式の終末段階の様相を物語る良好な一括資料である。

X S B 45号住居址 壺(83)・甕(84~87)・台付甕(88)が出土している。甕(83)は口縁部と底部を欠損するがかなり球形化したものである。頸部にはT字文と簾状文を施文するが、T字文は直線文をヘラミガキによ

て縦方向に磨り消し赤彩している。胴部くびれ部以上は赤彩されるが、くびれ部以下も部分的に鋸歯状にヘラミガキし赤彩している。甕(86)は口唇部がつまみ上げ状の強い横ナデによって面取りされる。また頸部の屈曲も著しく、文様の施文順序にも一部乱れがあるが、内面は全体にヘラミガキで仕上げられる。箱清水式後半段階の資料であろう。

Y S B 11号住居址 在地の箱清水式と北陸系土器が混在する形で出土している。在地のものには赤彩深鉢(105・110)・台付甕(107)・台付鉢(108)・高坏(106)・坏(109)・底部穿孔鉢(111)がある。時期を特定できる資料を欠くが、赤彩深鉢(105)の胴部の球形化が著しい点や、台付鉢(108)の脚部に2列の円孔が認められるなど箱清水式期後半段階の資料といえる。北陸系の土器には、甕(112・113)・蓋(114・115)・有台鉢(116~118)がある。甕(112)は口唇部がつまみ上げ状の強い横ナデによって面取りされ、胴部は内外面ともにハケ整形される。(113)は胴下半で、底部周辺のみヘラ削りがなされ、ともに胎土は在地のものとは異なる。蓋(114・115)は笠形の体部につまみがつくもので、箱清水式の蓋形土器と形態的には大差はないが、口唇部が面取りされる点や、体部の整形が内外面ともにハケ整形のみで、ヘラミガキがなされないなどの特徴が認められ、北陸系と判断した。有台鉢(116~118)は善光寺平南部では初出の器形である。台部が中実で、ヘラミガキや赤彩が多用されるなどかなり在地化した様相を示すが北陸系の土器であろう。従来善光寺平南部で得られている北陸系土器は甕・壺・高坏・器台などが単体で出土した例が多いが、本住居址では甕・蓋・有台鉢と出土土器の半数が北陸系土器で占められている点、特徴的である。また住居址の形態も隅丸方形を呈しこの時期にしては異質である点も注目しておきたい。

Y S B 30号住居址 箱清水式的最盛期の土器群である。壺(134)は群馬の樽式系の土器で、算盤玉状の胴部に直立気味の頸部がつく。頸部には3連止め簾状文施文後、上下に波状文を施文し、頸部文様帯以下は底部までヘラミガキ・赤彩されている。甕(135~141)は、後の描き足しによって不規則な文様となる(141)を除き、頸部に簾状文施文後、口縁部は下から上へ、胴部は上から下に、区画単位ごとに波状文を充填する箱清水式の典型的な施文方法を採用している。外面胴下半ならびに、内面は全体的に非常にいいヘラミガキによって仕上げられ、ヘラ削りは認められない。(139)は口唇部がつまみ上げ状に面取りされ、簾状文が施文されている。(142・143)は長脚有稜高坏の脚部で、ともにいいヘラミガキ・赤彩され、三角形の透かし孔が施される。

Y S B 34号住居址 壺(152)はほぼ完形品である。頸部は直線文のみで、整形も全体に丁寧なヘラミガキで仕上げられ、赤彩はされない。胴部の球形化から箱清水式後半期の資料であろう。(155)は小型器台である。磨耗のため詳細不明だが、脚部には円形透孔が認められる。住居址の切り合いが激しいための混入品と想定される。(154)は有孔鉢である。在地のものと比較して底部付近がかなり厚くつくられており、あるいは北陸地方にその系譜を求めるべきものかも知れない。ただし胎土は在地のものである。外面は横ヘラミガキ、内面はヘラナデ後軽いヘラミガキによって仕上げられている。甕(153)は口縁が直立気味に立ち上がりやや古相を呈するが、口唇部はヘラ削りによって面取りされている。文様は磨耗のため詳細不明だが、箱清水式の基本的な施文方法を行っているものと思われる。

Y S B 36号住居址 箱清水式終末に近い段階の壺(133)が出土している。口縁端部は受け口気味に立ち上がり、外面には波状文が施文されている。頸部文様にはT字文が描かれ、その下端に等間隔止め簾状文が加えられる。全体に丁寧にヘラミガキされるが、赤彩はされない。底部は焼成後打ち欠かれている。

Y S B 51号住居址 壺(156)は頸部に二本一対の輪描T字文を3か所に描き、その下端にヘラ描鋸歯文を配している。鋸歯文内部はハケ調整痕をそのまま残し、鋸歯文施文後に周囲を磨り消して斜走沈線充塞風にしている。文様自体は古い様相を残すが、T字文が確立している点や、胴部の球形化から箱清水式のなかでも新しい時期の

ものといえよう。甕(157)は頸部に簾状文施文後、口縁部は下から上に、胴部は上から下に区画単位毎に波状文を充填し、各区画単位は右回りの順に施文されている。

Y S B 71号住居址 箱清水式後半段階の資料である。甕(174・176・177)は器形的に非常に共通性が高い。倒卵形の胴部に長く、くの字状に反する口縁が付き、口径と胴部最大径がほぼ等しい。口唇部はいずれもつまみ上げ状に強く横ナデが面取りされる。(176・117)は頸部に直線文施文後、口縁部は下から上へ、胴部は上から下へ区画単位ごとに波状文を充填し、区画単位は右回りの順に施文されている。(174)は頸部簾状文を欠くが、頸部付近を境に、口縁部は下から上へ、胴部は上から下にやはり区画単位毎に波状文が充填され、区画単位は右回りの順に施文されている。いずれの土器も胴下半ならびに内面はていねいなヘラミガキで仕上げられ、ヘラ削りは確認できない。(175)は口縁から胴部まで区画単位毎に上下の施文順序を逆にして波状文を充填している。(179)は内外面ともにハケ整形で仕上げられる。ことに外面のハケ整形は東海のS字状口縁台付甕と同様の調整であるが脚台はつかない。また内面にも縦方向のハケ整形がなされる点、S字甕とは異なる。胎土は在地の胎土とはまったく異質であり、その系譜は不明瞭ではあるが、東海系の土器としてとらえておきたい。

その他 (224)は甕口縁部破片である。口縁端部は受け口状に立ち上がり、口唇部は平らに面取りされる。口縁部外面にはヘラによって鋸歯文を描き、その下端にハケ原体による連続刺突を施している。また頸部以下はハケ整形されるようである。口縁部内面は全体にナデ整形で仕上げられる。胎土も在地のものと比べ異質である。近江～東海に系譜が求められる土器であろう。(236)も東海のS字状口縁台付甕口縁部破片である。内外面ともナデによって仕上げられる。(225)は樽式系の壺口縁部破片であろう。口縁端部は粘土帯貼りつけによる複合口縁を呈し、ヘラ状工具先端による連続刻みを施す。口縁部は内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げられる。Y S B 76号住居址の(168)は、外面ならびに内面口縁部に丁寧なヘラミガキ・赤彩がなされる。胴部の形状はやや扁平化しているが、在地化した北陸系の有段口縁細頸壺であろう。(234)は有段口縁壺破片で、口唇部は強いつまみ上げ状の横ナデがなされ、口縁部下端には2帯の擬凹線文が施される。内面は全体に軽い横ヘラミガキがなされる。(235)は北陸系の脚付直口細頸壺の胴部破片であろうか。粘土帯貼りつけによる突帯部分で、4本の擬凹線文が施され、全体にヘラミガキ・赤彩される。胎土は在地のものである。(245)は北陸系の有段口縁擬凹線文甕の在地化したもので、外面には擬凹線文が施されるが、内面は横方向の軽いヘラミガキで仕上げられる。(252)は北陸系の小型有段口縁広口壺である。口縁部外面には3本の擬凹線文が施され、胴部にはハケ原体先端による刻みが施される。磨耗のため細かい調整は不明であるが、胎土から明らかに搬入品ととらえられる。(232)は壺の口縁部破片である。内外面ともヘラミガキ・赤彩で仕上げられることより在地のものであるが、有段口縁を呈すると思われ、屈曲部に粘土帯が貼りつけられている。現在のところ類例はない。壺(3)は口縁部下端に、鉢(48)は底部側面に、甕(266)も底部側面にそれぞれ焼成後に穿孔がなされている。壺(92・133)はともに一般的な焼成後の底部穿孔であるが、これらはこのような定型化した焼成後の底部穿孔と、同一の意識下においてなされたものであるか今後の検討課題であろう。時期的にはいずれの土器も、箱清水式のなかでも新しいもので後期後半から終末段階の資料と想定される。

以上、比較的良好なセット関係を有するもの、ならびに外来系土器など特殊なものを中心に簡単な説明を行った。出土した土器群から時間的な変遷を考慮するならば、大まかにA S B 45号住居址→Y S B 30号住居址→Y S B 71号住居址→X S B 18号住居址→A S B 35号住居址といった変遷が想定されるであろう。それぞれの住居址に代表される各小期は、その存続期間ならびに内容は決して均質ではなく、また本道跡では確認し得なかった段階の存在も想定されるが、箱清水式土器の確立から崩壊まで、各段階の資料が比較的充実した状態で得られた点は本道跡の特徴と評価し得るものであろう。

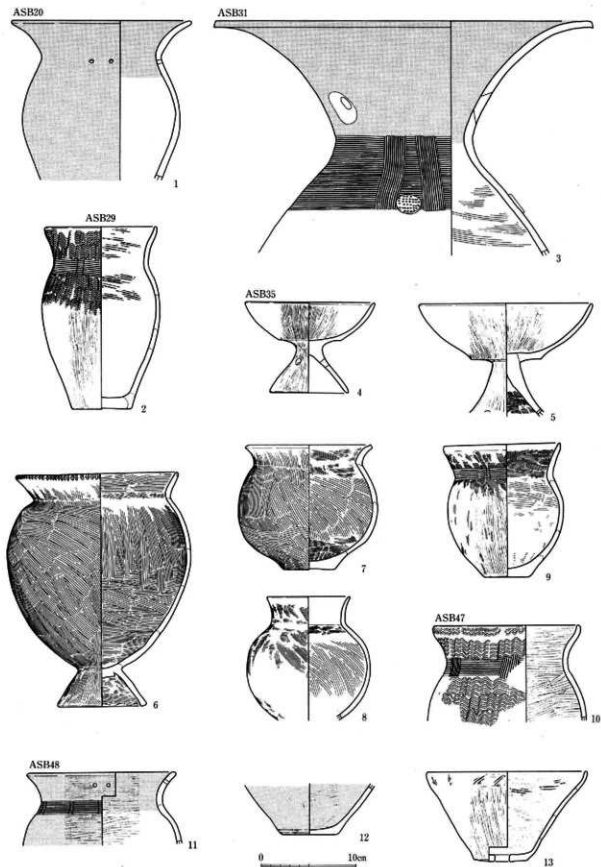


图27 A20号(1)、A29号(2)、A31号(3)、A35号(4~9)、A47号(10)、A48号(11~13)
住居址出土土器实测图

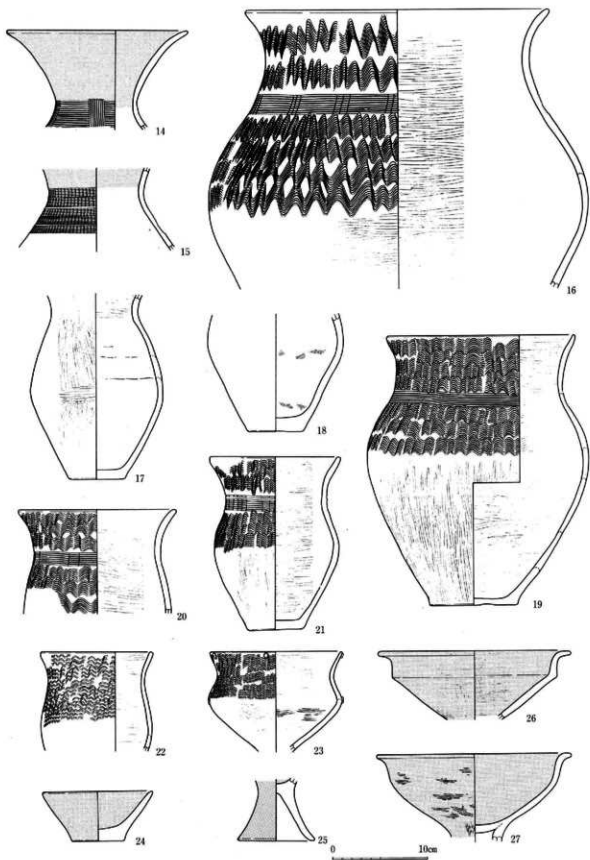
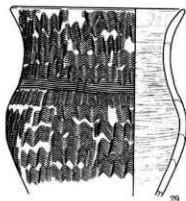
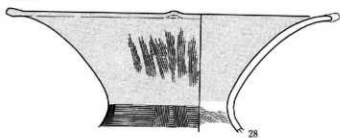
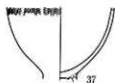
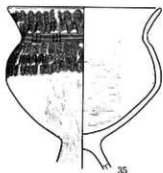
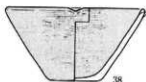
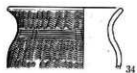
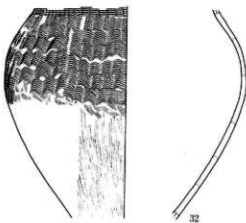
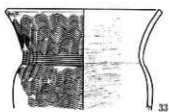
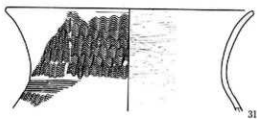
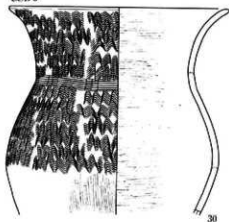


图28 A45号(14~27)住居址出土土器实测图

BSB11



CSB 6



0 10cm

图29 B11号(28·29)、C6号(30~40)住居址出土土器实测图

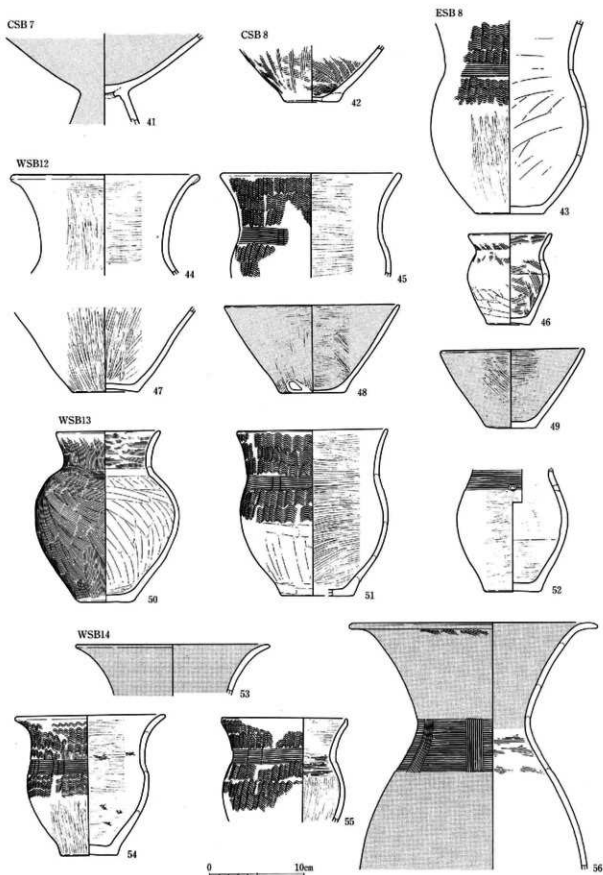


图30 C 7号 (41)、C 8号 (42)、E 8号 (43)、W12号 (44~49)、W13号 (50~52)、W14号 (53~56)
住居址出土土器实测图

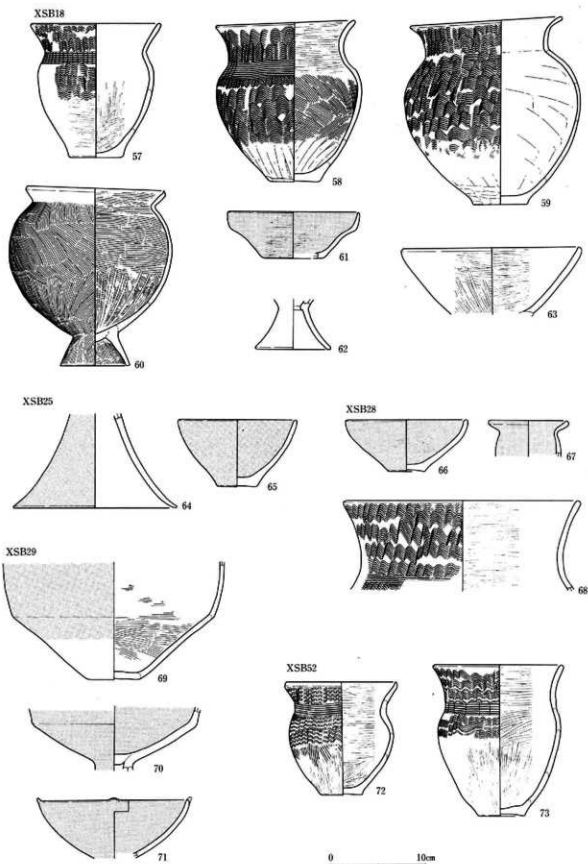
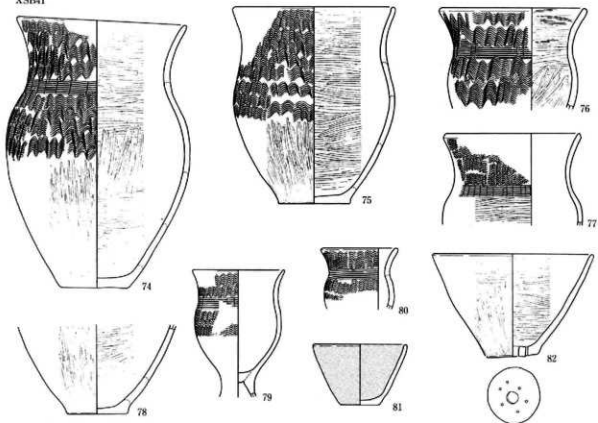


图31 X18号(57~63)、X25号(64·65)、X28号(66~68)、X29号(69~71)、X52号(72·73)
住居址出土土器实测图

XSB41



XSB45

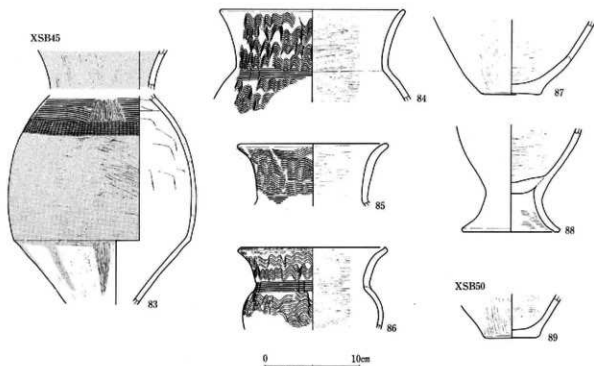


图32 X41号(74~82)、X45号(83~88)、X50号(89)住居址出土土器实测图

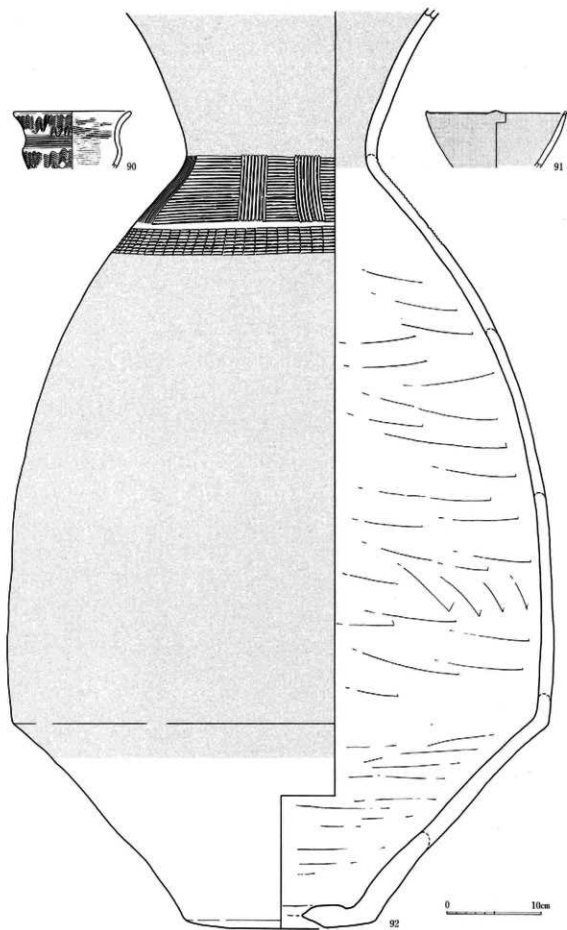
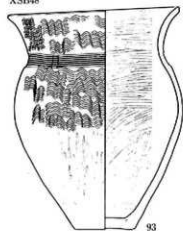
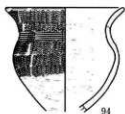


图33 X54号(90~92)住居址出土土器实测图

XSB48



93



94



96

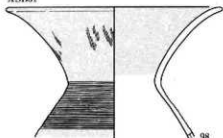


95

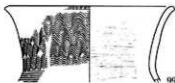


97

XSB51



98



99



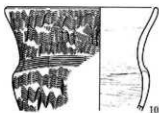
100



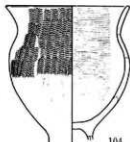
101



102

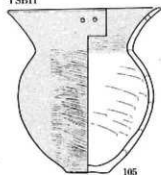


103



104

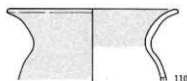
YSB11



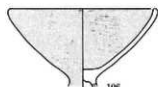
105



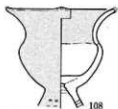
107



110



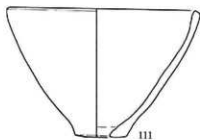
106



108



109



111

0 10cm

图34 X48号(93~97)、X51号(98~104)、Y11号(105~111)住居址出土土器实例图

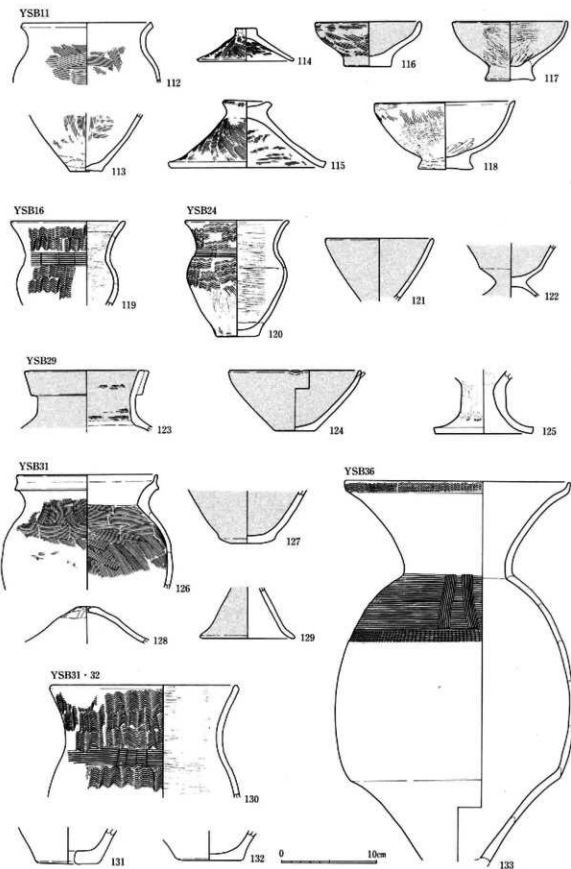


图35 Y11号(112~118)、Y16号(119)、Y24号(120~122)、Y29号(123~125)、Y31号(126~129)、Y31号·32号(130~132)、Y36号(133)住居址出土土器实测图

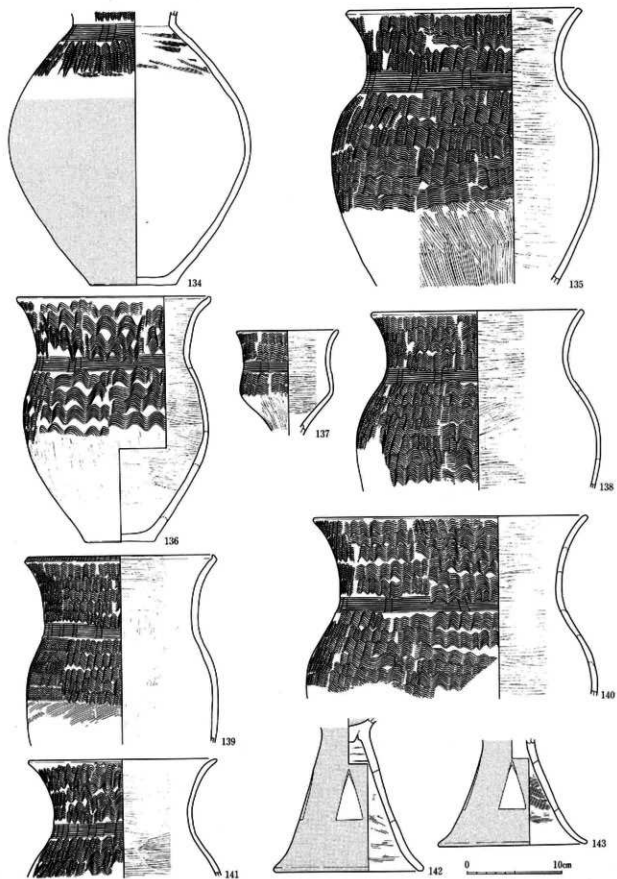
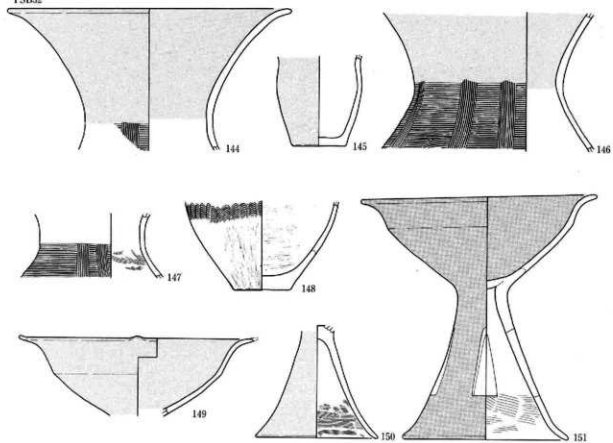


图36 Y30号 (134~143) 住居址出土土器实测图

YSB32



YSB34

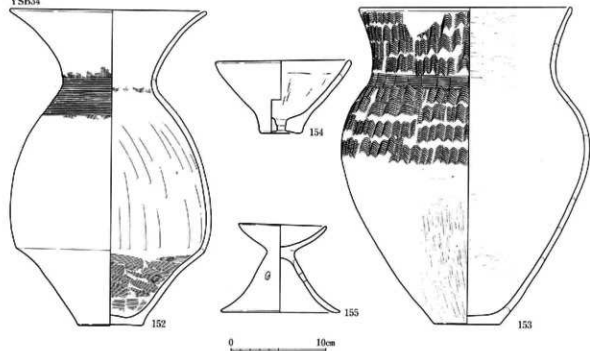


图37 Y32号(144~151)、Y34号(152~155)住居址出土土器实测图

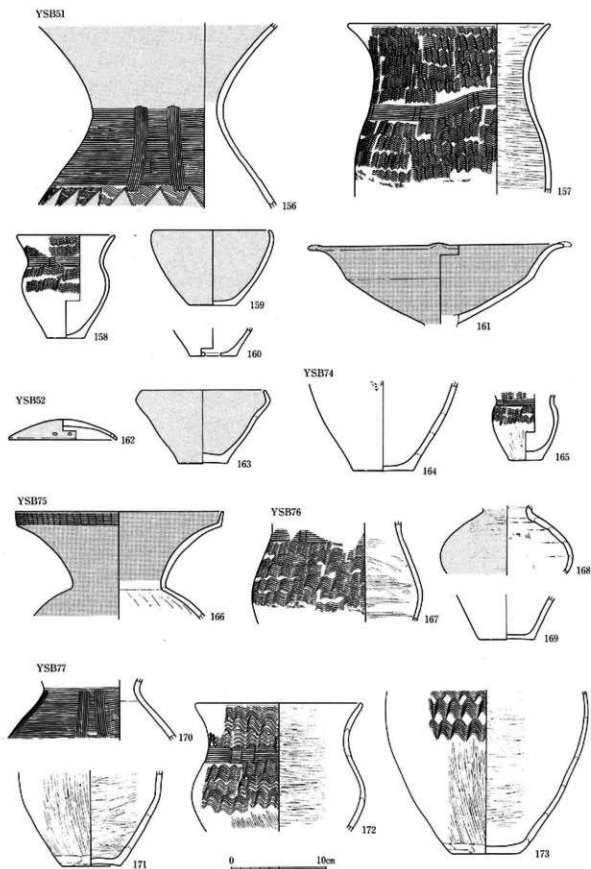


图38 Y51号(156~161)、Y52号(162·163)、Y74号(164·165)、Y75号(166)、Y76号(167~169)、Y77号(170~173) 住居址出土土器实测图

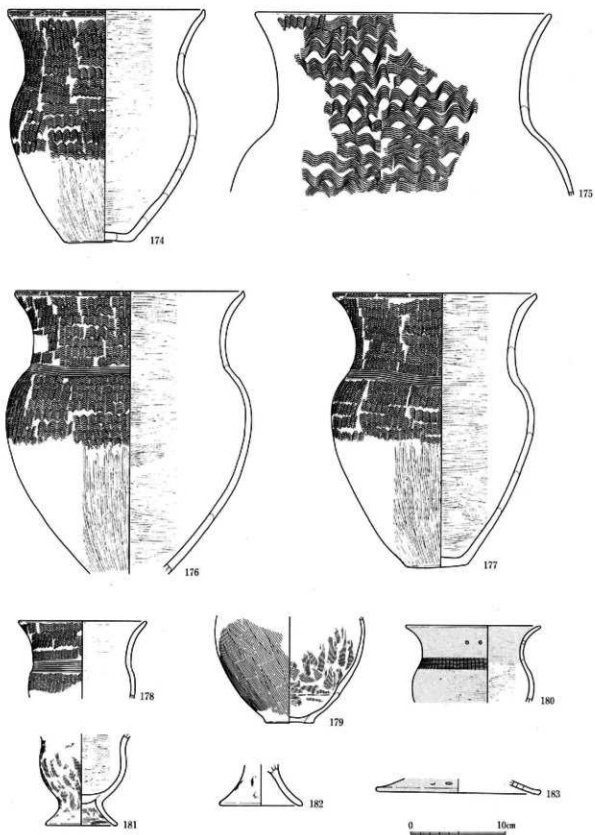


图39 Y71号 (174~183) 住居址出土土器实测图

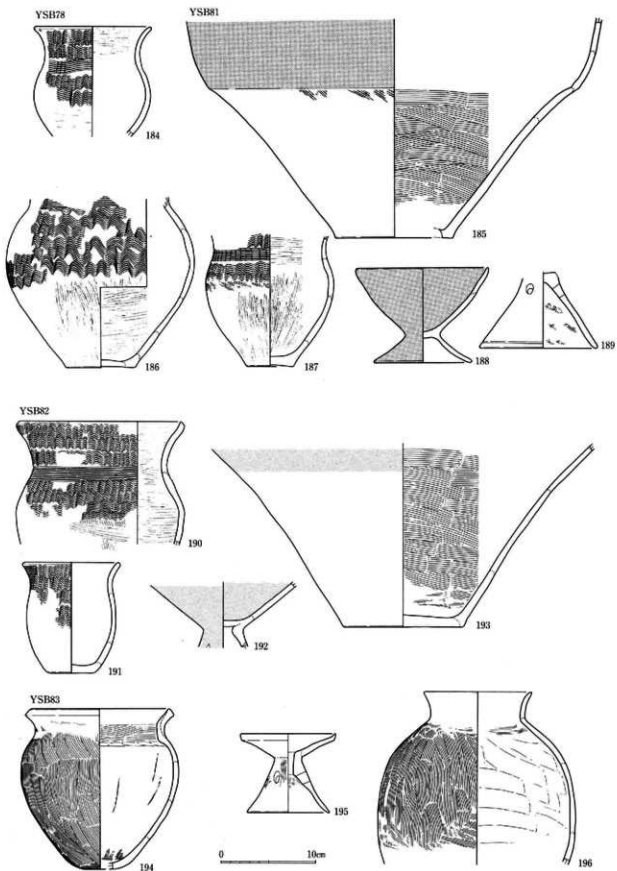


图40 Y78号(184)、Y81号(185~189)、Y82号(190~193)、Y83号(194~196)住居址出土土器实测图

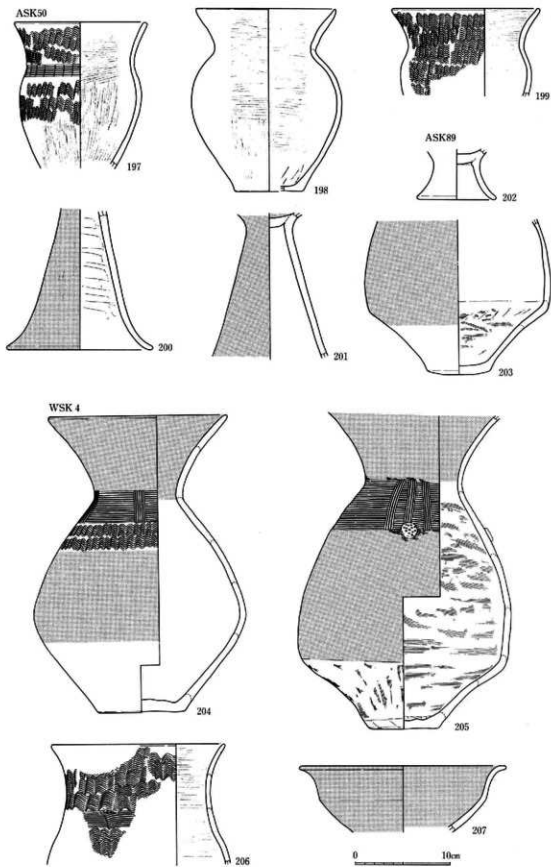


图41 A50号(197~201)、A89号(202·203)、W4号(204~207)土城出土土器实测图

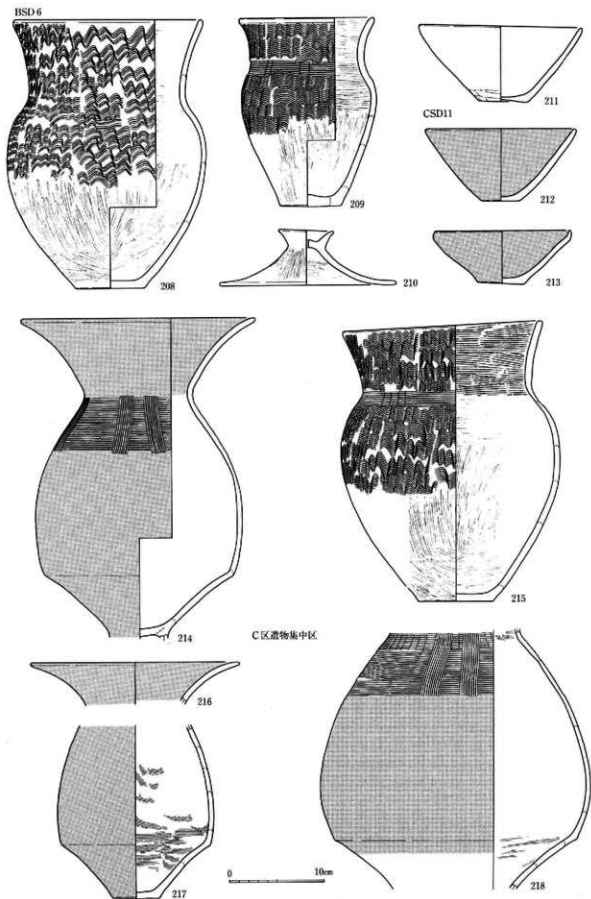


图42 B 6号清址 (208~210)、C11号清址 (211~215)、C区器物集中区 (216~218) 出土土器实测图

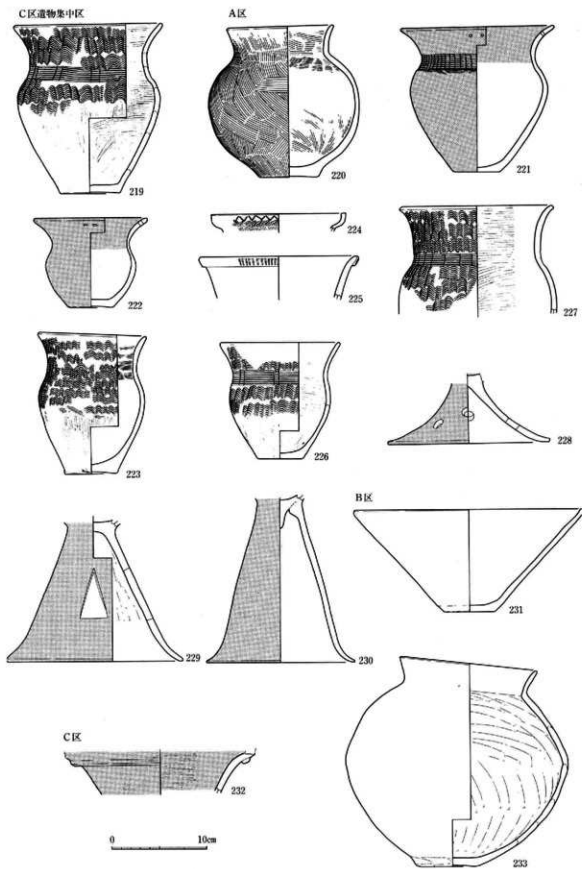


图43 C区遺物集中区(219)、A区(220~230)、B区(231)、C区(232·233)出土土器実測図

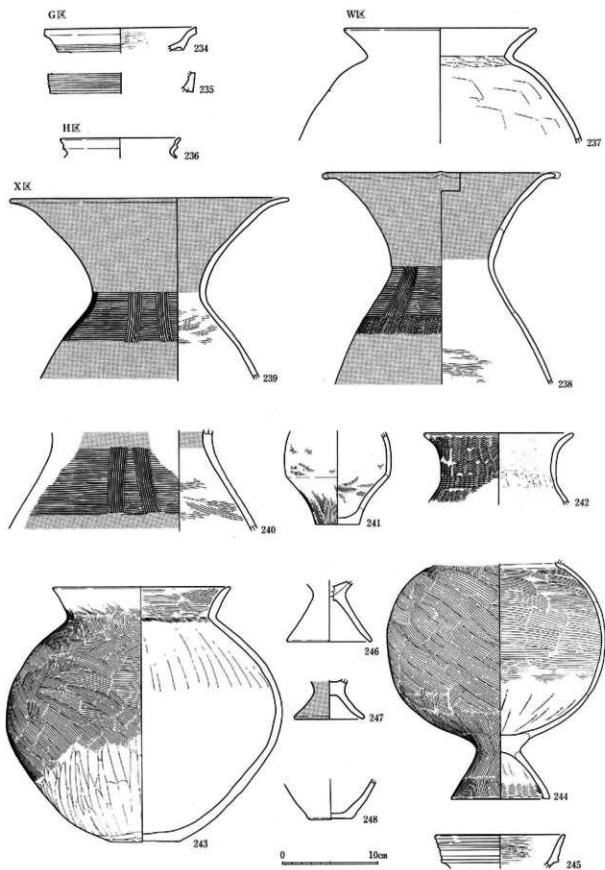


图44 G区 (234·235)、H区 (236)、W区 (237·238)、X区 (239~248) 出土土器实测图

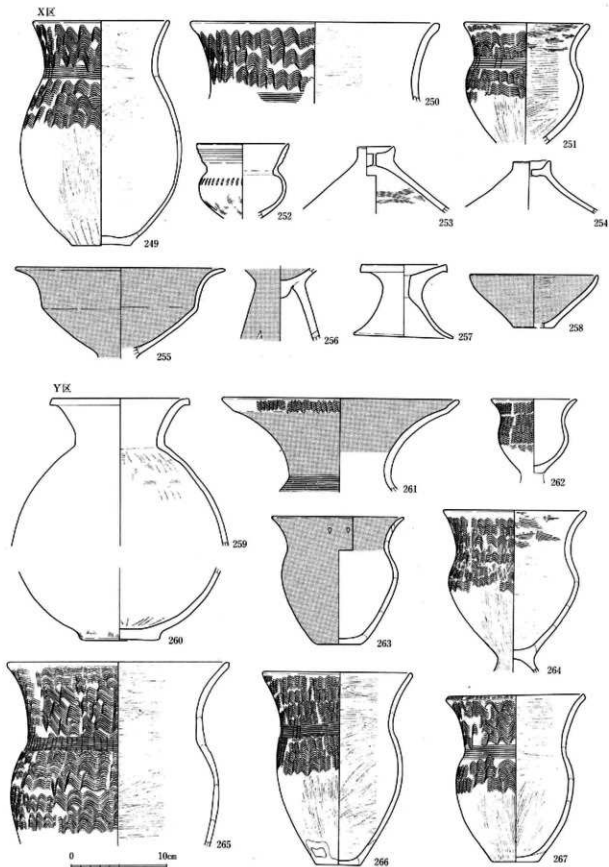


图45 XI区(249~258)、Y区(259~267)出土土器实测图

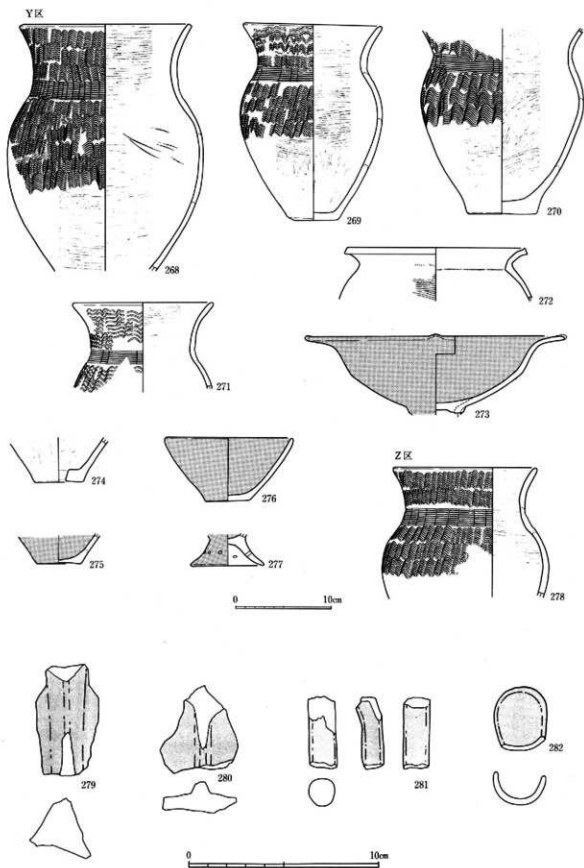


図46 Y区(268~277)、Z区(278)出土土器および土製品類(279~282)実測図

弥生時代後期遺構出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)			遺存 土	成 形・調 整・文 様		備 考
		口径	底径	胎高		外 面	内 面	
A 20号住居址								
1	赤彩深鉢	19.1	—	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩 頸部と2ヶ所対の穿孔	口縁～頸部：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ
A 29号住居址								
2	甕	11.8	6.3	19.4	2/3		頸部：右回り2連止の籠状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ 底部： ヘラケズリ→ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ(詳細不明)
A 31号住居址								
3	壺	40.2	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：2本一對の丁字文。直線文4(上→下)→円形浮文→刺突 口縁部外面上段成後穿孔1	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ナデ
A 35号住居址								
4	高坏	13.7	8.3	9.6	3/4		坏部：縦ヘラミガキ 脚部：縦ヘラミガキ 円形透孔	口唇部：面取り 坏部：放射状のヘラミガキ 脚部：ナデ
5	高坏	18.5	—	—	2/3		坏部：縦ヘラミガキ 坏底部：ヘラケズリ部分的上ヘラミガキ 脚部：ハケ→縦ヘラミガキ 円形透孔3	坏部：縦ヘラミガキ 脚部：ハケ
6	台付鉢	17.1	9.4	24.9	完	○	口唇部：ハケ原体による刻み 口縁：ハケ→強横ナデ 胴部：ハケ 脚部：ハケ	口縁：ハケ 胴部：ハケ 脚部：ハケ
7	広口壺	13.4	5.4	13.2	完		口唇部：つまみ上げ状の横ナデ面取り 口縁～胴部：ハケ 底部：ナデ	口縁～胴部：ハケ 口縁と底部付近のハケ原体は、外面と異なる
8	短頸壺	8.8	—	—	1/2		口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ハケ 2種のハケ原体使用。胴部のハケ原体は外面と同一
9	甕	12.5	4.8	14.0	5/6		口唇部：面取りぎみの強横ナデ 口縁：ハケ 頸部：右回り2連止の籠状文 胴部：ハケ→縦ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	口縁～胴部：ハケ 2種のハケ原体使用。口縁部のハケ原体は外面と同一
A 47号住居址								
10	甕	15.2	—	—	1/2		頸部：簡丁字文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ
A 48号住居址								
11	赤彩深鉢	15.7	—	—	1/2		口縁：横ヘラミガキ・赤彩 2ヶ所対の凹孔 頸部：右回り2連止の籠状文 胴部：横ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ
12	坏	—	6.0	—	2/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部周辺のみ横ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩
13	有孔鉢	17.1	5.6	9.6	3/4		坏部：ハケ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ→ナデ 焼成前穿孔1	斜ハケ→横ヘラミガキ
A 45号住居址								
14	壺	19.3	—	—	3/4		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：簡丁字文、5ヶ所	横ヘラミガキ・赤彩
15	壺	—	—	—	3/4		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：右回り等間隔止の籠状文5(上→下) 胴部：斜ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラナデ
16	甕	32.2	—	—	5/6		頸部：右回り3連止の籠状文 口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(下→上) 胴下半：横ヘラミガキ	横ヘラミガキ
17	壺	—	6.0	—	3/4		胴部：ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ 胴部：ナデ
18	壺	—	5.8	—	3/4		縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラナデ
19	甕	20.0	9.4	28.6	3/4		口唇部：若干内湾 頸部：簡直線文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	全体上横ヘラミガキ

弥生時代後期遺構出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)			遺存 土	成 形・調 整・文 様		備 考
		口径	底径	器高		外 面	内 面	
20	甕	16.8	—	—	3/4	頸部: 右回り2連止の縷状文→口縁: 波状文(下→上) 胴部: 波状文(上→下)	横へらミガキ	
21	甕	13.8	6.0	18.4	完	口唇: 若干内湾 頸部: 右回り4連止の縷状文→口縁: 波状文(下→上) 胴部: 波状文(上→下) 胴下半: 縦へ らミガキ 底部: へラケズリ	横へらミガキ	
22	甕	12.0	—	—	4/5	口縁→胴部: 波状文(上→下) 胴下半: 縦へらミガキ	横へらミガキ	
23	台付甕	14.0	—	—	2/3	口唇: 面取りさみ 口縁→胴部: 波状文(上→下)→円形 浮文 胴下半: へらミガキ	ハケ→横へらミガキ	
24	坏	11.7	5.6	5.4	2/3	坏部: へらミガキ・赤彩 底部: へらミガキ	へらミガキ・赤彩	
25	高坏	—	8.2	—	1/3	へらミガキ・赤彩	坏部: へらミガキ・赤彩 胴 部: ナデ	
26	高坏	20.4	—	—	3/4	へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	
27	高坏	20.6	—	—	完	ハケ→へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	
B11号住居址								
28	壺	33.8	—	—	1/6	口唇: 山形突起 口縁: ハケ→へらミガキ・赤彩 頸 部: 2本一對の縄文字文	口縁: 横へらミガキ・赤彩 頸部: ハケ→ナデ	
29	甕	18.6	—	—	3/4	頸部: 右回り2連止の縷状文 口縁: 波状文(下→上) 胴部: 波状文(基本的に上→下) 波状文は基本的に右回 りの区画単位施文	粗い横へらミガキ	
C6号住居址								
30	甕	23.4	—	—	3/4	頸部: 右回り3連止の縷状文→口縁: 波状文(下→上) 胴部: 波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半: 縦へらミガキ	横へらミガキ	床
31	甕	26.6	—	—	1/6	口唇: 面取り 頸部: 簡直線文?→口縁: 波状文(下→ 上) 胴部: 波状文 波状文: 右回り区画単位施文	横へらミガキ	
32	甕	—	—	—	完	頸部: 右回り等間隔止の縷状文→胴部: 波状文(上→下) 胴下半: ハケ→縦へらミガキ	ハケ→へらミガキ	床
33	甕	16.6	—	—	1/4	口唇: 横ナデ・面取り 頸部: 右回り4連止の縷状文→ 口縁: 波状文(下→上) 胴部: 波状文(上→下) 波状 文: 右回り区画単位施文	横へらミガキ	床
34	甕	12.2	—	—	完	口唇: 横ナデ・面取り 頸部: 左回り2連止の縷状文→ 口縁: 波状文(上→下) 胴部: 波状文(上→下)	横へらミガキ	床
35	台付甕	16.2	—	—	完	頸部: 右回り3連止の縷状文→口縁: 波状文(下→上) 胴部: 波状文(上→下) 胴下半→胴部: 縦へらミガキ	胴部: 部分的なへラケズリ→ へらミガキ 胴部: ナデ	床
36	甕	—	7.6	—	1/3	胴下半: 縦へらミガキ 底部: へらミガキ	斜へらミガキ	床
37	台付甕	—	—	—	1/3	波状文 へらミガキ?	へらミガキ?	床
38	片口鉢	14.9	5.6	7.8	3/4	片口 へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	床・覆土
39	坏	11.8	6.2	7.1	1/4	坏部: へらミガキ・赤彩 底部: へラケズリ→へらミガキ	へらミガキ・赤彩	床
40	坏	9.7	4.7	4.9	1/3	坏部: へらミガキ・赤彩 底部: へらミガキ	剥落・詳細不明	床
C7号住居址								
41	高坏	—	—	—	1/6	へらミガキ・赤彩 胴の接合は円板充塞	坏部: へらミガキ・赤彩 胴 部: ナデ	
C8号住居址								
42	壺	—	5.8	—	3/4	○ 横→斜ハケ→縦ハケ 底部からの成形は輪台技法による	くもる車状のハケ	床
E8号住居址								
43	甕	—	7.4	—	2/3	頸部: 簡直線文→口縁: 波状文(下→上?) 胴部: 波状 文(上→下?) 胴下半: 縦へらミガキ 磨耗詳細不明	へラケズリorハケ 磨耗詳 細不明	
W12号住居址								
44	壺	20.2	—	—	1/3	口唇: 部分的に折り返し口縁さみに肥厚 横へらミガキ 口縁: 縦へらミガキ	横へらミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(3)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
45	甕	19.3	—	—	1/4		頸部：右回り4連止め縹状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文：右回り区画単位施文	横へらミガキ	
46	甕	8.9	4.7	9.7	完		口縁：横ナデ 頸部～胴上半：ハケ 胴下半：へらケズリ 底部：へらケズリ	口縁：横ハケ 胴部：ハケ	
47	甕	—	7.0	—	2/3		胴下半：へらミガキ 底部：へらケズリ	へらミガキ	
48	坏	18.5	6.9	9.3	1/3		坏部：へらミガキ・赤彩 底部：へらミガキ 底部側面に焼成後穿孔1	へらミガキ・赤彩	
49	坏	15.3	5.2	8.4	3/4		坏部：へらミガキ・赤彩 底部：へらミガキ	へらミガキ・赤彩	
W13号住居址									
50	壺	11.2	5.6	18.2	完		口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ 底部：ナデ	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：へらナデ	和内
51	壺	—	6.0	—	2/3		頸部：横直線文2 焼成後穿孔1 胴部：へらミガキ 底部：ナデ	雄なへらミガキ	
52	甕	15.9	7.6	12.6	3/4		頸部：右回り2連止め縹状文→口縁部：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴部下半：へらケズリ→縦へらミガキ 底部：へらケズリ→へらミガキorナデ	横へらミガキ	
W14号住居址									
53	壺	20.6	—	—	3/4		へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	
54	甕	13.4	—	—	1/3		口縁：受口状 頸部：右回り2連止め縹状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文：右回り区画単位施文	ハケ→へらミガキ	
55	甕	16.2	6.2	14.8	完		頸部：右回り3連止め縹状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴部下半：へらミガキ	ハケ→へらミガキ	
56	壺	26.4	—	—	2/3		口縁：へらミガキ・赤彩 頸部：横丁字文6 直線文上→下4 胴部：へらミガキ・赤彩	口縁：へらミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	
X18号住居址									
57	甕	13.7	5.8	14.3	1/5		頸部：右回り等間隔止め縹状文→口縁 胴部：波状文(施文順序不明) 胴下半：雄なへらミガキ 底部：ナデ	口縁→胴上半：へらケズリ→ナデ 胴下半：雄なへらミガキ	
58	甕	14.8	5.1	17.0	完		口縁→胴部：波状文(上→下)→頸部：横直線文 胴下半：へらケズリ 底部：へらケズリ	口縁：横へらミガキ 胴上半：ハケ 胴下半：へらケズリ	
59	甕	16.2	4.9	19.7	3/4		口縁→胴部：波状文(施文順序・不定) 胴部下半：へらケズリ→ナデ 底部：へらケズリ	口縁：強横ナデ 胴部：へらケズリ	
60	台付甕	14.4	7.4	18.9	3/4	○	口唇：つまみ上げ状の強横ナデ 口縁：横ナデ 胴→胴部：ハケ	口縁→胴上半：ハケ 胴下半：ハケ→エビナデ 胴部：ハケ	東海系
61	坏	14.0	6.4	5.0	1/4		口縁：内湾 横へらミガキ・赤彩 底部：へらケズリ	横へらミガキ・赤彩	
62	台付甕	—	8.0	—	1-3		縦へらミガキ	ナデ	
63	高坏	19.4	—	—	1/4		へらミガキ	へらミガキ	
X25号住居址									
64	高坏	—	17.4	—	1/3		縦へらミガキ・赤彩	ナデ	
65	坏	12.6	4.2	7.1	1/2		坏部：へらミガキ・赤彩 底部：へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	
X28号住居址									
66	坏	13.0	3.9	5.5	1/4		坏部：へらミガキ・赤彩 底部：へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	
67	鉢	8.6	—	—	1/2		へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	
68	甕	25.2	—	—	1/6		頸部：横直線文→口縁 胴部：波状文(施文順序等詳細不明)	横へらミガキ	
X29号住居址									
69	壺	—	5.4	—	1/4		胴部：へらミガキ・赤彩 底部：へらケズリ	ハケ→ナデ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(4)

番号	器種	法量 (cm)			遺存 土	成 形・調 整・文 様		備 考
		口径	底径	器高		外 面		
		内 面		内 面				
70	高環	—	—	—	2/3	ヘラミガキ・赤彩 円板光澤	ヘラミガキ・赤彩	
71	高環	15.8	—	—	完	口径：山形突起 4 環部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
X52号住居址								
72	甕	11.7	4.5	12.1	3/4	口径：横ナデ 受け口状に内湾 頸部：簡直線文→口縁：波状文1 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ハケ→ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
73	甕	14.0	4.8	16.2	2/3	頸部：右回り等間隔止の波状文→口縁：波状文(施文順序不定) 胴部：波状文 胴下半：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	
X41号住居址								
74	甕	18.2	7.2	28.6	2/3	頸部：右回り等間隔止の波状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(施文単位毎に施文順序変化) 胴下半：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	床・覆土
75	甕	17.2	7.6	21.0	1/3	口径：内湾 口縁→頸部：波状文(上→下) 右回りの区画単位施文 胴下半：ヘラミガキ 底部：ナデ	横ヘラミガキ	床
76	甕	15.7	—	—	1/3	頸部：右回り2連止の波状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	ヘラミガキ	床
77	甕	14.5	—	—	1/6	口径：横ナデ・面取り 頸部：右回り等間隔止の波状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	床・覆土
78	甕	—	6.6	—	1/3	胴部：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	床
79	白付甕	9.8	—	—	3/4	頸部：右回り3連止の波状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半→脚部：ヘラミガキ 脚部接合は円板光澤による	ヘラミガキ	床
80	甕	8.1	—	—	1/2	頸部：簡直線文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	ヘラミガキ	床・覆土
81	環	9.9	4.2	6.5	1/3	環部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	床・覆土
82	有孔鉢	17.0	5.5	10.9	2/3	ヘラミガキ 底部：焼成前穿孔 灰白色の付着物有	ヘラミガキ	覆土
X45号住居址								
83	壺	—	—	—	1/3	口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：簡直線文2→右回り等間隔止の波状文→ヘラミガキ・赤彩による丁字文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラ平滑化→ナデ	
84	甕	19.6	—	—	1/6	頸部：右回り2連止の波状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
85	甕	15.9	—	—	完	頸部：簡直線文?→口縁：簡波状文(下→上)	ヘラケズリ→横ヘラミガキ	
86	甕	15.9	—	—	1/3	口径：つまみ上子状の横ナデ・面取り→波状文 頸部：右回り2連止の波状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
87	甕	—	6.4	—	完	胴部：ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
88	白付甕	—	10.3	—	3/4	剥落 詳細不明 脚部の接合は円板光澤による	胴部：ヘラミガキ 脚部：ハケ→ナデ	
89	甕	—	6.0	—	完	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
X54号住居址								
90	甕	12.5	—	—	完	頸部：簡直線文→口縁波状文 胴部：波状文	ハケ→横ヘラミガキ	
91	環	14.7	—	—	1/2	口径：山形突起 環部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
92	壺	—	20.4	—	2/3	口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：2本一対の横丁字文4→右回り等間隔止の波状文 胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：焼成後穿孔	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラナデ	
X48号住居址								
93	甕	18.3	6.5	23.4	2/3	頸部：右回り2連止の波状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラナデ	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(5)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
94	甕	12.6	—	—	完		頸部：右回り4連止め籠状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：横ヘラミガキ	ヘラミガキ	
95	赤彩深鉢	—	5.8	—	2/3		胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
96	無須虫鉢	7.8	4.4	9.2	2/3		口縁：2ヶ一對の円孔 横ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ	
97	鉢	12.1	4.4	9.0	1/3		口縁→胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	
X51号住居址									
98	壺	23.2	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：直線文4 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ナデ	床
99	甕	18.0	—	—	2/3		口唇：面取り→波状文 頸部：右回り3連止め籠状文→口縁部：波状文(下→上)	ヘラミガキ	床
100	甕	11.4	—	—	1/2		頸部：右回り4連止め籠状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	床
101	台付鉢	—	7.4	—	2/3		胴部：波状文 ハケ→ヘラミガキ 脚部：ハケ→ヘラミガキ 脚部の接合は円板充須による	胴部：ヘラミガキ 脚部：横ナデ	床
102	台付鉢	—	9.6	—	3/4		ハケ→ヘラミガキ 脚部の接合は円板充須による	胴部：ヘラミガキ 脚部：ハケ→ナデ	床
103	甕	16.2	—	—	1/4		頸部：右回り等間隔止の籠状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	床
104	台付鉢	13.1	—	—	2/3		口縁→胴上半：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	床
Y11号住居址									
105	赤彩深鉢	16.2	4.4	17.4	3/4		口縁：2ヶ一對の焼成前穿孔 ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラケズリ→ナデ	床
106	高坏	15.9	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床
107	赤彩深鉢	10.5	—	—	1/2		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：右回り3連止め籠状文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ	床
108	台付鉢	11.4	—	—	1/2		口唇：山形突起 口縁→脚部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：2列の円形穿孔(焼成前穿孔)	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：不明	床・覆土
109	坏	12.0	4.2	5.8	1/3		坏部：ハケ 底部：ハケ	ハケ(原体は外面と異なる)	床・覆土
110	赤彩深鉢	18.1	—	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ヘラミガキ	床・覆土
111	有孔鉢	20.5	5.4	13.6	2/3		口唇：面取り 坏部：ヘラミガキ 底部：焼成前穿孔1	ヘラナデ	床
112	甕	13.5	—	—	1/3	○	口唇：つまみ上げ状の強横ナデ、面取り 口縁：横ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：ハケ	床・覆土・北陸系
113	甕	—	3.4	—	2/3	○	胴部：縦ハケ 底部周辺：横ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ハケ→ナデ	床・北陸系
114	蓋	10.2	—	3.5	完		口唇：強横ナデ 体部：ハケ つまみ部：ナデ	ハケ→ナデ	床・北陸系
115	蓋	16.6	—	7.1	完		口唇：横ナデ、面取り 体部：ハケ つまみ部：ナデ、部分的にヘラ刮みと沈線	ハケ	床・北陸系
116	坏	11.0	4.9	4.8	2/3		ハケ→軽いヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	床
117	坏	12.3	5.3	6.3	3/4	○	ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ 口唇：面取り	ヘラ平滑化→ヘラミガキ・赤彩	床・北陸系
118	坏	14.9	5.3	7.2	完		口縁：強横ナデ 体部：ハケ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラケズリ→ナデ	床・北陸系
Y16号住居址									
119	甕	12.2	—	—	2/3		頸部：右回り等間隔止の籠状文→口縁部：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
Y24号住居址									
120	甕	11.0	4.6	12.4	2/3		口縁→胴上半：波状文(上→下)→頸部：右回り2連止の籠状文 胴下半：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(6)

番号	器種	法量 (cm)			遺存 寸法	胎 土	成 形・調 整・文 様		備 考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
121	高坏	11.4	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
122	高坏	—	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
Y 29号住居址									
123	壺	13.2	—	—	1/2		口縁：粘土帯貼り付けによる複合口縁 ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	
124	坏	14.0	4.4	6.4	5/6		口縁：片口1 坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ナデ	ヘラミガキ・赤彩	
125	器台	—	10.6	—	3/4		ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	
Y 31号住居址									
126	壺	15.0	—	—	1/3	○	口縁：強横ナデ 頸部～胴部：ハケ→ナデ	口縁：強横ナデ 胴部：ハケ	北陸系
127	鉢	—	6.0	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
128	蓋	—	—	—	2/3		天井部：焼成前穿孔1 ヘラケズリ	ヘラミガキ	
129	高坏	—	10.0	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	
Y 31号・32号住居址									
130	壺	20.1	—	—	1/4		頸部：右回り4連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文	横ヘラミガキ	
131	有孔鉢	—	6.2	—	1/2		縦ヘラミガキ 焼成前穿孔1	ナデ	
132	壺	—	7.2	—	1/2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
Y 36号住居址									
133	壺	24.1	(7.0)	41.0	完		口縁：受け口、波状文→縦ヘラミガキ 頸部：2本1対のT字文3→右回り等間隔止の縷状文 胴上半：横ヘラミガキ 胴下半：縦ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ 胴部：ヘラナデ→ナデ	
Y 30号住居址									
134	壺	—	9.2	—	2/3		頸部：右回り3連止の縷状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下) 胴部：縦ヘラミガキ・赤彩	口縁：磨耗不明 胴上部：ハケ 胴下部：ナデ	樽系
135	甕	25.1	—	—	2/3		口唇：面取り→ヘラミガキ 頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文	ハケ→ヘラミガキ	
136	甕	20.6	7.4	26.2	完		口唇：つまみ上げ状の横ナデ 頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文	ヘラミガキ	
137	台付甕	10.8	—	—	完		頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
138	甕	22.6	—	—	1/4		頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)	ハケ→横ヘラミガキ	
139	甕	20.5	—	—	1/4		口唇：つまみ上げ状の横ナデ、面取り→縷状文 頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は左回りの区画単位施文	口縁：横ヘラミガキ 胴部：指頭押捺→軽いヘラミガキ	
140	甕	29.0	—	—	3/4		頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文	ヘラミガキ	
141	壺	20.1	—	—	1/5		頸部：右回り等間隔止の縷状文→口縁、胴部：波状文 波状文の施文順序に規則性なし	横ヘラミガキ	
142	高坏	—	15.9	—	2/3		縦ヘラミガキ・赤彩、三角形透孔4、円板光顎	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	
143	高坏	—	15.8	—	完		縦ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔4	ハケ→ナデ	
Y 32号住居址									
144	壺	30.2	—	—	1/4		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：磨T字文	横ヘラミガキ・赤彩	
145	赤彩深鉢	—	5.8	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	磨耗・詳細不明	
146	壺	—	—	—	1/4		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：磨T字文	ヘラミガキ・赤彩	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(7)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
147	壺	—	—	—	1/3		口縁：縦へラミガキ 頸部：2本一対のT字文3	ハケ→ナデ	
148	甕	—	6.2	—	2/3		波状文、縦へラミガキ 底部：へラミガキ	横へラミガキ	
149	高坏	24.5	—	—	1/4		口唇：山形突起 へラミガキ・赤彩	へラミガキ・赤彩	
150	高坏	—	13.0	—	2/3		縦へラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	
151	高坏	25.1	17.6	25.9	2/3		坏部：へラミガキ・赤彩 脚部：へラミガキ・赤彩 三角形透孔4	坏部：へラミガキ・赤彩 脚部：ハケ・ナデ	
Y 34号住居址									
152	壺	21.0	7.0	33.4	3/4		口縁：縦へラミガキ 頸部：橋直線文3(上→下) 胴上半：横へラミガキ 胴下半：縦へラミガキ 底部：へラケズリ	口縁：横へラミガキ 胴部：ハケ・ヘラナデ	
153	甕	22.8	7.0	33.6	3/4		口唇：面取り 頸部：右回り等間隔止め籐状文→口縁：波状文(下→上?) 胴部：波状文(上→下?) 胴下半：へラミガキ 底部：へラケズリ	へラミガキ?	
154	有孔鉢	14.4	4.4	7.7	完		体部：横へラミガキ 底部：焼成前穿孔1	へラ平滑化→へラミガキ	
155	器台	9.4	12.6	9.3	3/4		磨耗 詳細不明 円形透孔	磨耗 詳細不明	
Y 51号住居址									
156	壺	—	—	—	1/2		口縁：縦へラミガキ・赤彩 頸部：2本一対のT字文→へラ刷南文	口縁：へラミガキ・赤彩 胴部：ナデ	
157	甕	21.4	—	—	3/4		頸部：右回り2～3連止の籐状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文 ハケ→へラミガキ	横へラミガキ	
158	甕	10.4	4.0	11.0	2/3		頸部：右回り等間隔止の籐状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) へラミガキ	へラミガキ	
159	坏	12.4	4.9	8.0	1/3		へラミガキ・赤彩	へラミガキ・赤彩	
160	有孔鉢	—	5.0	—	完		へラミガキ 底部：焼成前穿孔1	へラミガキ	
161	高坏	26.3	—	—	1/8		口唇：山形突起 坏部：へラミガキ・赤彩	へラミガキ・赤彩	
Y 52号住居址									
162	蓋	11.6	—	2.1	2/3		口縁：2孔一対の穿孔 へラミガキ・赤彩	へラミガキ	
163	坏	13.1	5.7	7.7	1/4		へラミガキ・赤彩	へラミガキ・赤彩	
Y 74号住居址									
164	甕	—	6.4	—	2/3		波状文 縦へラミガキ 底部：へラミガキ	へラミガキ	
165	甕	—	3.6	—	1/3		頸部：右回り3連止の籐状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下) 胴下半：へラミガキ 底部：へラミガキ	横ナデ	
Y 75号住居址									
166	壺	22.1	—	—	1/3		受口口縁：右回り等間隔止の籐状文 口縁→胴上半：へラミガキ・赤彩	口縁：へラミガキ・赤彩 胴部：指頭押換→ナデ	
Y 76号住居址									
167	甕	—	—	—	1/2		頸部：右回り2連止の籐状文→胴部：波状文(上→下)	斜ハケ→へラミガキ	
168	壺	—	—	—	1/3		へラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	北陸系?
169	甕	—	5.9	—	完		へラミガキ 底部：へラケズリ	磨耗 不明	
Y 77号住居址									
170	壺	—	—	—	完		頸部：2本一対のT字文5 直線文(上→下)	ナデ	
171	甕	—	6.2	—	1/3		胴部：縦へラミガキ 底部周辺：へラケズリ 底部：へラケズリ	横へラミガキ	
172	甕	17.8	—	—	1/3		頸部：右回り3連止の籐状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：へラミガキ	へラミガキ	
173	甕	—	7.2	—	1/3		胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦へラミガキ 底部周辺：へラケズリ 底部：へラケズリ→へラミガキ	横へラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(8)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
Y71号住居址									
174	甕	21.0	7.2	24.7	4/5		口唇：面取り→流状文 口縁→頸部：流状文(下→上) 頸部→胴部：流状文(上→下) 胴下半：縦へらミガキ 流状文は右回りの区画単位施文	横へらミガキ	
175	甕	36.4	—	—	1/6		口縁→胴上半：流状文 流状文は右回りの区画単位に施文されるが、区画単位毎に施文順序を違える	ハケ→横へらミガキ	
176	甕	24.3	—	—	1/3		口唇：面取り→流状文 頸部：簡直線文→口縁：流状文(下→上) 胴部：流状文(上→下) 流状文は右回りの区画単位施文 胴下半：縦へらミガキ	横へらミガキ	
177	甕	21.7	6.6	29.0	3/4		口唇：面取り→流状文 頸部：簡直線文→口縁：流状文(下→上) 胴部：流状文(上→下) 流状文は右回りの区画単位施文 胴下半：縦へらミガキ	横へらミガキ	
178	甕	13.6	—	—	2/3		頸部：簡直線文→口縁：流状文(下→上) 胴部：流状文(上→下)	横へらミガキ	
179	甕	—	5.2	—	1/4	○	斜ハケ 底部の成形は輪台技法による	ハケ	東海系
180	赤彩深鉢	14.4	—	—	2/3		口縁：2孔一對の円孔 へらミガキ・赤彩 頸部：右回り等間隔止の縞状文 胴部：横へらミガキ・赤彩	口縁：へらミガキ・赤彩、胴部：へらミガキ	
181	台付甕	—	7.6	—	完		ハケ→ナデ	胴部：横へらミガキ 脚部：ハケ	
182	台付甕	—	8.9	—	2/3		ハケ→軽いへらミガキ	ナデ	
183	高環	—	17.6	—	1/10		へらミガキ・赤彩 2孔一對の円孔	へらミガキ	
Y78号住居址									
184	甕	12.6	—	—	1/3		頸部：右回り3連止め縞状文→口縁：流状文(下→上) 胴部：流状文(上→下) 胴下半：横へらミガキ	口縁：横へらミガキ 胴部：ナデ	
Y81号住居址									
185	甕	—	12.4	—	2/3		胴上半：横へらミガキ・赤彩 胴下半：ハケ→縦へらミガキ	胴上半：へらナデ 胴下半：ハケ	
186	甕	—	7.5	—	1/2		胴上半：流状文(上→下)→頸部：右回り2連止め縞状文 胴下半：へらミガキ 底部：へらミガキ	横へらミガキ	
187	甕	—	5.0	—	1/3		頸部：右回り等間隔止の縞状文→口縁：流状文 胴部：流状文(上→下) 胴下半：ハケ→縦へらミガキ 底部：へらナズリ	へらミガキ	
188	高環	13.9	10.2	10.1	完		へらミガキ・赤彩	環部：へらミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
189	高環	—	12.3	—	完		へらミガキ・円形透孔	ハケ→ナデ	
Y82号住居址									
190	甕	17.2	—	—	1/3		口唇：つまみ上げ状の強横ナデ・面取り 頸部：簡直線文→口縁：流状文(下→上) 胴部：流状文(上→下) 流状文は右回りの区画単位施文	ハケ→へらミガキ	
191	甕	10.4	5.2	11.8	1/2		口縁→胴上半：流状文(上→下) 胴下半：へらミガキ 底部：へらミガキ	磨耗 不明	
192	高環	—	—	—	2/3		へらミガキ・赤彩 三角形透孔	環部：へらミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
193	甕	—	12.8	—	1/3		胴上半：へらミガキ・赤彩 胴下半：縦へらミガキ	横ハケ	
Y83号住居址									
194	甕	14.8	—	17.0	1/2		口唇：つまみ上げ状の強横ナデ・面取り 頸部→胴部：ハケ 底部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：へらナズリ→ナデ	北陸系
195	器台	10.1	8.7	8.4	2/3		ハケ→ミガキ 円形透孔3	環部：磨耗・不明 脚部：ハケ→ナデ	
196	甕	11.4	—	—	3/4		口縁：強横ナデ 胴部：ハケ	口縁：強横ナデ 胴部：へらナデ	
A50号土壌									
197	甕	14.1	—	—	2/3		頸部：右回り等間隔止の縞状文→口縁、胴部：流状文(施文順序不定)	へらミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(9)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
198	甕	14.8	7.3	19.4	1/2		口縁：ハケ→ヘラミガキ 胴部：ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
199	壺	15.8	—	—	1/4		口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(下→上)	ヘラミガキ	
200	高坏	—	15.8	—	完		縦ヘラミガキ・赤彩	ヘラクスリ→ナデ	
201	高坏	—	—	—	3/4		縦ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
A 89号土壙									
202	台付甕	—	8.5	—	3/4		縦ヘラミガキ	横ナデ	
203	壺	—	6.7	—	1/3		胴上半：ヘラミガキ・赤彩 胴下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	胴上半：ナデ 胴下半：ハケ→ナデ	
W 4号土壙									
204	壺	19.0	9.0	31.4	2/3		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：帯丁字文→波状文 胴上半：ヘラミガキ・赤彩 胴下半：ヘラミガキ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：磨耗・不明	
205	壺	—	7.2	—	2/3		口縁：ハケ→ヘラミガキ・赤彩 頸部：3本一対の丁字文+円彩浮文 胴上半：ヘラミガキ・赤彩 胴下半：ハケ→ヘラミガキ 底部：ヘラクスリ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ	
206	甕	18.5	—	—	1/6		頸部：帯直線文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	ヘラミガキ	
207	高坏	22.0	—	—	1/4		横ヘラミガキ・赤彩	横ヘラミガキ・赤彩	
B 6号溝址									
208	甕	20.3	7.2	28.6	3/4		口縁→胴上半：波状文(下→上) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：斜ヘラミガキ 底部：ヘラクスリ	ヘラミガキ	
209	甕	14.3	6.5	20.1	完		口唇：横ナデ・面取り 頸部：右回り2連止の帯状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	
210	蓋	18.8	—	5.9	2/3		つまみ部：ナデ・焼成前穿孔1 体部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
C 11号溝址									
211	坏	17.4	5.2	8.0	完		坏部：ハケ→ヘラミガキ 底部周辺：ヘラクスリ 底部：ヘラクスリ	ヘラミガキ	床
212	坏	16.0	4.0	7.7	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床
213	坏	14.4	5.0	5.6	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床
214	台付壺	25.0	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：2本一対の丁字文4・直線文(上→下) 胴→脚部：ヘラミガキ・赤彩 脚との接合は円板光潤	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：割高・不明	床
215	甕	21.3	7.9	29.3	完		口唇：面取り・ヘラミガキ 頸部：右回り4連止の帯状文→口縁・胴部：波状文(施文順序不定) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：ヘラミガキ	口縁：ハケ→ヘラミガキ 胴部：ヘラミガキ	床
C 遺物集中区									
216	壺	22.3	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
217	壺	—	5.1	—	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	
218	壺	—	—	—	1/3		頸部：右回り等間隔止の帯状文→直線文→2本一対の丁字文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	
219	甕	15.8	6.4	18.0	1/2		頸部：右回り等間隔止の帯状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラクスリ	ヘラミガキ	
A 遺構外出土遺物									
220	壺	11.3	6.2	16.1	完		口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ 底部：ナデ	口縁：ハケ→ナデ 胴部：ハケ→ナデ	
221	赤彩深鉢	16.4	5.0	15.5	3/4		口縁：2孔一対の穿孔 ヘラミガキ・赤彩 頸部：右回り等間隔止の帯状文 胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラクスリ→ヘラミガキ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表⑩

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
222	鉢	12.0	4.4	9.6	3/4		口縁：2孔一対の穿孔 口縁～胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキorナデ	胴部
223	甕	11.5	5.4	14.9	3/4		口縁～胴上半：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画 単位施文 胴下半：ハケ→縦ヘラミガキ 底部：ヘラミ ガキ	ハケ→ヘラミガキ	
224	甕	14.2	—	—	1/10		口唇：面取り 口縁：ヘラ掘削面文→ハケ削突	ナデ	東海系
225	甕	16.6	—	—	1/10		口縁：粘土帯貼付けによる複合口縁→ヘラ削み ヘラミ ガキ	ヘラミガキ	樽系
226	甕	12.7	4.8	12.4	1/3		頸部：右回り2連止の籠状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ 底部：ヘ ラケズリ→ナデ	ヘラミガキ	
227	甕	16.4	—	—	2/3		口唇：面取り 頸部：右回り等間隔止の籠状文→口縁： 波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)	ハケ→ヘラミガキ	
228	高坏	—	17.3	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩 円形透孔1	ナデ	
229	高坏	—	18.6	—	完		縦ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔3	ヘラケズリ→ナデ	
230	高坏	—	15.7	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	
B遺構外出土遺物									
231	鉢	24.2	5.4	11.9	2/3		体部：横ヘラミガキ 底部周辺：ヘラケズリ→ヘラミガ キ	ヘラミガキ	
C遺構外出土遺物									
232	甕	—	—	—	1/6		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
233	甕	14.6	6.6	21.6	5/6		口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ→ナデ 底部：ヘラケ ズリ→ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケ ズリ	
G遺構外出土遺物									
234	甕	16.1	—	—	1/8		口唇：つまみ上げ状の強横ナデ 縦凹線文2	軽いヘラミガキ	北陸系
235	甕	—	—	—	1/10		縦凹線 ヘラミガキ・赤彩	ナデ	北陸系
H遺構外出土遺物									
236	甕	12.8	—	—	1/10	○	ナデ	ナデ	東海系
W遺構外出土遺物									
237	甕	20.3	—	—	2/3		口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ→ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケ ズリ	
238	甕	24.1	—	—	2/3		口唇：山形突起4 口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部： 帯T字文+波状文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	
X遺構外出土遺物									
239	甕	29.4	—	—	3/4		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：2本一対のT字文3 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	
240	甕	—	—	—	1/6		口縁・胴部：ヘラミガキ・赤彩 頸部：2本一対の帯T 字文	ハケ→ナデ	
241	甕	—	4.6	—	1/3		胴上半：ハケ→ナデ 胴下半：ハケ	ハケ→ナデ	
242	甕	15.9	—	—	1/4		頸部：右回り等間隔止の籠状文→口縁：波状文(上→ 下) 胴部：波状文	横ヘラミガキ	
243	甕	18.8	7.2	27.1	完		口縁：ハケ→強横ナデ 胴上半：ハケ 胴下半→底部： ヘラケズリ	口縁：ハケ→横ナデ 胴上 半：ヘラケズリ 胴下半：ナ デ	
244	台付甕	—	10.4	—	完	○	胴部：ハケ、脚部：ハケ ハケ原体は内部とは異なる	胴部：ハケ 脚部：ハケ→ナ デ	東海系
245	甕	13.9	—	—	1/10		縦凹線文	横ヘラミガキ	北陸系
246	台付甕	—	9.0	—	1/2		ヘラミガキ	胴部：ヘラミガキ 脚部：ナ デ	
247	高坏	—	7.4	—	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
248	甕	—	4.8	—	完		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
249	甕	14.6	6.1	23.8	2/3		頸部：右回り3連止の縷状文→口縁：波状文(施文単位毎に施文順序異なる) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
250	甕	26.4	—	—	1/2		頸部：橋直線文→口縁：波状文(下→上) 波状文は右回りの区画単位施文	横ヘラミガキ	
251	甕	13.4	—	—	完		頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
252	鉢	9.8	—	—	3/4	○	口縁：凹線文 胴部：ハケ刷突 胴下半：ハケ→ナデ	磨耗 詳細不明	北陸系
253	蓋	—	—	—	1/3		ヘラミガキ 天井部と地成前穿孔1	ハケ→ナデ	
254	蓋	—	—	—	1/2		ヘラミガキ 天井部と地成前穿孔1	ヘラミガキ	
255	高坏	22.2	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
256	高坏	—	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔	坏部：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ナデ	
257	器台	9.0	10.7	7.7	3/4		磨耗 詳細不明	磨耗 詳細不明	
Y遺構外出土遺物									
259	壺	14.8	—	—	2/3		口唇：面取り 口縁→胴部：ヘラミガキ?	口縁：ヘラミガキ? 胴部：ハケ→ナデ	
260	壺	—	9.5	—	2/3		ハケ→ヘラミガキ?	ハケ→ナデ	
261	壺	25.1	—	—	1/4		口縁：波状文1 ヘラミガキ・赤彩 頸部：橋直線文	ヘラミガキ・赤彩	
262	台付甕	9.0	—	—	完		口縁→胴部：波状文(上→下) 胴下半：ハケ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
263	赤彩環鉢	14.0	4.8	13.5	完		ヘラミガキ・赤彩 口縁と2孔一對の円孔	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ	
264	台付甕	15.3	—	—	3/4		口縁→胴部：波状文(上→下) 胴下半→胴部：縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
265	甕	23.6	—	—	完		口縁→胴部：波状文 波状文は右回りの区画単位施文だが区画単位毎に上下の施文順序は異なる→頸部：右回り等間隔止の縷状文	横ヘラミガキ	
266	甕	15.9	4.7	20.5	完		口縁→胴部：波状文(上→下) 頸部：右回り等間隔止の縷状文 底部側面に焼成後穿孔1	ヘラミガキ	
267	甕	14.9	4.8	17.6	完		口唇：面取り→波状文 頸部：橋直線文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
268	甕	18.4	—	—	1/2		口唇：面取り 頸部：右回り等間隔止の縷状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：横ヘラミガキ	ハケ→横ヘラミガキ	
269	甕	14.7	4.8	20.8	3/4		頸部：右回り3連止の縷状文→口縁：波状文(下→上?) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
270	甕	7.2	—	—	2/3		頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
271	甕	15.0	—	—	1/3		頸部：右回り2連止の縷状文→口縁：波状文 胴部：波状文	ヘラミガキ	
272	甕	19.2	—	—	1/4		口唇：横ナデ・面取り 口縁：横ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	北陸系
273	高坏	27.0	—	—	3/4		口唇：山形突起4 ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
274	有孔鉢	—	5.2	—	1/3		焼成前穿孔1 縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	
275	坏	—	4.8	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
276	坏	13.6	5.7	6.8	3/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
277	高坏	—	7.6	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩 円形透孔	ヘラミガキ・赤彩	
Z遺構外出土遺物									
278	甕	15.2	—	—	2/3		頸部：右回り等間隔止の縷状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	

2 古墳時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布 (図47・48)

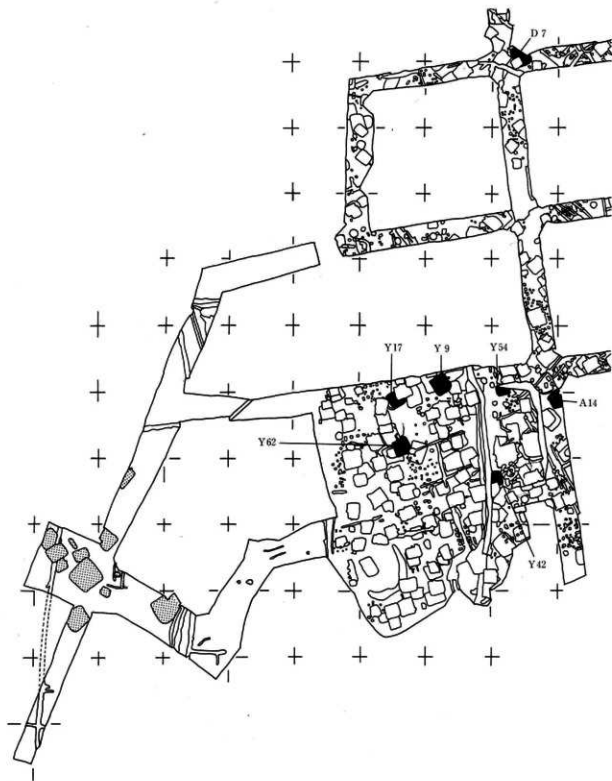


図47 古墳時代遺構分布図 (アミ部前期、黒塗後期)

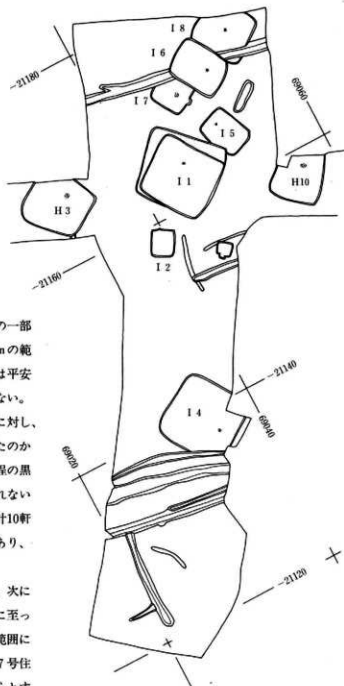
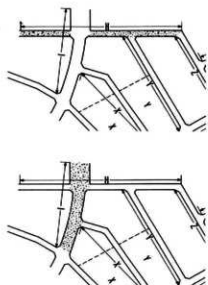


図48 H区・I区遺構分布図

古墳時代前期の遺構は綿内駅の東H区とI区の一部のみに展開する。その範囲は東西・南北共に60mの範囲におさまるものと思料される。他時代の遺構は平安時代に相当する溝址を除き生活遺構を見いだせない。他時代の遺構が現在の微高地を選定しているのに対し、何の理由でこの地域を限定して居住域を形成したのか不明である。ちなみに遺構確認面上部には10cm程の黒褐色粘質土が堆積しており、微高地では認められないことで、低地か窪地であった可能性が高い。総計10軒の住居址を検出したが、重複関係にあるものもあり、少なくとも2期の時間差がある。

この後、高野遺跡から居住施設の痕跡が消え、次に集落が形成されるようになるのは古墳時代後期に至ってからである。その規模は前期同様、小規模な範囲に散在し、同期で重複関係にあるものはない。D7号住居址のみ離れて位置するものの、他はY区を中心とする微高地に位置する。

(2)住居址(前期)(図49~52)

住居址形態は隅丸方形と隅丸長方形に大別することができる。長方形態が弥生時代からの継承形態とすれば、方形態は新たな形態変遷といえよう。例えば長方形態のI6号住居址と方形態のI7・8号住居址、I5号住居址とI1号住居址との間に形態重複に矛盾は生じない。長方形態の住居址は前記した2軒の他H9号住居址のみであり、主軸方向が180°異なるものの形態方向は同じである。方形態の住居址は7軒確認しており、規模に大小の差がある。一辺8m前後を測るI1(イ・ロ)・4号住居址、6m前後を中心とするH3・10号、I8号住居址があり、最小のI7号住居址は主軸3.9mにすぎない。また、I4号住居址を除き主軸が他壁より短く、方向がN26°~36°W内におさまるものも共通している。I1号住居址は(イ)から(ロ)への拡張と考えられる。

主柱穴は4本柱(長)方形配列を基本とするが、小形のI5・7号住居址には認められない。

がは全て地床がで、柱穴間に設けられるのが通常とするが、I7・8号住居址では中央付近にある。H3号住居址は枕石がである。

床面は平坦で堅緻である。H3号、I4・8号住居址では細長い河原石の散在が認められ、菰編み用のいわゆるコモテ石であろう。

I2号住居址としたものは一辺3m以内の小形のもので、が・柱穴等は確認されず住居というよりも作業小屋または納屋の用途を推定した方が良さそうである。

(3)住居址(後期)(図53・54)

8軒の住居遺構を確認したが、全形を推定できるものは5軒にすぎない。D7号住居址が長方形態になる他は方形態である。主軸規模は5m前後を測るが、方向は一定でない。

カマドは主軸壁の中央に構築されるが、Y37号住居址は右寄りにある。形態の痕跡は明確ではないが、Y37・62号住居址に見られるように粘土製圓筒形のものを想定する。煙道は外方に大きく作り出すことを特色とする。主柱穴は4本柱方形配列を基本とする。

床面は平坦で堅緻なものが多い。Y9号住居址の東壁下に罫溝状の掘込みがある。

古墳時代前期住居址観察表

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
H区							
3号住居址	49	隅丸方形(不整)	6.2×6.7	N26°W	4本柱・柱間枕石が・床堅緻	コモテ石	57
9号住居址	49			N37°E	4本柱?・床堅緻		57
10号住居址	49	隅丸長方形	×5.4	N52°W	4本柱?・柱間が・床堅緻		57
I区							
1号住居址(イ)	50	隅丸方形	6.9×7.9	S56°W	4本柱・柱間下が・床堅緻	紡錘車?	55
1号住居址(ロ)	50	隅丸方形	8.1×8.5	S46°W	4本柱・(イ)の拡張?		
2号住居址(土壇)	50	長方形	3.0×2.4	N23°E			
4号住居址	52	隅丸方形	8.2×7.8	N32°W	4本柱?・柱間が	コモテ石・管玉	55
5号住居址	50	隅丸方形(不整)	4.7×3.6	S67°W	南壁側焼土		56
6号住居址	51	隅丸長方形	5.8×5.0	N53°E	4本柱・柱間下が・床堅緻		56
7号住居址	51	隅丸方形	3.9×	N27°W	中央東壁側焼土		56
8号住居址	51	隅丸方形	5.5×5.7	N28°W	4本柱?・中央が・床堅緻	コモテ石	56

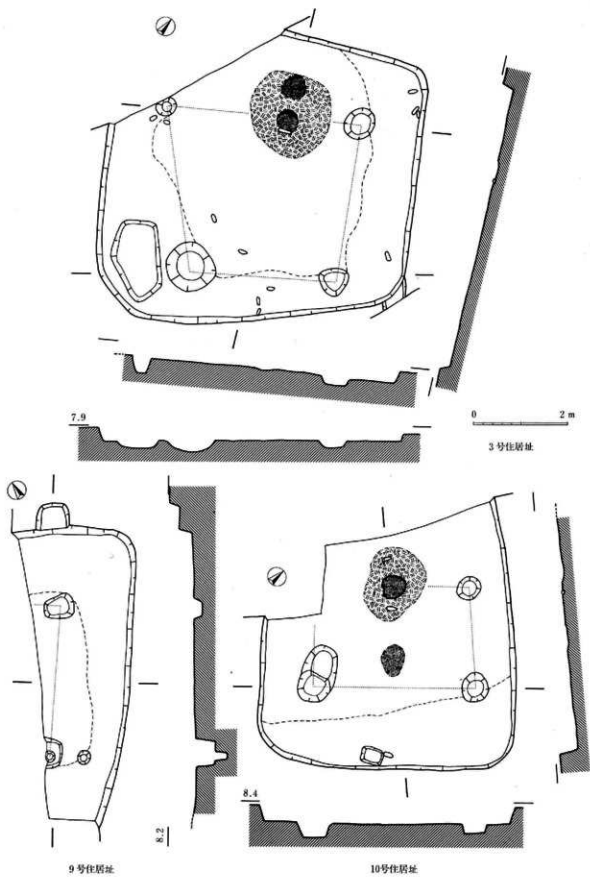
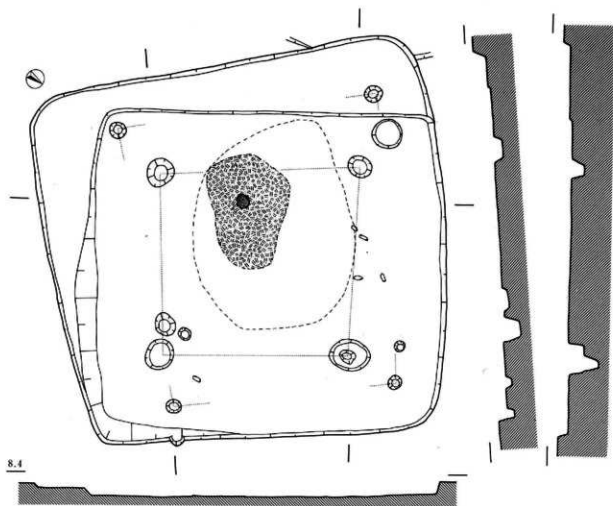
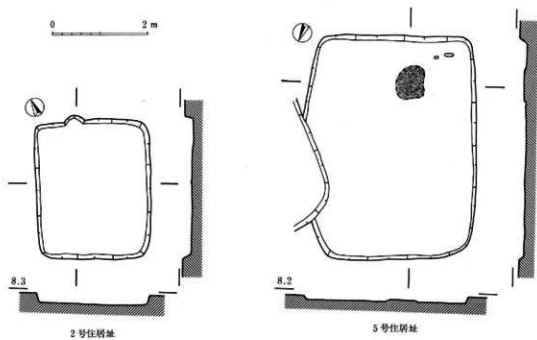


图49 Ⅱ区古墳時代前期住居址实测图



1号住居址



2号住居址

5号住居址

图50 I区古墳時代前期住居址実測図(1)

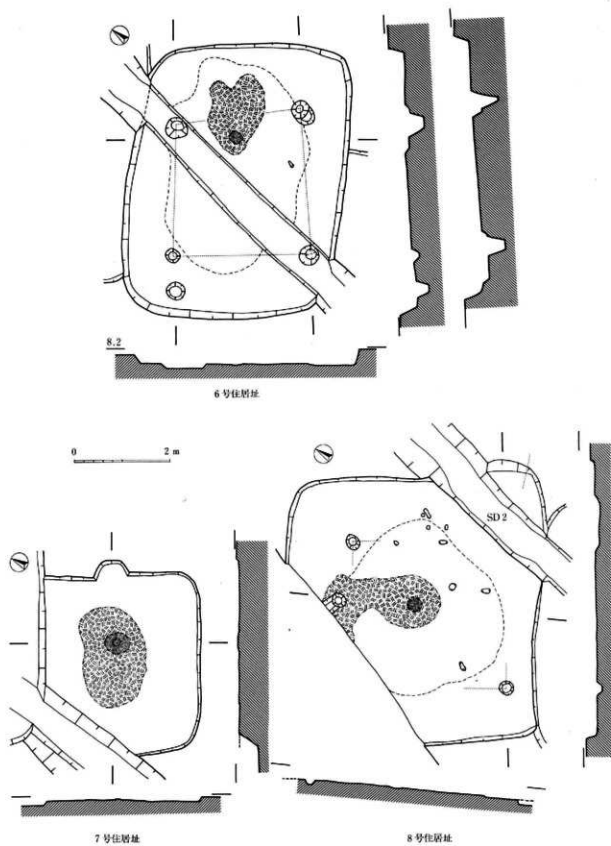


图51 I区古墳時代前期住居址実測図(2)

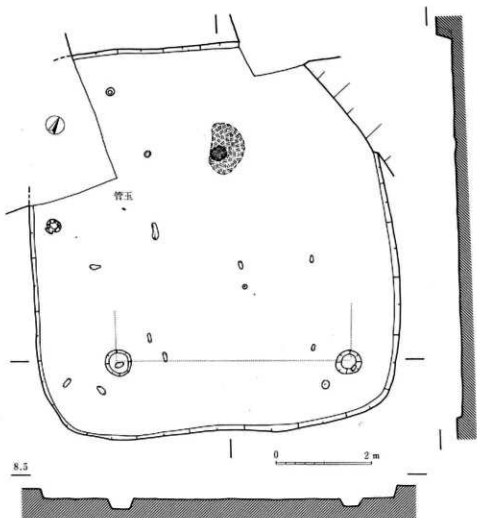


図52 I区古墳時代前期4号住居実測図(3)

古墳時代後期住居観察表

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
A区							
14号住居址	53	隅丸方形?(不整)	×(5.1)	N59°E	4本柱・土坑		57
D区							
7号住居址	53	隅丸長方形	(6.8)×(4.8)	N24°W	床堅織		57
Y区							
9号住居址	53	隅丸方形	5.1×5.5	N56°E	4本柱・カマド東壁中央・床堅織		57
17号住居址	54	隅丸方形	4.8×4.3	N35°W	4本柱?・カマド北壁中央・床堅織		57
37号住居址	54	隅丸方形	5.0×4.9	N15°W	4本柱?・カマド北壁中央・床堅織		57
42号住居址	54	隅丸方形?	4.2×	N17°W			
54号住居址	53	隅丸方形?	×4.3	南北			
62号住居址	54	隅丸方形	5.0×5.4	N30°W	4本柱・カマド北壁中央・床堅織		

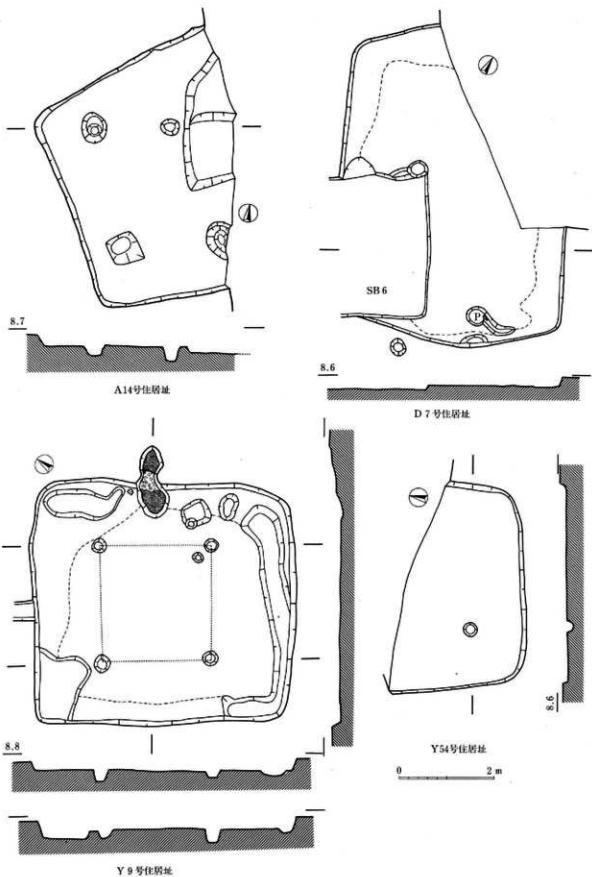


图53 古墳時代後期住居址実測図(1)

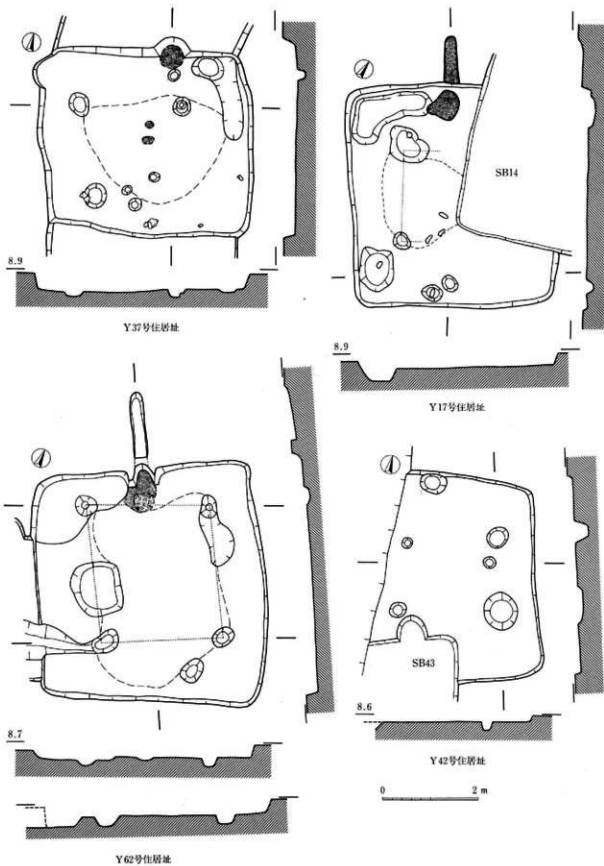


图54 古墳時代後期住居址実測図(2)

(4)遺物（前期）（図55～57）

出土土器の器種には坏・浅鉢・埴・小形丸底形土器・器台・高坏・壺・甕・高台甕がある。坏はH3・10号、I1・3・4号住居址から出土しており、H3号の平底で体部が直線的に外開する坏形のものを除き、他は丸底で底部と口縁部の接点で屈折するいわゆる兜形を呈するものである。I3号の坏は口縁部が短く外傾度も小さく、H3号のものは有段で平底になる。浅鉢はH3号、I1・4号に見られ、短頸・平底で小形甕形をなす。埴は小形丸底形土器の大形のものを用い、H3号、I4・7号から出土している。H3号のものは頸部が幅まり、口縁部が内傾しながら立上がる点が他のものと異なる。小形丸底形土器は名称のとおり形態でI4号に見られる。器台はH3・10号に各2個体、I4・6～8号から出土している。共に坏部から脚部に穿孔する。H3号のものは坏部を欠損し、脚部が有段になる。坏部が坏形のもの（I3号）と皿形のもの（H3・10号、I9号）があり、脚部は外開し、2段の円孔を有する（H3・10号）。I4号の脚部は内弯しながら外開する。I8号は小形の器台である。高坏はI4号から4個体出土するものの、器形が判明するものは坏部のみである。底部と体部の屈曲接点に鈍い稜を形成する。壺はI4・6号に見られ、共に有段口縁である。甕は大小2形態あり、H9・10号、I5・7・8号に小形のもの、I4・6・8号に大形のものがある。頸部がくの字形に屈曲し、口縁部は外反し、丸味を帯びた体部中位に最大径を有し、小径の厚い底部になる。高台甕はI4号に見られ、ハの字形の高台を付し、肩部に最大径がある。

調整はハケとヘラによるものを基調とし、ハケ整形後ヘラ調整するものが多い。特に供献用の小形丸底形土器・埴・器台・高坏にはヘラミガキが施される。

土製品に紡錘車（I1号住居址）があり、石製品には碧玉製管玉（I4号住居址、Z2号溝址）がある。Z2号溝址は平安時代に比定される。

(5)遺物（後期）（図57）

遺構の残存状況が良好のわりには出土遺物量が少ない。器種には坏・高坏・甕・甗があり、全て土師器で須恵器は認められない。坏は体部が内弯し椀形になるもの（A14号、Y9号）と皿形のもの（Y17・27号）がある。高坏はD7号、Y9・27号から出土している。坏部は皿形で、脚部は筒状をなし、裾部の開きは少ない。坏・高坏の調整は共にヘラナデ・ヘラミガキによっており、内面が黒色処理されるものもある。甕はF9号土壇からの出土で、内外ともヘラナデが施される。甗の頸部はくの字に屈曲し、体部は丸味を帯びているものの長胴化の傾向にある。Y17号のものは頸部の屈曲がなくなり、体部も下脹れ状になる。調整はハケナデ後ヘラナデ整形を基本とするが、ハケ目を残すものもある。

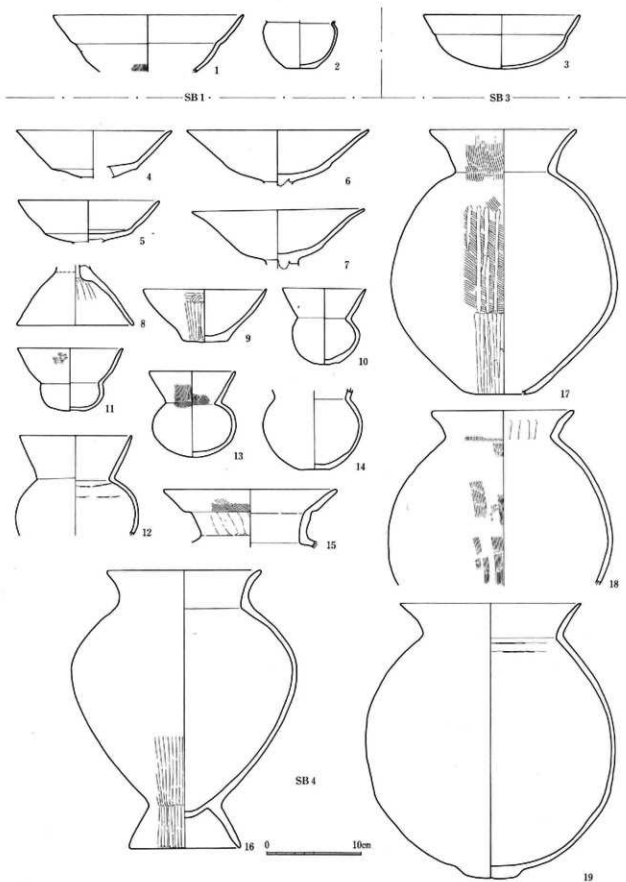


图55 I区古墳時代前期住居址出土土器実測図(1)

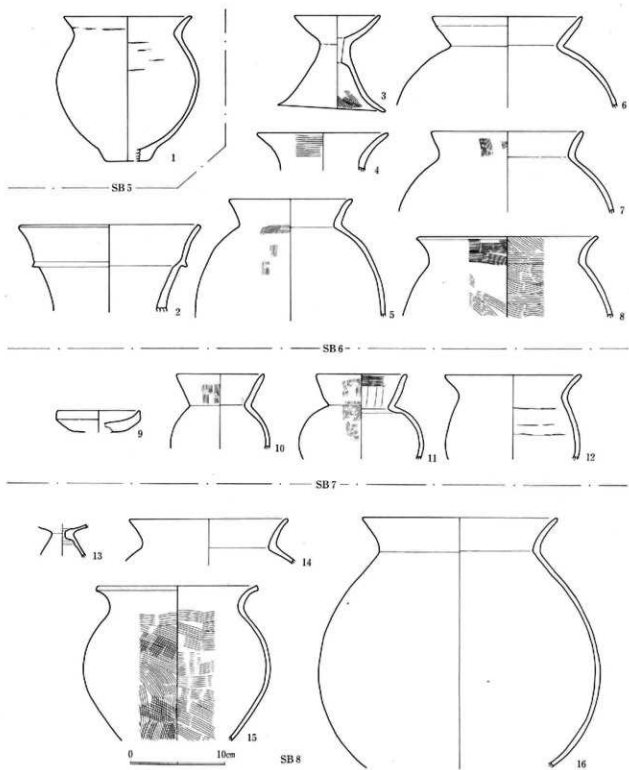


图56 I区古墳時代前期住居址出土土器実測図(2)

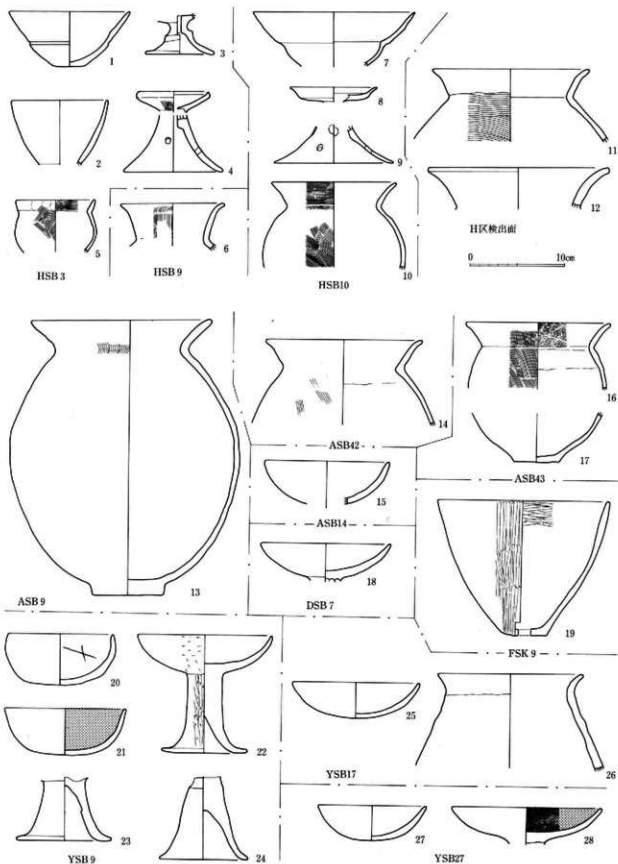


图57 (上段) H区古墳時代前期住居址出土土器実測図
(下段) 古墳時代後期住居址、土城出土土器実測図

古墳時代前期住居址出土土器観察表(1)

図番号	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存度	成形・調整等	備考
				口径	底径	器高			
I 1号住居址									
55	1	土師	坏	20.0	丸底		1/6	器面アレ・(ヘラミガキ)・外底タテハケ	床
	2	土師	埴		3.4		1/2	手捏からヘラナデ・内ナデ	床
I 3号住居址									
55	3	土師	坏	16.4	丸底	5.7		器面アレ・(ヘラナデ)	床
I 4号住居址									
55	4	土師	高坏	16.6	脚欠		2/3	全面ヘラミガキ	床
	5	土師	高坏	15.1	脚欠		1/4	全面ヘラミガキ	床
	6	土師	高坏	19.2	脚欠		1/3	全面ヘラミガキ	床
	7	土師	高坏	18.2	脚欠		ママ	全面ヘラミガキ	床
	8	土師	器台	坏欠	12.4		2/3	外ヘラミガキ・内ヘラナデ・ヨコナデ	床
	9	土師	坏	13.0	4.7	5.7		定形 内外ヘラミガキ	床
	10	土師	埴	8.8	丸底	8.1		定形 内外ヘラナデ	床
	11	土師	坏	11.4	丸底	6.7		定形 ハケのちヘラナデ・内ヘラナデ・底凹む	床
	12	土師	埴	12.0			1/2	ヨコナデ・ヘラナデ	床
	13	土師	埴	9.1	丸底	9.2		定形 ハケのちヨコナデ・内外ヘラナデ・ナデ	床
	14	土師	埴			3.2	1/3	ヨコナデ・ヘラナデ	床
	15	土師	壺(甕)	18.3			ママ	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ヘラナデ	床
	16	土師	甕	16.3	11.6	29.4		定形 ヨコナデ・外ヘラナデ・内ヘラナデ	床
	17	土師	壺(甕)	15.5	5.5	28.0		定形 外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ヨコナデ・ヘラナデ	床
	18	土師	壺(甕)	14.8			ママ	外ハケのヘラナデ・内ヘラナデのちヨコナデ・ヘラナデ	床
	19	土師	壺(甕)	19.1	5.4	29.1	1/4	ヨコナデ・外ヘラナデ(ミガキ)・ヘラナデ	床
I 5号住居址									
56	1	土師	甕	13.5	4.6	15.3	1/2	ヨコナデ・(ヘラナデ)	床
I 6号住居址									
56	2	土師	埴	18.6				ヘラナデ(ミガキ)	床
	3	土師	器台	9.0	11.4	10.3	2/3	ヘラナデ(ミガキ)・胴内ナデ・ハケのちナデ	床
	4	土師	壺(甕)	12.8			1/2	外ヨコハケのちヨコナデ・内ヨコナデ	床
	5	土師	壺(甕)	12.9			1/3	ヨコナデ・外ハケナデのちタテヘラナデ	床
	6	土師	壺(甕)	16.0			1/3	外ハケナデのちヘラナデ・内ヘラナデ	床
	7	土師	壺(甕)	16.1			1/3	外ハケナデのちヘラナデ・内ヘラナデ	床
	8	土師	壺(甕)	19.0				ハケナデ・外ハケナデのちヘラナデ	床
I 7号住居址									
56	9	土師	器台	8.8	脚欠		1/2	(ヘラミガキ)	床
	10	土師	埴	9.0			1/4	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ヘラナデ	床
	11	土師	埴	9.4			1/3	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ハケナデ・ヘラナデ	床
	12	土師	甕	14.5			1/3	ヨコナデ・ヘラナデ	床
I 8号住居址									
56	13	土師	器台				1/2	ヘラナデ(ミガキ)	床
	14	土師	壺(甕)	16.7			ママ	ヨコナデ・(ヘラミガキ)	床
	15	土師	壺(甕)	16.8			1/3	ヨコナデ・ハケナデ・ナデ	床
	16	土師	壺(甕)	20.1			1/2	ヨコナデ・外(ヘラミガキ)・内ヘラナデ	床

古墳時代前期住居址出土土器観察表(2)

図番号	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存度	成 形・調 整 等	備 考
				口径	底径	器高			
H 3号住居址									
57	1	土師	環	12.8	3.2	5.9	1/3	外ヘラミガキ・沈線文・内ヘラナデ	床
	2	土師	埴	10.3			1/3	タテヘラミガキ	床
	3	土師	器台	環欠	7.0		2/3	ヘラナデ	床
	4	土師	器台	3.7	10.4		ママ	環外ハケナデ・ヘラミガキ・内ヘラミガキ・脚(ヘラミガキ)	床
	5	土師	鉢?	8.4			1/4	口縁指任痕・外ハケナデ・内ハケナデ・ナデ	床
H 9号住居址									
57	6	土師	壺(甕)	10.8			1/4	外ハケナデのちヘラナデ・内ヨコヘラナデ	床
H 10号住居址									
57	7	土師	環	17.0			1/3	外ハケナデのちヘラミガキ・内ヘラミガキ	床
	8	土師	器台	10.0	脚欠		2/3	ヘラミガキ	床
	9	土師	器台	環欠	12.7		1/6	外ヘラミガキ・内ヘラナデ・2段穿孔(9孔)	床
	10	土師	壺	13.2			1/6	外ハケナデ・内ナデ・指任痕	床
H区 検出面									
57	11	土師	壺(甕)	16.4			1/3	ヨコナデ・外ハケナデ・内ヘラナデ	
	12	土師	壺(甕)	19.0			1/3	(ヘラナデ)	

古墳時代後期遺構出土土器観察表

図番号	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存度	成 形・調 整 等	備 考
				口径	底径	器高			
A 9号住居址									
57	13	土師	甕	19.3	7.5	29.3	2/3	ヨコナデ・外ヘラナデ(ミガキ)・内ナデ	床
A 14号住居址									
57	15	土師	環	13.0	丸底		1/3	ヘラナデ(ミガキ)・底ヘラケズリ・ヘラナデ	覆土
A 42号住居址									
57	14	土師	甕	16.4			1/3	ヨコナデ・外ヘラナデのちナデ・内ナデ	覆土
A 43号住居址									
57	16	土師	甕	15.2				外ハケナデ・内ハケナデのちヨコナデ・ヘラナデ	覆土
	17	土師	甕	4.7			1/4	ヘラナデ	覆土
D 7号住居址									
57	18	土師	環	13.6			1/6	ヘラミガキ	覆土
F 9号住居址									
57	19	土師	瓶	18.0	4.5	14.3	完形	外タテヘラミガキ・内ヨコヘラミガキ	覆土
Y 9号住居址									
57	20	土師	環	11.3	丸底	5.4	1/2	外ヘラケズリのちヘラミガキ・ヘラミガキ・ヘラ刻文	カマド
	21	土師	環	13.0	丸底	5.0	1/3	ヘラミガキ・内黒色	カマド
	22	土師	高環	14.2	9.1	12.6		外ヘラケズリのちヘラナデ・内ヘラミガキ	カマド
	23	土師	高環	環欠	10.3		ママ	外タテヘラミガキ・内ヘラナデ	カマド
	24	土師	高環	環欠	9.4		ママ	外タテヘラミガキ・内ヘラナデ	カマド
Y 17号住居址									
57	25	土師	環	13.4	丸底	3.8	1/4	ヘラミガキ	床
	26	土師	甕	15.2			1/3	ヨコナデ・外ヘラナデ・凹凸・内ヘラナデ	床
Y 37号住居址									
57	27	土師	環	11.4	丸底	3.7	1/3	外ヘラミガキ・内ヘラナデ・底ヘラケズリのちナデ	覆土
	28	土師	高環	15.9	脚欠		1/2	ヘラミガキ・内黒色	覆土

3 奈良時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布 (図58)

古墳時代後期よりも分布範囲を広げるものの密集度は低く、C区・Z区より以北は散発的なありかたを示す。集落の主形成は南微高地に求められるが、B10・13号住居址が重複関係にある他は単独で散在する。重複する住居址も遺物の混在を考慮すれば単独遺構の可能性がある。A区からB区にかけて住居址の集中が見られる。

(2)住居址

A区5軒、B区3軒、C区2軒、E区・F区・Y区各1軒、X区3軒の総計16軒検出したが、全形態を露呈できたのはE区とX区の2軒にすぎない。

形態は方形を基本とする。規模は小形のものが多いがE区17号住居址の主軸3.1m・短軸2.9mを最小に、B10号住居址の主軸5.7mを最大計測値とする。一辺3m代5軒、4m代6軒、5m代2軒である。

主軸方向は西に偏するもの7軒は22°～35°の間にあり、東に偏するものは31°～80°間に散在する。

主柱穴は4個方形配列が想定されるが、それらしきものはX12号住居址に認められるにすぎない。住居址の小形化に伴う現象であろう。

カマドは主軸壁中央に設置されるが、A15号住居址のみ右に若干偏している。形態は未検出の遺構が多いので明確ではないが、X23号住居址では粘土製両袖形態である。多くはこの形態のカマドであろう。A37号、C2号住居址は突出カマドでこの形態の出現に注意する必要がある。

床面は平坦で部分的に堅緻である。

(3)掘立柱建物址 (図102・103)

A区・D区・F区に各1棟、X区2棟の総計5棟を確認した。柱穴から時期を見極める遺物の出土が認められなかったが、他の遺構との重複関係から奈良時代のもつと推定する。ただし、A区のものとは同時期どうしが重複しており後出の可能性もある。A1号は3間×2間の建物址が予想されるが、長軸(東西)間の掘方は他と趣を異にし柱穴様になり、1間×2間の形態になるかもしれない。F1号は方形を呈し、東西軸は3間形態の掘方である。X区には2か所で検出されている。1号の北隅は補修のためか掘方が重複しており、2号は3間×1間を4間×1間に建て替え増築している。

(4)遺物

該期の遺物の特徴は須恵器の多量出土をあげることができるが、本遺跡の場合はその出土量が少ない。また、底面を回転ヘラケズリにより仕上げ高台を付す特徴的な坏は認められない。坏はログロからの切離しをヘラオコシによるものと回転ヘラ切離しがあり、A9号住居址の須恵器坏に代表する。土師器甕も烏帽子形態の特徴的な器形で、口縁部が大きく外開するものの明確な頸部を形成しなく、体部の丸味が少なく長胴化し、平底になる。最大径は口縁部にあるものが多い。調整は外面タテハケ、内面ヨコハケが多用される一方、外面の頸部以下がタテヘラケズリを施されるものも多くなる。須恵器の器種には坏・高台坏・蓋・浅鉢・横瓶・甕がある。土師器には坏・盤・甕の器種がある。

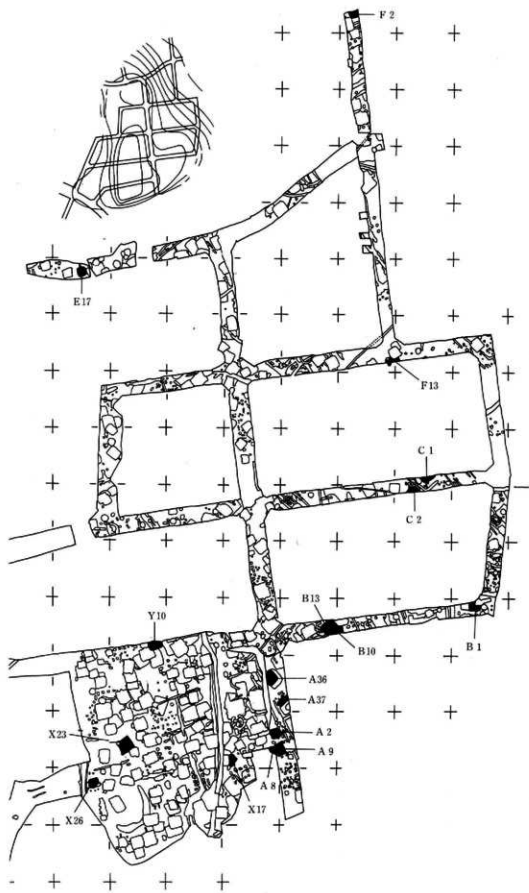


图58 奈良時代住居址分布图

4 平安時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布 (図59)

III章4節で記載した事項はおおむね該期にあてはまる。ただし、遺構の分布範囲は調査地の全域に認められるものの、居住域は高野神社参道を境にその西側には全く展開が見られない。住居址の密集度を詳細に観察すると、調査地の南側微高地上に広範囲な集落が認められ、他は小規模な密集を見せる。すなわちZ区から南、B区西のA・X・Y区に大きな密集域がある。A区北とW区東・D区西の交差部、F区北側を中心に、G区南側からA区にかけ部分的な密集域を見出す。

(2)住居址 (図60～101)

形態は多岐にわたっており、基本形態は方形から長方形を基本とするものの、カマドの存在や形態規模が判明するもののみ抽出すると、主軸より対軸の数値が大きいものが多い。

規模は形態が判明しているもののうちY48号住居址の主軸6.2m・対軸6.3mを最大にして、X24号住居址の1.8m・1.7mの数値を最小とする。大多数は小形化し一辺3～5m内に集中する。計測した72軒のうち5m以上の大形に属するものは17軒にすぎない。F区(10号)・W区(2・8号)Z区(1号)に点在するのに対し、他は南側微高地上に散在する。A16・38・39・43号、X9・43号、Y4・6・14・39・48・61・68号各住居址がこれにあたる。この在り方を見ても本遺跡の中心がここにあったことを伺わせる。3m未満の住居址が9軒存在する。これらはカマドを有し、居住形態であるが、家族生活をするには余りにも小さすぎるのではないと思われる。作業小屋であろうか。ちなみに分布はA区北(25号)・B区東(3号)に各1軒、X(19・20・24号)・Y(19・21・27・56・65号)区に8軒認められ、集落の中心付近に存在するものは3軒にすぎず、他の5軒は西縁部に位置することからして住居と異なった用途を考える必要があるかもしれない。

主軸方向が判明している98軒のうちN-W間にあるものが51軒あり、9°～45°間に46軒が集中し北壁カマドを構築する。一方、N-E間に38軒存在するもの前者よりもばらつきがあり、60°～81°に密集し23軒を数える。西壁・南壁カマドを有するS-W間に2軒、S-E間に3軒あるにすぎなく、特異な存在である。ちなみに北壁カマドで南北軸線に4軒ある。

主柱穴が確認された住居址はE12号、X33号、Y26・68号の4軒にすぎなく、4m後半代以上数値の大形に属する住居址である。他の住居址は小形のためか明確な小屋組痕は確認されない。

カマドは北壁または東壁に構築される例が多いことは前述した。その多くの形態は石芯製両袖形のもので推定されるが、石組を残存しているものはY53号住居址のみで、構築石材の散在が認められた住居址はF1号・W11号・X44号・Y3・26・41号の各住居址にすぎない。粘土製両袖形態で確認されたものはX23号・Y67号住居址を抽出する。突出カマドの検出例も多く、A37号、B3号、C2号、D2号、F7・9号、G2号、W8号、Z1・2号、X12・14・19・22・35・43号、Y1・15・18・21・23・28号の22軒の住居址に造られる。これらは壁の中心付近に設けられるのが通常とするが、A区・D区のもの南西隅に構築される。突出部壁面および火床は焼土塊化しており、A37号住居址には軸石が配される。隅(コーナー)カマドはA40号・Y26・45・58・60号住居址が南東隅に、A12・15号住居址は北東隅に、A42号・Y2号住居址が北西隅に、A40号・D2号・W11号・Y3号住居址が南西隅にそれぞれ設けられる。床面が堅緻でカマドを有しない住居址形態のA2・16・26号、X8・13号、Y13号等があり、作業施設と考えたほうが良いかもしれない。ただし、A16号住居址は中央部の床面の締まりが非常に良く、焼土が認められ、大形の遺構であることから集会所的な用途が考えられる。

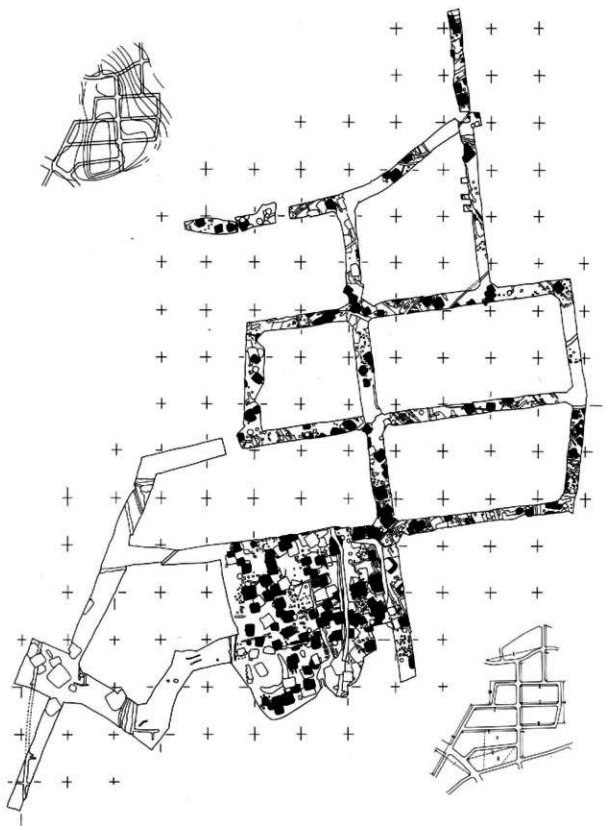


图59 平安时代住居址分布图

床面はカマド前面を中心にして堅緻なものが多い。住居址中央が堅緻で、壁下に周溝状大溝が掘られるA16号、F1・10号、W6号、X13・37号、Y13・37・38・68・70号住居址がある。湿気抜き遣の遺構であろうか。

(3)柱穴(土壌)群(図104)

A区に3か所、Y区に3か所確認される。共に該期の住居址が密集しない地点からの検出で、簡単な小屋組の建物址が存在した可能性が高い。調査結果から配列や規模等を見出すことはできなかった。

(4)小鍛冶址

X8号、Y48号住居址で鍛冶炉が確認されている。前者はカマドを持たないものの堅緻な床面があり、明らかな工房址である。炉は長さ60cm・深さ10cm程の十字形を呈する。後者はY48号住居址の南西に位置し、長さ43cm・深さ10cmを測り、形態は前者と同様である。底面・側面の一部は青灰色の焼土塊化している。近接して土塊状のピットが認められるものの金床石・鉄滓等は見られなかった。羽口は前述のX8号住居址から確認されている他X15号・Y5号土塊、X12号溝址、X2号井戸址から出土している。これらは先端が高熱のため溶解しており、後端近くまで変色していることから使用済みの廃棄物である。X12号溝址からは亀の子形鉄滓や多量の小鉄滓が認められた。

(5)井戸址(図105・106)

E区とX区から石組の井戸址を各2基、計4基を検出した。X区の使用は遺構密集度からその存在が理解できるものの、E区のものには遺構が散在する中での存在で、その意義は今のところ不明である。近隣に密集する集落があった可能性もある。X区は2基の同時使用が考えられるが、E区は2号井戸址を廃棄後新たに1号を構築している可能性が高い。構築は直径2mを超える土塊を掘り、中央付近に下から石組し、角礫を小口を揃え徐々に積み上げ、隙間に拳大の河原石をつめる。底面の砂層には底を抜いた曲物を埋設する。E区・G区・Z区に盛られる大形の円形土塊も掘り抜きの井戸址と見られるが、石組井戸址に比べ浅い掘り込みで井戸としての機能および水位に疑問が残る。ちなみに調査時の水位は井戸址の底面より低く現在の地表から約2.5m下の砂利層である。

(6)土壌墓(図107)

A区5基、F区1基、X区4基の埋葬人骨を確認した。土塊の形態はA1号が不整形円形で、A2号・X1号が隅丸長方形である他は長方形を呈する。A区のものには横臥屈葬で埋納され、X1号は伸展葬である。F1号とX48号住居址内土塊墓が小児埋葬である他は成人である。副葬品類は見られない。X4号は不整形円形の土塊に頭部を北にした馬が埋葬される。

(7)火葬址(図107)

X区の西側で居住域範囲外から3基検出した。平面形態は凸形を呈し、機能的には本体部と空気取入坑部に分かれる。本体部は2号が隅丸長方形を呈するのに対し、他の2基は長方形になる。主軸は南北方向にあり、50cm内外の規模になる。検出時の深さは5~15cmと浅かったが本来はもっと深い土塊が想定される。空気取入坑は本体中央部に溝状に掘込まれ西壁から突出し、底面には炭化物が厚く堆積していた。突出部を除き各壁は強い火熱を受け焼土塊化する。火葬骨は小骨片が数点確認されているにすぎないが、小児用火葬施設と考えている。

(8)溝址(図119~123)

Y1号溝址(117図)はX・Y区を南北方向に縦貫する大規模な溝であるが、Z区には至っていない。用途不明の遺構が多い中で、南側微高地から田千曲川の低地に流れ落ち排水の用途が考えられる。X2号溝址は北側に橋状の高まりを残し他は円形を呈するが、内部は不規則な土塊やピットが掘られているのみで特別な施設を見出すことができなかった。

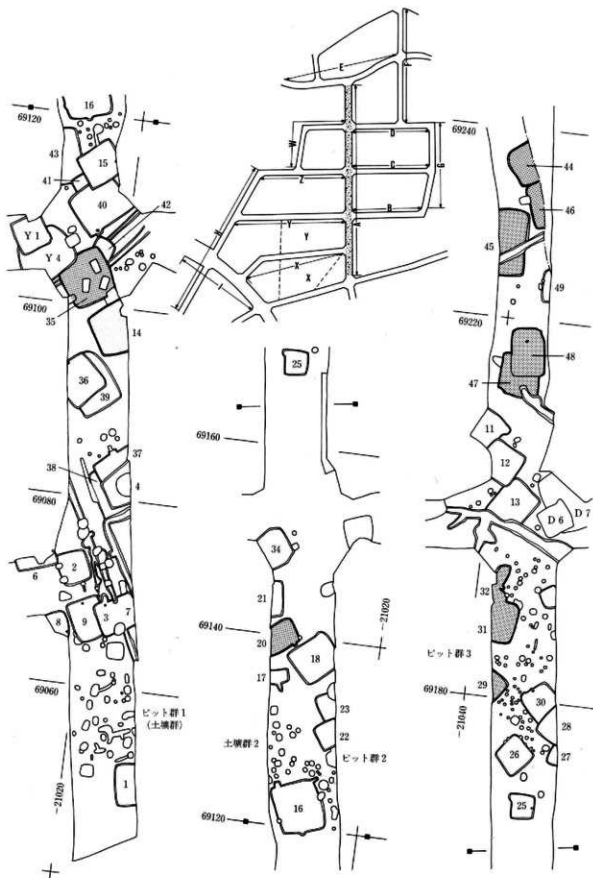


図60 A区住居址・土坑ピット群分布図(粗アミ部弥生時代)

奈良・平安時代住居観察表(I)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
A区							
1号住居址	61	方形?	4.5×	N14°W	南西隅焼土		
2号住居址(奈良)	61	方形	3.4×3.3	N33°W	床堅織		124
3号住居址	61	隅丸長方形?	×3.5	N55°E	床堅織		124
4号住居址(土壌)	61	台形?	×3.8	N48°E			124
6号住居址	61	方形?	4.4×	N69°E	東壁カマド・床堅織	灰輪軸	124
7号住居址	61	隅丸長方形	3.5×4.4	N27°W	北壁西側カマド・床堅織・各隅柱穴?	刀子・砥石	124
8号住居址(奈良)	62	隅丸方形?		N60°E	東壁中央?カマド	棒状鉄	125
9号住居址(奈良)	62	隅丸方形	4.4×4.4	N27°W	北壁中央カマド		124
10号住居址	62	隅丸方形	3.9×4.2	N27°E	北壁中央カマド		125
11号住居址	62	方形?		N54°W			125
12号住居址	62	隅丸方形	3.9×4.0	N26°E	床堅織・北東隅焼土		125
13号住居址	62	方形	4.2×4.7	N61°W	床堅織・西壁カマド		
15号住居址	63	方形	4.2×3.8	N49°E	東壁南側焼土		125
16号住居址	63	隅丸方形	5.5×5.1	N20°W	床堅織部を除き大周溝状	釘?	126
17号住居址(土壌)	63	長方形	2.1×1.4	N70°E			
18号住居址	63	長方形	4.9×4.1	N47°E		釘?	
21号住居址	63	方形?	3.8×	N8°W			
22号住居址	63	方形?	×2.7	N43°E			125
23号住居址	63	方形?					
25号住居址	64	方形	2.4×2.7	N81°E	東壁カマド・床堅織・L字状配石		126
26号住居址	64	方形(不整)	3.3×2.8	N34°E	床堅織		125
27号住居址(土壌)	64						
28号住居址	64	方形?			土壌状掘り込み		125
30号住居址	64	長方形?	×3.1	N35°W	北壁中央カマド		126
33号住居址(土壌)	64	隅丸方形?	×2.2	N46°E			
34号住居址	64	隅丸方形?					126
36号住居址(奈良)	65	方形	4.7×4.6	N31°W	北壁中央カマド・カマド周辺堅織		126
37号住居址(奈良)	66	方形	5.5×	N24°W	北壁突出カマド・袖材・カマド周辺堅織		126
38号住居址	66	隅丸方形	6.0×	N21°W	37号と重複		
39号住居址	65	隅丸方形	5.5×5.3	N31°W	36号と重複・床中央炭化物		
40号住居址	65	長方形	×4.7	S42°E	南東隅突出カマド・カマド周辺堅織	灰輪軸	126
41号住居址	65	方形?			15号・40号と重複		126
42号住居址	65	隅丸方形?	2.8×	N49°W	北西隅焼土・構築石材		126
43号住居址	65	隅丸長方形?	5.9×	N30°W	床堅織		
49号住居址	65	隅丸方形?	3.5×	N14°W		灰輪軸	

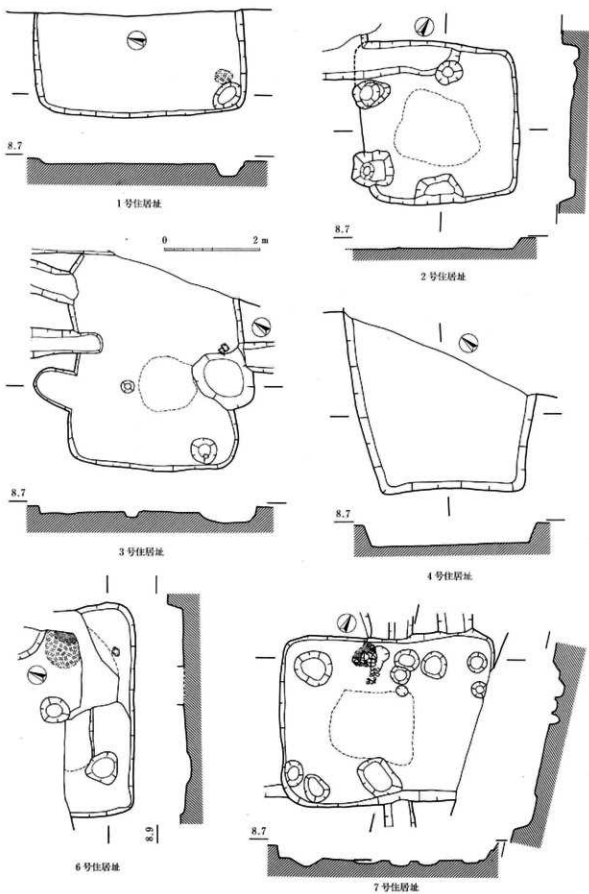


图61 A区住居址实测图(1)

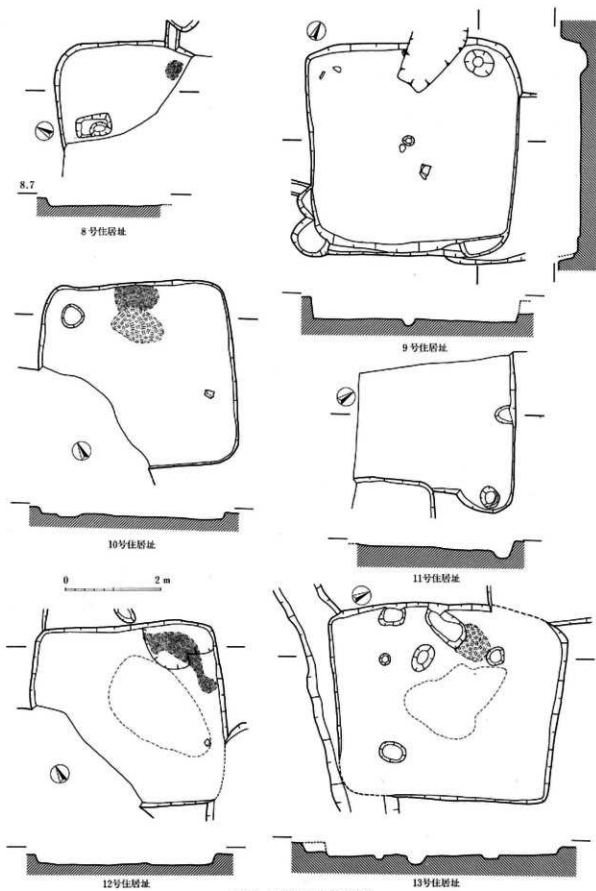


图62 A区住居址实测图(2)